

# ノース 意識革命

---

EDUCACION FUNDAMENTAL

SAMAEL AUN WEOR

根元的教育

---

サマエル・アウン・ベオール 著

---

新泉社

---

## はじめに——ノーススは宇宙的な叡智である

ノースス (GNOSIS) とは、ギリシア語が語源で、その意味は「知ること、知識」であるが、単なる表面的知識を言うのではなく、深い知識、叡智および直観的認識力そのものを示す言葉である。

人類が何世紀にもわたって伝統として守り、受け継いできた知識、神話や古代都市の神殿、中世の錬金術、宗教の奥義などの叡智は、あまりにも広大無辺であり、多様化してしまったために、現在ではそのほとんどが形骸化し、われわれはその本当の意味や価値を知ることがなくなってしまった。秘教的な形で極少数のイニシエイトたちにその叡智の真髄は伝えられてきたが、現在ではその真の意味、価値が見失われてしまった。この見失われた知識や神秘の中にこそ、宇宙創造のころから永遠に変わることなく存在し続けるユニバーサルな叡智 (ノースス) があるのである。この叡智 (ノースス) は、まさしく創造主自身から発せられた光そのものである。

著者サマエル・アウン・ベオール (SAMAEL AUN WEOR) は、見失われたそれらすべての神秘に光をあて、簡潔に総括し、体系化し、現代人のわれわれにも理解し、実用できるようにした。それが「近代的ノースス」である。

「近代的ノースス」の創始者である彼が明らかにしたのは、第一に性の秘密であり、次にそれともなった心理の浄化、心理的ワークである。

人類の歴史には、人類を導く教育者となる人が時に現れるが、その目的は、人類がその目的を失い、道を踏み外した時に正道を示すことにある。まさしくサマエル・アウン・ベオールはわれわれ人類を導くグループに属している。彼の役割はわれわれに最後の救世のメッセージを与えることである。彼は存命中、八〇冊近い本を世に問い続け、中南米を中心に講演活動を精力的に行った（著者についての詳しい説明は、同著者による『ノース心理革命』新泉社刊を参照のこと）。

本書『ノース意識革命——根元的教育』は、サマエル・アウン・ベオールがメキシコで一九六〇年代後半に著作した『EDUCACION FUNDAMENTAL』（スペイン語）の日本版である。原書名『根元的教育』が示すように、「教育」に対してノースの光をあて、教育のもつ真の意味を解き明かしたものである。『ノース心理革命』が心理変革のための第一歩として出版されたのに続いて、本書は意識の変革とそのための教育の重要性について書かれたものである。

現在の日本の教育は、本当に理解するということなく知識を詰め込み、記憶させ、その記憶の量（質ではなく）や効率の良さによって子供の能力を評価していると言っても過言ではないだろう。そしてその結果が示すのは、教育現場が抱えている深刻な問題である登校拒否、陰湿なイジメ、生徒同士による殺人、教師の異常行為などである。さらには大人たちの金儲けに興じた行動、環境破壊、戦争なども、真の教育が不在であったことを証明するものである。

「何のために、学校へ行くのか」「なぜ、知識や情報を得ようとするのか」と問われて、「良い大学へ入るため」とあるとか、「技術や知識を身につけて、高収入の職につ

くため」と答える人は多いだろう。確かにそれも重要なことの一つであるが、第一義的なことではない。現代のわれわれは目先だけのことにとらわれ、この短い七〇―八〇年の生涯がすべてであると考えている。

昨今、教育改革が叫ばれ、至るところでその研究や学習会、講演会が開かれているが、それらに参加するわれわれ自身の意識、社会の意識、また子供自身の意識がそのままであるならば、一体、何を変えることができるといえるのであろうか。意識を変えることなくして、真の教育改革を成就させることは不可能ではなからうか。

「教育」の真の目的は、まさに意識の変革にある。意識を目覚めさせ、自分自身を統合的に識る（自分は誰なのか、どこからやって来たのか、どこに向かって進んでいくのか、生きる目的は何なのか）ということを教え、導くのが真の「教育」である。

本書では、教育の本質、教師や親の役割、人の意識を目覚めさせるための道しるべが、様々な角度から述べられている。著者独特のアフォーリズム調の語りかけは、まさに時空を越え、民族の違いを越えて、読者の意識の中にストリートに入ってきて、震撼させることであろう。本書を通して「意識の変革」を目指し、真の教育改革に参画する一員となっていただければ、読者の望外の喜びである。

はじめに 1

1 自由なイニシアティブ(自発性) 7

2 模倣 16

3 権威(オーソリテイ) 24

4 規律 33

5 何を考えるか、いかに考えるか 42

6 安心の追求 49

7 野心 56

8 愛 61

9 マインド(想念) 68

10 聴くということ 77

11 知恵と愛 82

12 寛容さ 87

13 理解と記憶 93

14 統合 99

15 単純さ 105

16 殺人行為 111

17 平和 119

18 真実 127

19 知性 132

20 天職 138

21 三つの脳 150

22 善と悪 155

23 母性 163

24 人のパーソナリティ(人格) 170

25 十代の少年・少女 181

26 青年期 187

27 壮年期 197



28	老年期	204
29	死	210
30	真実の体験	214
31	心理革命	219
32	心理的反抗	223
33	進化・退化・革命	229
34	統合された個人	233
35	人間機械	238
36	親と教師	245
37	意識	250

装幀 勝木雄二

## 1 自由なイニシアティブ（自発性）

世界のあらゆる国の何百万人もの学生は、その目的や理由を知ることなく、ただ無意識的に、機械的に、従属的に学校や大学に毎日通っている。

そして、数学、物理、化学、地理などを勉強するように義務づけられている。

学生はマインド<sup>\*</sup>に、毎日、情報を受け取っているが、一瞬たりともその情報は何のためなのか、その情報を受け取る目的は何であるのかを考えようとはしない。

どうしてわれわれは情報で自分自身を満たそうとするのだろうか。それは何のためなのだろうか。

学生は実に機械的な生活を送っている。インテレクチュアル<sup>\*</sup>な情報を、それが当てにならない記憶として、蓄積しておかなくてはならないものと知りながらも、受け取っているのである。それがすべてである。

教育のもつ本当の意味について考えようともせず、親たちがそう命じるから、ただ学校や大学へ行っているのである。それだけのことである。

教師も生徒も、一度も次のような問いかけを自分にしてみようと思わない。——どうして私はここにいるのか、何のためにここに来たのか、私をここに来させた本当の秘密の動機は何なのだろうか。

教師や生徒は意識が眠った状態で生きている。まるでロボットのように行動し、どうしてなのか、何のためにかということをも当然に知ることなく、無意識に従属的な状態で学校や大学へ通っている。

ロボットでいるのはもうやめ、意識を目覚めさせる必要がある。試験に通るためになぜ過酷な奮闘をしなければならぬのか、なぜ決められた場所で生活し、毎日の勉強に苦闘しなければならないのか、そして驚いたり、苦しんだり、悩んだり、学友とともにスポーツをしたり、喧嘩をしたりなど、これらすべての奮闘は何のためなのかを自分自身で発見する必要がある。

教師は、生徒が意識を目覚めさせる手助けができるように、もっと自分自身の意識を目覚めさせなければならぬ。

学校や大学の椅子に座って、理由や目的を知らずにただ情報を受け取り、そしてそれを記憶していなければならぬ多くのロボットたちを目にするのは、何と嘆かわしいことであろうか。

少年たちは単に卒業できるかどうかだけを心配している。というのは、彼らは生活の糧を得るためや、職業につくための準備を自分自身でしなければならないと言われてきたからである。彼らは未来に関して多くの夢や空想を描きながら勉強しているが、現実を真に知らず、また物理、化学、生物、数学、地理などを学ぶ本当の目的を知らない。

現代の少女は、良い夫を得るためであるとか、あるいは将来夫に見捨てられたり、未亡人になったり、独身で過ごすことになった場合、生活の糧を得られるように勉強するのである。

マインドの中に宿るすべての空想というのは、自分の将来がどうなるのか、また何才で死ぬのかというこ

とを彼らは実際知ることがないからである。

学校での生活は非常にあいまいで、支離滅裂で従属的であり、ときには、実生活において何の役にも立たないような教科を子供に勉強させようとする。

今日、学校で重要なことは学年を終えること、ただそれだけのことである。

以前には、少なくとも学年を終えるということ、このことについて何か別な倫理感があつた。しかし今はそんな倫理も何もない。どんなできの悪い生徒であろうと、親たちが教師に極秘に付け届をして、学年を終えるということも可能なのである。

女生徒は、学年を終えるためにしばしば男性教師に取り入るということがあるが、その効果たるやすばらしいものである。教師が教えた内容が全く理解できなかったとしても、とにかく試験でいい点数を取って学年を終えることができるのである。

学年を終えるのにとっても賢い生徒がいるが、これは多くの場合ずるがしこさによるものである。

ある試験（あるばかげた試験）にいい点数をとった少年がいたとしても、試験されたその科目に関して本当に客観的な意識をもっているとはいえない。

生徒は、勉強し試験を受けた科目をオウムやインコのように機械的に繰り返す。

それは、その科目について自意識が目覚めているのではなくて、単に記憶し、学んだことをオウムやイン

こみたいに繰り返すだけのことなのである。

知的であるという意味は、試験にパスするとか、学年を終えるということではない。学校で決している点数を取ることはなかったが、とても知的な人物をわれわれは知っている。

学校ではとてもできない悪い生徒で、文法や数学の試験で一度もいい点数をとったことのなかった者が、すばらしい作家や偉大な数学者になったということは、われわれのよく知るところである。

解剖学において非常に成績の悪かった学生が、大変苦しんだ後、やっと解剖学の試験で合格点をとった。その学生が今日では解剖学に関するすばらしい本の著者になっている。

学年を終えるということは、必ずしも知性がとてもあるということではない。一学年も終えることができなかったが、しかしとても知的な人もいたのである。

学年を終えるということより、またあるいくつかの科目を勉強するということがより重要なことがある。それは勉強する科目に関して、客観的な、明確な、完全に目覚めた意識をもつ必要があるということである。

教師は、生徒が意識を目覚めさせるための手助けとなるように自ら努力をしなければならない。そして教師の努力のすべては、生徒の意識の目覚めに向けられなければならない。生徒たちが自分の勉強する科目に関して完全な自意識をもつことは緊急に必要である。

記憶する、オウムのように学ぶということは、言葉の最も完全なる意味においてばかげたことである。

生徒たちは難しい科目を勉強したり、学年を終えるためにそれらを記憶にとどめるよう義務づけられているが、その後の実生活では、そのような勉強は何の役にも立たないし、それだけではなく記憶というものはあいまいで忘れられたりする。

男子生徒は、職を得るためや生活の糧を得るために勉強し、その後幸運にも希望の職についたり、専門職を得たり、医者、弁護士などになれたとしても、得るものはいつもと同じく、ただ歴史を繰り返すということだけである。結婚し、苦しみ、子供をもち、意識が目覚めることなく死んでいく。自分自身の人生について意識を目覚めさせることなく死んでしまうだけなのである。

女生徒は結婚し、家庭をつくり、子供を育て、近所の人や夫や子供と喧嘩をしたり、また離婚や再婚、そして未亡人、老婆になって、無意識で眠りこけたままの人生を送った後、最後にいつものように存在の痛ましいドラマを繰り返し、死んでいくのである。

教師は、人はみな意識が眠ったままの状態であるということに気づこうとしない。生徒を目覚めさせるために、教師自身も緊急に目覚めなければならないというのに。

頭に多くの理論を詰め込んだり、またダンテやホメロスやヴェルギリウスの文を暗唱したりしても、それは何の役にも立たない。われわれ自身について、あるいは勉強する科目や実生活について、意識が眠ったままの状態であるならば、そして客観的で明確で完全な意識をもっていないのならば、それは一体何の役に立つというのか。

もしわれわれが創造できる人にもなれず、意識も目覚めず、知的な存在にもなれないのならば、教育は何の役に立つというのであろうか。

真の教育とは、読み書きを学ぶことではない。どんな愚かな者でも、ばかな者でも読み書きはできる。

われわれは知的にならなければならない。意識が目覚めたとき初めて、われわれの内に知性が目覚めるのである。

人の意識の九七パーセントが潜在意識で、三パーセントが目覚めた意識である。

意識を目覚めさせる必要がある。潜在意識を目覚めた意識に変え、一〇〇パーセント目覚めた意識をもたなければならない。

人は肉体が眠っている間に夢を見ているだけではなく、肉体が眠っていないとき、起きている間にも夢を見ている。

夢を見るのをやめ、意識を目覚めさせなければならない。その目覚めるというプロセスは家庭から、そして学校から始めるべきものである。

教師の努力は、生徒の意識の目覚めに向けられるべきである、それを単に記憶させることだけに向けてはならない。

生徒は、自分自身で考えることを学ばなければならない。単にオウムやインコのように他人の理論を繰り返すことだけを習得して終わってはいけない。

また、教師は生徒の恐怖心をなくすように奮闘すべきである。

教師は、生徒が勉強するすべての理論に対して建設的な態度で臨むならば、意見を異にし、批判するという自由を許すべきである。

学校や大学で教えられるすべての理論を、独断的な方法で生徒に受け入れさせようとするのは愚かなことである。

生徒は自分自身で考えることを学ぶために、恐怖心をなくす必要がある。勉強している理論を分析するには、恐怖心をなくすることが急務である。

恐怖心は知性に対する障害の一つである。恐怖心をいだいている生徒というのは、意見を異にしようとする勇氣もなく、また様々な作者の言うことをすべて盲目的に受け入れてしまふ。

もし教師自身に恐怖心があるのなら、大胆さについて語ってもそれは何の役にも立たないだろう。教師は恐怖心から解放されていなければならない。批判や何を言われるかなどということを恐れる教師は、本当の知性をもった人とは言えないのである。

教育の真の目的は、恐怖心をなくし意識を目覚めさせることにある。

もしも恐怖心をもち続け、そして無意識の状態であり続けるのであれば、試験にパスすることは一体何の役に立つというのだろうか。

教師は生徒が人生において有益な存在となるように、学校にいるときから手助けする義務がある。しかし恐怖心がある間は、誰も人生において有益な存在になることはできないということを知らなければならない。

恐怖心でいっぱいの人他人の意見に異論をもつ勇氣がない。

恐怖心でいっぱいの人自由なイニシアティブをもつことができない。

人から何か言われることなく、命令されることなく自発的に行動できるように、生徒が恐怖心から完全に解放され、自由でいられるよう助力するのは、明らかに教師の役目である。

生徒が自発的かつ創造力のある自由なイニシアティブをもつためには、恐怖心をなくすることが緊急に必要なである。

生徒が自由で自発的な独自のイニシアティブによって、学んでいる理論を自由に分析し、そして批判できるようにになったならば、彼らは単に機械的で従属的で愚かな存在というのではなくなる。

生徒に創造力のある知性が生まれるためには、自由なイニシアティブが緊急に必要なである。

意識をもって勉強ができるようになるためには、すべての生徒に何の条件も付けずに、自発的かつ創造力のある表現の自由というものを与える必要がある。

批判や何を言われるかということを恐れないとき、また教師の厳しい監督や、規則などを恐れないとき、そこで初めて自由な創造力が表現されるのである。

人間のマインドは、恐怖心やドグマティズム（独断にはしる傾向）によって退廃している。恐怖心のない、自由で独創的なイニシアティブによって緊急にマインドを再生する必要がある。

われわれは自分自身の人生について、意識を目覚めさせる必要がある。その目覚めのプロセスは、教室にいるときから始められなければならない。

もし意識を目覚めさせることなく眠ったままで学校を卒業するのならば、その学校は、われわれにとって何の役にも立たないところということになるだろう。

恐怖心の根絶された自由なイニシアティブというのは、自発的で純粋な行動を引き起こささう。

自由なイニシアティブによって、生徒は学校で学んでいる理論のすべてについて議論する権利を有するべきである。

このように恐怖心をなくし、学んでいるものを議論し、分析し、瞑想し、そして健全に批判することによってのみ、それらの科目に関して意識的になることができるのである。記憶していることをただ単に繰り返すオウムやインコにならずにすむのである。

**\* マインド** 日本語の「想念」あるいは「想念帯」という言葉に最も近い。意識的にしろ無意識的にしろ「印象」や「経験」が記憶される場所である。また想念が展開されるスクリーンの意味にも使われる。

**\* インテレクチュアル** インテレクトの形容詞型。インテレクトとは、ちょうどデータベースのように、外部からの情報を収集するわれわれの機関。理性は物事を論理的に判断するが、それに比較してインテレクトは表面上の組合せしかできない。そして日本語に訳せば「理屈」。文中の「インテレクチュアルな情報」とは単なる知識的な情報という意味。

## 2 模倣

恐怖心は自由なイニシアティブ（自発性）を妨げる、ということをする度に様々な角度から語ってきた。何百万という多くの人々が経済的に悪い状態にあるというのも、疑いの余地なく、われわれが言っているところの恐怖心にその原因がある。

怖がっている子供は愛する母親を探し、安心を求めて母親にすがりつく。怖がっている夫は妻に執着し、自分は彼女をより一層愛していると感じる。また怖がっている妻というのも夫や子供を求め、彼らをより深く愛しているのだと感ずるのである。

心理学的観点から、恐怖心はときには愛という衣服で変装することもある、と言われるが、このことはとても興味深いことである。

精神的価値を認めようとしない人、内的に貧しい人というのは、それを補うためにいつも外側に何かを探そうとする。

内的に貧しい人というのは、絶えず好奇心が強く、ばかげたことやうわさ話が好きで、快楽を求め、うかれ騒ぎをして生きている。

彼らは、恐怖心に追いまわされて生きており、それがもはや自然であり、夫や妻や両親や子供、退廃した

古い習慣などに執着するのである。

病に苦しみ、心理的に貧しい老人というのはみな共通して、恐怖心で満ちており、保証を求めて底なしの貪欲さでお金や家の風習、孫、そして過去の思い出などに固執する。このことは、われわれが注意深く老人を観察すればよくわかることである。

人々は恐怖心におそわれるたびに、「尊重すべきこと」という名目を盾にとって隠れてしまうのである。つまり、国や、家庭、人種などによるしきたりに従うのである。

実際すべてのしきたりは、真の価値がなく、空っぽで、何の意味もない単なる繰り返しにすぎないものである。

人はみな、他人のまねをするという傾向が非常に強いが、このまねるということは恐怖心の産物である。

恐怖心をもっている人は執着している対象のまねをする。夫を、妻を、子供を、兄弟姉妹を、保護してくれる友人などをまねるのである。

模倣は恐怖心の結果であり、模倣は自由なイニシアティブを完全に破壊してしまうものである。

教師は、学校や大学で生徒にまねをするよう誤った教育をしている。

絵画の授業で生徒に模写するよう教え、樹木や家、山や動物などの形を絵にするように言うが、それは創造するというのではなく、模倣する、正確に描写するということなのである。

創造するということは、模倣することでも正確に描写するということでもない。創造するということは、われわれを魅了する木であるとか、美しい落日、また言葉に表すことができない旋律を伴ったすばらしい夜明けなどを、絵筆で生き生きと表現し伝えることなのである。

中国や日本の禅美術における抽象と半抽象の表現において、真の創造が見られる。チャンや禪の中国人画家たちは誰も、模倣することや正確に描写することに興味を示さない。中国や日本の画家たちは創造すること、そして再び創造することを喜びとしているのである。模倣をするのではなく、創造をする。それが彼らの仕事である。

中国や日本の画家は、美しい女性を絵に描くことや正確に描写するということには興味がない。その抽象的美しさを伝えることを楽しみとしているのである。彼らは決して美しい落日をまねたりせず、落日の魅力を抽象的美にして伝えることを喜びとしている。

重要なことは、模倣することではなく、白または黒にコピーすることでもない。美の奥深い意味を感じ取り、そしてそれをいかに伝えるかを知っているということが重要なのである。そのためには恐怖心がないこと、規則やしきたりに対する固執、また何を言われるのかという恐れ、教師の叱りに対する恐れなどをなくす必要がある。

教師は生徒の創造力を発達させる必要性を直ちに理解する必要がある。

明らかに、生徒に模倣をすることを教えるのはばかげたことである。創造するように教育するほうがよいのは明白である。

人間は不幸にもまねることだけを知っている、眠りこけた、意識のないロボットである。

他人の服装をまねる。その物まねゆえに、いろいろなファッションの流行が現れる。

他人の習慣、たとえそれが非常に間違っているとしても、それをまねる。

悪癖をまねる、あらゆるばかげたことをまねる。こうして時の流れの中で伝統や風習などを常に繰り返して生きているのである。

教師は生徒に、自立し、自分自身で考えるように教える必要がある。

教師は生徒に、コピーロボットであるのをやめるためにあらゆる可能性を提供しなければならない。

教師は生徒に、創造力を発達させるための最良の機会を与えなければならない。

生徒が真の自由を理解し、何の恐れもなく自由に自分自身で考えることを始めることが緊急に必要である。

何を言われるだろうか、ということに奴隷となって生きているマインド、しきたりや規則や因襲などを侵すことを恐れるためにまねをするマインドというのは、創造力のあるマインドではない。また自由なマインドでもない。

人々のマインドというのは、七つの封印で閉じ込められた家、新しいことは何も起こらぬ家、太陽の光が

差し込まぬ家、死と痛みだけに支配されている家のようなものである。

新しいことは、恐怖心のないところ、模倣のないところ、そして物質・金・人・しきたり・習慣などに執着してないところにだけに現れるのである。

人は、策略や妬み、家のしきたり、因襲、際限のない欲望——いい地位につくこと、昇進、社長になること、自分の存在を認めさせること——などの奴隷となって生きているのである。

教師は生徒に、この古くさい退廃的な秩序をまねる必要はないということを直ちに教えずにはならない。

生徒は自由に創造する、自由に考える、自由に感じることを緊急に学ばなければならない。

生徒は学校で情報を受け取り、人生の最良の時期を過ごす、しかしこのようなことについて考える時間はないのである。

意識のないロボットの生活を十年間または十五年間送り、意識が眠ったままで卒業しているにもかかわらず、彼らは非常に目覚めた状態で卒業したと思込んでいる。

人のマインドは保守的、反動的な考えで瓶詰めにされて生きている。

人は本当に自由に考えるということができない。なぜならば恐怖心でいっぱいだからである。

人は人生に対して、死に対して、何を言われるかに関して、噂に対して、職を失うことに対して、規則を

おかすことに対して、妻または夫を誰かに取られることなどに対して恐れをいだいている。

学校でまねをすることを教えられ、模倣者になって卒業していく。

教室で模倣することを教わってきたために、われわれは自由なイニシアティブをもっていない。

人は他人からとかく言われることに恐れをいだき、まねをする。生徒がまねをするのは、教師が彼らに対して、点を悪く付けたり、罰したり、あるいは退学させるなどの理由で恐怖心を植えつけ脅かすからである。

もし創造という言葉のもつ完全な意味において、本当に創造する人間になりたいのであれば、不幸にもわれわれが捕らえられている、すべての連続する模倣に気づかなければならない。

すべての模倣的な言動を見極める力がそなわったとき、模倣の一つ一つをじっくりと分析できたとき、そして模倣のすべてに対して意識が目覚めたとき、そのとき初めて、自発的な形でわれわれに創造する力が生まれるのである。

生徒は真の創造する人間となるために、すべての模倣から自由になる必要がある。

生徒が学ぶためには模倣は必要であると教師は考えているが、これは間違いである。模倣する者は学ぶことなく、ロボットになる。それだけのことである。

地理、物理、数学、歴史などに関する本の著者が言うことをそのままのみにし、まねをするのはもうやめよう。模倣する、暗記する、オウムやインコみたいに繰り返すということは、ばかげたことである。学ん



でいることについて、意識をもって理解することが大切なのである。

『根元的教育』は意識の科学——人間・自然・万物とわれわれの関係を明らかにさせる科学である。

ただ単にまねることだけを知っているマインドというのは機械的であり、動いている機械そのものである。創造するのではなく、創造する力もなく、真に自ら思考することもせず、ただ繰り返すだけである。

教師は、生徒一人一人が意識を目覚めさせるように配慮すべきである。

単に学年を終えることだけに神経を使っている生徒は、その後卒業して実生活においては、事務員であるとか子供をつくるだけの機械となってしまう。

話すことのできるロボットになるために十年間または十五年間学び、その間勉強した科目は少しずつ忘れ去られてしまい、ついには何も記憶に残らなくなってしまう。

もし生徒が勉強した科目に対して意識が目覚めていて、その勉強がただ単に情報、模倣、記憶だけに偏っているのであれば、別の状況になるだろう。不確かな記憶に拘束されず、意識をもって獲得した忘れることのない確かな知識を手に入れて、彼は卒業することになるだろう。

この『根元的教育』は、生徒の意識と知性を目覚めさせる手助けとなろう。

『根元的教育』は若者を真の革命の道に導くものである。

教師に「本物の教育」「根元的教育」を要求すべきである。

教室の椅子に座って、ある国やその君主に関する知識、またはある戦争に関する情報などを受け取るだけでは充分ではない。それ以上の何かが必要である。意識を目覚めさせるために『根元的教育』が必要なのである。

社会機構の中で単なる機械の部品にならないために、生徒は成熟して真に意識を目覚めさせ、知的になって卒業することが緊急に必要である。

\* チャン (Ch'an) 六世紀達磨大師が中国に創立した大乘仏教の一派。解脱の手段として瞑想と三昧を強調。この教えは、日本にも伝わり禪宗の仏教になった。

### 3 権 威（オーソリティ）

政府は権力をもっている。州や県、そして警察、法律、兵士、親、教師、宗教的先導者なども権力をもっている。

権力者には二種類ある。一つは意識の目覚めていない権力者であり、もう一つは意識の目覚めた権力者である。

意識の目覚めていない権力者というのは何の役にも立たない。今、緊急に必要とされるのは自己意識の目覚めた権力者である。

意識の目覚めていない権力者は、涙と苦痛でこの世をいっぱいにしてきた。

家庭や学校において意識の目覚めていない権力者は、無意識的、半覚醒的ながゆえに、権力を乱用しているのである。

今日、意識の目覚めていない親や教師は、盲人を導く盲目の案内人であるにすぎない。聖書にも「彼らはみな地獄に頭からまっ逆さまにころげ落ちるであらう」とある。

意識の目覚めていない親や教師というのは、本当はばかげたことであっても、彼らには論理的に正しく思

われることを子供たちに強いる。そして彼らはそれをお供たちにとって善であると言うのである。

親は意識の目覚めていない権力者である。それはあたかも彼らが自分を人類の優秀人種であるかのように、また子供をごみ屑のように扱うことがある事実からもわかる。

教師はある特定の子供たちを甘やかし、えこひいきしたり、また一方で別の子供を敬遠したりするようになる。ときには、悪くなくても自分の気にいらぬ子供を厳しく罰してみたり、その反対にえこひいきの子供に対しては、本当はそれに値しなくてもすばらしく良い点をつけてほめたりする。

親や教師は、子供や若者に対して間違った規範を押しつけている。

自己意識の目覚めていない権力者というのは、愚かなことしかできないのである。

自己意識の目覚めた権力者が必要である。この自己意識の目覚めとは、自分自身をあらゆる角度から総合的に知ることであり、われわれの中すべての内的価値を総合的に認識するという意味である。

自分自身に関して本当に全体的な認識をもっている人だけが、完全な形で目覚めているのである。これこそが自己意識が目覚めているということである。

人はみな自分のことをよく知っていると思ひ込んでいるが、この世の中で本当に自分自身を知っているという人を見つけ出すのは非常に困難である。人は自分自身に関して全く誤った観念をもっているものである。

自分自身を知るには、すさまじい自己努力が必要である。自分自身を知ることによってのみ、本当に自己

意識が目覚めた状態に到ることができるのである。

権力の乱用は無意識に起因している。自己意識に目覚めた権力者であるならば、決して権力の乱用はしないであろう。

ある哲学者たちはあらゆる権力を憎み、それに反対しているが、このような考え方は間違いである。なぜなら微生物から太陽まで、すべての被造物には段階や階級があり、コントロールし指導する高次の力と、コントロールされ指導される低次の力が存在するからである。

蜂の巣においてさえも、権力者として女王蜂が存在している。また蟻の世界においても、権力者と法則は存在するのである。この権力者の原理が崩壊したならば、無秩序状態に陥るだろう。

今日、われわれが生きている危機的時代の権力者たちは、意識が目覚めていない。この心理的事実ゆえに、人々が奴隷にされ、鎖で縛られ、また権力の乱用や苦痛を引きこす状態があるのは明白である。

教師、精神的先導者やインストラクター、政府当局者、親などは、完全に自己意識を目覚めさせる必要がある。このようにしてのみ本当により良い世界を創造することができるのである。

教師や精神的指導者は必要でない、と言うのとはばかっている。

すべての創造された世界の中に、権威の原則を否定するのはおかしいからである。

自信過剰で自尊心の強い人々は、教師や精神的指導者を必要ないと言う。

われわれ自身がつまらない存在であるということ、また悲惨な状態にあるということを認識すると同時に、われわれには権力者や教師、精神的指導者などが必要であるということも理解しなければならない。言うまでもなく、われわれを賢明に指導し、援助し、案内することができるというのは、自己意識が目覚めた人によってである。

意識が目覚めていない教師は、その権威を使って生徒の創造力を破壊してしまうことがある。生徒が絵を描くとき、教師は生徒に何を描くべきであるとか、模写すべき木々や風景についてあれこれ指摘したりするならば、教師に恐れをいだいている生徒というのは教師の課す機械的な提案から出て出ようとはしないものである。

これは創造するということではない。生徒は創造する存在にならなければならない。木を見て感じ取ったことや、揺れている木の葉を循環している生命の喜び、また自分がそこに観て取ったあらゆる奥深い意味などすべてを伝えることができるようにならなければならない。そのためには意識が目覚めていない教師が課す、意識が目覚めていない規範から抜け出すことが必要である。

意識が目覚めた教師は、魂の自由な創造性に反対をしないであろう。

意識が目覚めた権威者である教師は、決して生徒のマインドを破壊したりはしないだろう。

意識が目覚めていない教師は、その権威で生徒のマインドや知性を破壊する。

意識が目覚めていない権力者の教師は、生徒の品行を良くするため罰したり、くだらない規則をつくるだけしかできないのである。

自己意識に目覚めた教師というのは、非常な忍耐をもって生徒を教育し、生徒がそれぞれの困難さを理解するよう手助けしたりする。それは、生徒が「理解する」ということによって、自分の誤りすべてを超越し、勝利をおさめて前進することができるようになるためである。

意識の目覚めた、または自己意識に目覚めた権力者は、決して知性を破壊することはない。

一方、意識の目覚めていない権力者は知性を破壊し、生徒に重大な害を与える。

われわれが本当に自由を享受するとき、そのとき初めて知性はわれわれのもとにやって来るのである。自己意識の目覚めた権威ある教師というのは、創造力のある自由を真実尊重する。

意識の目覚めていない教師は、自分はすべてを知っていると思い込み、生命のない規則で生徒の知性を骨抜きにし、自由を剥奪する。

自己意識が目覚めている教師というのは、自分が知らないということを知っており、生徒の創造する能力を観察しながら自らも学ぶ楽しさを享受している。

生徒は、生きる上でのあらゆる困難に勝利して立ち向かうことができるよう、単なる訓練されたロボットという状態から、知的で自由な存在というすばらしい位置へ移行する必要がある。

そのためには、生徒に対して本当に関心をもった、自己意識の目覚めた教師が必要である。またそのような教師に対しては、金銭的不自由のないよう充分な報酬が与えられるべきである。

不幸にも、教師、親、生徒はみな、自分自身が自己意識に目覚めている、覚醒していると思い込んでいる。しかし、それは彼らの最も大きな誤りである。

人生で自己意識が本当に目覚め、覚醒した人に出会うのは非常にまれである。

人は肉体が眠っている間に夢を見るが、肉体が起きているときにも夢を見ている。

人は夢を見ながら車を運転し、夢を見ながら仕事をし、夢を見ながら道を歩き、四六時中夢を見ながら生きていく。

教師が傘を忘れたり、車の中に本や財布などを忘れたりするのはごく日常なことである。これらすべては、教師の意識が眠りこけているから、夢を見ているから起こるのである。

人はみな自分自身は目覚めていると思い込んでいる。それゆえ自分が眠りこけていると認めるのは非常に難しい。

自分の意識は眠りこけているのだと認めることができたならば、まさにその瞬間からその人は目覚め始めるのである。

生徒が学校にもっていかなければならない本やノートを家に忘れるという、この「物忘れ」は日常茶飯事であるが、これは人の意識が夢を見ている状態にあるということを示すものである。

街で乗り物に乗った人が、眠っていたために降りるべきところを通過してしまふということがおうおうに

してある。目が覚めて、乗り越したことに気づき、その乗り過ぎた分を歩かなくてはならなくなる。

まれに人は本当に目覚めることがある。それは一瞬であるが、底知れぬ恐怖に陥ったときなど、その瞬間自分自身を統合的な姿で見るといふことがある。その瞬間は忘れられないものである。

街中を歩き回ったのち家に戻り、その間にわきあがった考え、アイデア、起こった出来事、また出会った人や物などをすべて詳しく思い出すのはとても困難である。思い出そうとしても、記憶の中に、まさに深い眠りの状態に相当する大きな沼があるのに気づくであろう。

心理学を勉強している生徒が、一瞬一瞬目覚めた状態で生きていこうと決心したが、道で友人に出会ったり、何かを買うためにデパートに入ったりしているうち、すぐ眠りこけてしまう。何時間か後になって、四六時中警戒して目覚めた状態でいようと決心したことを思い出し、いつどこに入ったとき、あるいは誰と出会ったときに自分は眠りこけていたということに気づくのである。

自己意識が目覚めているということは確かに難しいが、一瞬一瞬警戒し、寝ずに生きるということをするならば、そういう状態に達することは可能である。

もしもわれわれが自己意識を目覚めさせたいのであれば、自分自身を統合的な形で知る必要がある。

われわれはみな、我（エゴ）をもっている。自分自身を認識し、自己意識を目覚めさせるためにはこれらを探究する必要がある。

われわれが自己観察し、欠点の一つ一つを分析し、それらを理解するのは緊急である。

マインド、感情、習慣、本能、性の領域において自分自身を探究する必要がある。

マインドには多くの潜在意識のレベル、層、区分がある。観察、分析、深い瞑想、内なる深い理解によってそれらを充分に知る必要があるのである。

いかなる欠点も、マインドのインテレクトの層からは姿を消すことができるが、マインドの他の無意識のレベルにおいては存在し続けるのである。

まず最初に必要なことは、われわれ自身の悲しみ、無益さ、そして苦痛を理解するために目覚めることである。そうすれば我（エゴ）は一瞬一瞬死に始める。心理的の死は緊急に必要である。

死ぬことによってのみ、真実に意識が目覚めた実体がわれわれの内に生まれる。その実体のみが本当に意識が目覚めた権威を行使することができるのである。

「目覚める」「死ぬ」「生まれる」これら三つの心理的推移段階が、われわれを本当に意識が目覚めた存在へと導いてくれる。

死ぬためには目覚めなければならない、生まれるためには死ななければならない。目覚めることなく死んだ人は、愚かな聖者となり、死ぬことなしに生まれた人は、まさに正義感と邪悪さを合わせた二重人格者となってしまう。

真の権威は、意識が目覚めた本質を有する人によってのみ行使できるのである。

意識が目覚めた本質をもっていない間は、おうおうにして權威を乱用したり多くの害を人に及ぼしたりする。

教師は命ずることを学び、生徒は従うことを学ばなくてはならない。

心理学者の中には従うということに異論をとなえる人もいるが、それは誤りである。なぜなら従うことを学ばなかった者は、意識が目覚めた状態で命ずるということもできないからである。

意識が目覚めた状態で命ずる、意識が目覚めた状態で従う、このことを知らねばならない。

\*インテレクト 1の注参照。

## 4 規 律

小学校から大学まで、およそ教師というものは規律をととても重要視する。この章では規律に関して詳しく考えてみたいと思う。

学校や大学を卒業した者は誰でも、規律や規則、体罰、また叱責について大変よく知っている。

規律とは、抵抗の栽培畑とも言われるが、教師は抵抗を育てるのが好きなようである。

抵抗とは、ある流れに逆らって、何か別のもので補わせようとするときに起こるものである。われわれは性的な誘惑に抵抗することを教えられ、そしてその抵抗のために自分自身をむち打ち、耐えるため自らに苦行を課したりする。

何もしたくないとか、勉強したくない、学校へ行きたくない、遊びたい、笑いたい、また教師をあざ笑ってみたいとか、規則を破ってみたいなどといった様々な誘惑に抵抗しなければならないとわれわれは教えられている。

教師は、われわれが学校の秩序を守り、勉強し、教師の前で身を正し、また友人に対しても良い行動をとれるようになるのは規律によってである、という間違った概念を抱いている。

他方、人々の中には抵抗すればするほど、あるいは拒めば拒むほどわれわれの理解がより一層増し、さらに自由に完全に勝利をおさめることができる、といった誤った概念をもっている人がいる。

彼らはあることに對して聞えば聞くほど、抵抗すればするほど、また拒めば拒むほど、より「理解」できなくなるといふことに気付こうとはしないのである。

飲酒という悪い癖を止めようと闘うならば、ある一定の期間それは姿を消すだろう。しかしマインドのあらゆるレベルにおいて、飲酒という行為について深く理解できていないのであれば、ちよつと氣を許したとき飲酒癖が途端に戻り、一度に一年分を飲んでしまうということになる。

ある期間、姦淫（性エネルギーの消耗）という悪癖に抵抗し、表面的には非常に貞淑であっても（エロティックな夢を見るとき、夢精をするということが示すように、マインドの他のレベルにおいてはものすごい好色漢であり続ける）、その後、前よりもつとひどく性エネルギーを消耗することになってしまふ。それは明らかに、性エネルギーを消耗するという意味を完全に理解していなかったからである。

多くの人は貪欲さに抵抗し、闘い、そして決められた行動様式に従ふことによって、貪欲さに對して訓練する。しかし貪欲の起こるあらゆる理由を本当に理解することはないので、奥深いところでは貪欲にならないうよう貪欲であり続けるのである。

また人は、怒りに對して自分自身を訓練するが、怒りを抑えることを学んだとしても、それはマインドの潜在意識の他のレベルに存在しつづけるのである。表面的にはわれわれの性格から消えたように見えても、ちよつと注意を怠ったとき、潜在意識の裏切りによって、われわれは怒りの雷を落とし、稲妻を生じさせる。それは予期しないときとか、おうおうにして少しも重要でないような動機によって引き起こされるものである。

人はまた、嫉妬に對しても訓練する。ついに自分は嫉妬を克服したと信じていても、嫉妬の本当の意味を理解したのでないならば、まさに根絶したと思ひ込んでいるそのときに、再び表に現れてくるのである。

完全に規律がなくなったときにだけ、そして真に自由なときにだけ、マインドに「理解」の炎が燃え上がるのである。

創造力の伴った自由というのは、決して枠組みの中では存在できないものである。心理的欠点をあらゆる角度から理解するためには、自由が必要である。そして自由になるためには、壁を倒し、鉄の足かせを壊すことが緊急に必要である。

教師や親たちが、われわれに言うところの「良いこと、有益なこと」を自分自身ですべて体験してみなければならぬ。記憶する、まねるといふだけでは充分ではない。理解することが必要なのである。

教師の努力はすべて、生徒の意識に向けられなければならない。生徒が理解の道に入るよう努力すべきである。生徒にこれをすべきであるとか、あれをしなさいと言ふだけでは充分ではない。

生徒は人々が彼らに言うところの有利なもの、有益なもの、高貴なものすべてについて、そしてそれがつすべての価値について、自分自身で調べ、研究し、分析できるようにならなければならない。そのためには自由になることを学ぶ必要がある。ただ単にそのまま受け入れたり、まねをしたりするようであつてはならない。

人々は自分で発見したいとは思わない。それは人々のマインドが閉ざされ、麻痺してしまっているからである。探究することを好まず、ただ単にまねをするだけの機械的なマインドになってしまっているからである。

人は幼年から卒業するまでのその瞬間まで、自分自身を発見するために、真の自由を享受することが絶対必要であり、緊急である。それは探究し、理解するための自由であり、禁止や叱り、また規律といったまらない壁によって制限されることのないようにすべきである。

生徒にすべきこと、すべきでないことを言うだけで、理解することも体験することも許さないのであれば、一体どこに彼らの知性があるというのか。知性を発揮できる機会はどこにあるというのであろうか。

もしわれわれが知的でないならば、試験に通るとか、いい服を身につける、友を多くもつなどということは何の役に立つというのだろうか。

知性は、われわれが本当に自由で、叱られることを恐れる必要なしに、また規律という厳しい監督なしに自分自身で調べ、理解し、独自に分析するとき、そのとき初めてわれわれのもとにやってくるのである。

怖がり屋で、びくつきながら厳しい規律に押し込められているような生徒は、決して「知ること」はできないだろう。決して知的にはなれないだろう。

今日、親や教師が関心をもっていることは唯一、生徒が専門の修業過程を終え、医師や弁護士、技師、事務員などになることである。それはつまり生きたロボットになり、結婚して、子供をつくる機械になるということである。ただそれだけである。

子供が何か新しいことや異なったことをしようとするとき、また偏見や古くさい習慣、しきたり、家や国の伝統などから抜け出る必要性を感じるときなど、親たちは足かせをもっと締めつけ、そして子供に「そんなことはするな、そんなことをするならもう面倒は見ないぞ。そんなことは、ばかげたことだ」などと言うのである。

つまり子供は規律、伝統、古い慣習、衰退しきった考えなどの刑務所の中に囚われの身となっている。

『根元的教育』は秩序と自由の調和を教えるものである。

自由なしの秩序は暴君であり、秩序なしの自由は混乱である。

「自由と秩序」を賢く組み合わせること、それがこの『根元的教育』の基礎である。

生徒は確かに自分の中に何かあるのか、人生で何をするができるのかを自分自身で調べ、発見し、確かめるために、完璧な自由を享受すべきである。

学校の生徒、また兵士や警察官、その他一般的に厳しい規律に従って生きていかななくてはならない人というのは、時として残酷で人間の痛みに無感覚で無慈悲になってしまっていることがある。

規律は人間的感受性を破壊するものである。このことは、これまで見てきたことや体験によってよくわかっていることである。

多くの規律や規則によって、現代の人々は感受性をすっかりなくし、残酷で無慈悲になってしまっている。



真に自由になるためには、感性が非常に豊かでヒューマニスト（人道的）である必要がある。

学校で生徒は授業に注意を向けるよう言われるとその通りにするが、それは叱られたり、耳を引っぱられたり、厳しい決まりや罰則で打たれないためにそうするのである。しかし残念なことは、「意識の目覚めた注意」ということを真に理解させようとする教えが、そこにはないことである。

規律ゆえに生徒は注意を払い、無益な形でたびたび創造的エネルギーを消耗する。

創造的エネルギーとは、「有機的機械」によって製造される最も繊細なタイプの力である。

われわれは飲んだり食べたりするが、消化の全工程というのは、粗雑な物質を有益な物質や力に変換する繊細な過程である。

創造的エネルギーは、有機体によって作られる最も繊細なタイプの物質であり、エネルギーである。

われわれが意識的に注意を払うということを習えば、創造力のあるエネルギーは貯えられていくのである。不幸にも、教師は生徒に意識の目覚めた注意というものを教えてはいない。

あらゆるところに注意を払うというのは、創造的エネルギーを消耗してしまうことである。もし注意を分割することができ、また物事、人、考えなどを自分自身と同一視することがなければ、そのエネルギーを貯えることができるのである。

人や、物事、考えなどと自分自身を同一視するときというのは、自分自身を忘れ、最も哀れな形で創造的

エネルギーを失ってしまうのである。

意識を目覚めさせるために、創造的エネルギーを貯える必要がある。そしてその創造的エネルギーというのはまさに生きた力であり、意識の乗り物であり、かつ意識を目覚めさせるための道具であることを、緊急に知る必要がある。

自分自身を忘れないことを理解し、そして注意を主体・目的・場所（誰が、どこで、何のために）に分割することを理解したとき、このとき意識を目覚めさせるための創造的エネルギーが貯えられるのである。

生徒が意識を目覚めさせるには、注意を管理することを学ぶ必要があるが、教師はこれを教えてこなかったために、彼らは何も知らないのである。

われわれが意識をもつて注意を活用するということが理解できたとき、規律は不要となるのである。

授業や講義に注意を傾けられる生徒、また秩序に関して注意深くしていられる生徒にとってはもはや規律は必要ない。

教師は直ちに、知的に「自由と秩序」を調和させることを理解する必要がある。そしてそれは意識の目覚めた注意を通じてのみ可能であることを理解しなければならない。

意識の目覚めた注意には、同一視というものは含まれない。われわれが人、物事、考えなどと自分自身を同一視するとき、魅惑された状態となり、これが意識の中に夢見状態をつくるのである。

同一視することなしに、注意を払うことを知らなければならない。われわれがある物事、ある人に注意を向け、そのために自分自身を忘れてしまったとき、その結果として魅惑された状態、意識の夢見状態になるのである。

映画をよく観る人を注意深く観察してみると、彼は眠りこけた状態にあり、何もわからず、また自分自身についても知らず、そして虚無的な状態にあることがわかる。夢遊病者のように見え、観た映画の夢を見、映画のヒーローになった夢を見るのである。

生徒は、意識が恐ろしい夢見状態へ落ち込まないように自分自身を忘れず、授業に注意を払うべきである。

生徒は試験を受けているとき、教師の命令で黒板の前に立っているとき、勉強しているとき、休んでいるとき、級友と遊んでいるとき、これらすべてのときに自分自身をその場面で見なければならぬ。

三つに分割された注意（主体・目的・場所）は、まさに意識の目覚めた注意である。

われわれが、人、物、考えなどと自分自身を同一視するような過ちをおかさないのならば、創造的エネルギーは蓄えられ、意識の目覚めが早くやってくる。

高次の世界において意識を目覚めさせたい者は直ちに、目覚めることから始めるべきである。

生徒が人、物、考えなどと自分を同一視するという過ちをおかすのならば、自分自身を忘れ去り、魅惑された夢見の状態に陥ってしまうことになる。

規律は、生徒に意識の目覚めた注意を払うことを教えるはしない。規律はマインドにとってまさに刑務所そのものである。

生徒は学校の外で、また後の実生活の中で自分自身を忘れるという誤りをおかさないために、学校で椅子に座っているときから意識的に注意を払うことを学ぶべきである。

自分を侮辱する人を前にして自分自身を忘れる人というのは、自分とその人物を同一視し、そのとりことなり（魅惑され）、意識のない夢見の状態に陥ってしまっているのである。そして相手を傷つけたり、または殺したりして刑務所へ行くはめになるのである。

自分を侮辱する者に惑わされず、自分とその人物を同一視せず、そして自分自身を忘れることなく、意識の目覚めた注意を払うことを知っている人というのは、侮辱者の言葉に価値を与えたり、また傷つけたり、殺したりすることはできないであろう。

人が人生でおかすあらゆる過ちは、自分自身を忘れること、あるものと自分を同一視すること、魅惑されて夢見状態へ陥ることに原因がある。

若者や、生徒たちを多くのばかげた規律で奴隷化する代わりに、意識を目覚めさせるように教えるほうがどれほど素晴らしいことであろうか。

## 5 何を考えるか、いかに考えるか

家庭や学校で、親や教師というのは、何を考えなくてはならないかをいつもわれわれに言うが、それを「どのように考えるか」については決して教えてはくれない。

何を考えるべきかということを知るのは、比較的やさしいことである。親、教師、保護者、本の著者などは、それぞれのやり方をもった独裁者であり、われわれが彼らの言ったことや要求、理論、偏見などについて考えることを望んでいる。

マインド（想念）の独裁者は雑草のごとく、非常にたくさんいる。他人のマインドを奴隷化し、瓶詰めにし、ある決った規定や偏見、学説などの中で生きることが強制するのである。このような邪悪な傾向がいたるところに存在している。

何百何千というマインドの独裁者たちは、他人のマインドの自由を尊重するということは決してなかった。もしもある人が彼らと同じように考えなければ、その人は邪悪で背教徒で無知であるなどと刻印を押されるのである。

人はみな、他の人々を奴隷にすることを望み、他の人々の知的自由を台無しにしたがる。そして誰も他人の思考の自由を尊重しようとはしないのである。誰もが、自分自身は思慮深く、賢くすばらしいと思っている。それゆえ他人は自分と同じようであってはいないとか、自分を手本とすべきだとか、また自分と同じ

ように考えねばならないなどと、まるで当然のごとく望むのである。

マインドは乱用され過ぎている。商人を、そして彼らが新聞、ラジオ、テレビなどを通して行う宣伝をよく観察しなさい。

コマーシャルは独裁的方法で行われている。○○石けんを買いなさい。○○靴を買いなさい。○○円で、今買いなさい。今すぐ、明日まで延ばしてはいけない、今すぐでなくてはならない、等々。もしもあなたがこれに従わなければ刑務所へぶち込むか、殺してしまします、と言うのが欠けているだけである。

親は自分の考えを子供に強制的に押しつけようとし、教師は自分の考えをそのまま生徒に押しつけ、それを受け入れなければ、叱ったり、罰したり、低い評価を与えたりする。

人類の半分はもう半分の人類のマインドを奴隷化しがついている。他人のマインドを奴隷化しようとする傾向は、暗黒の時代の暗黒のページを研究すれば一目瞭然である。

世界中の至るところで、国民を奴隷化しようとした血なまぐさい独裁政治があった。そしてそれは今もなお存在している。人々に考えるべきことを指図し、自由に考えようとする人々を許さなかった。不幸にもそういう人々は間違はなく強制収容所へ、シベリアへ、刑務所へ、強制労働へ、絞首台へ、銃殺台へ、遠隔地などに送られるのである。

教師も親も本も、どのように考えるかについては教えようとしない。

人は他人に自分の考えを押しつけるのが好きであり、十人十色の独裁者が存在する。誰もが自分の言葉は

究極の言葉であると信じていて、他の人はみな自分のように考えなければならないと堅く思い込んでいる。なぜなら、自分は最良の中の最良であると信じ切っているからである。

親や教師や雇用主たちは下の者たちを叱っては、またさらに叱りつける。

人に対する尊敬の念というのは欠如してしまった。人のマインドを傷つけ、人の思考を牢屋の中に入れたり、閉じ込めたり、奴隷化したり、鎖につないだりするという人類の恐ろしい傾向はまさに凄まじいものである。

夫は自分の考えや主張などを妻の頭に強制的にたたき込もうとし、一方妻も同じようなことをする。

おうおうにして、夫と妻は互いの考えが相容らないと言って離婚する。

夫も妻も互いの知的自由を尊重する必要があるということを理解していないのである。

夫も妻も、自分のパートナーのマインドを奴隷化する権利はないのである。事実、人はそれぞれ尊敬に値する存在である。人はみな自由に考え、自由に信仰し、自由に好きな政党に属するなどの権利を有するのである。

生徒は強制的に「ある考え」について考えるように言われるが、彼らのマインドをいかに使うべきかは教えられないのである。

子供のマインドは柔らかく、弾力があり、素直である。一方、老人のマインドは型にはまった粘土のよう

にすでに硬直しており、もう変わろうとはしないし、変わることもできない。

子供や若者のマインドは多くの変化に敏感で、変わることができる。

子供や若者には「いかに考えるか」を教えることができるが、老人に「いかに考えるか」を教えることはとても困難である。彼らは既に自分の型をもっており、その型を背負って墓場に入るからである。この世で「根本的に変わることに興味を示す老人に出会うのは本当にまれである。

人のマインドは小さい頃から型に入れられているが、それは親や教師がそうすることを好むからである。彼らは子供や若者のマインドを型に入れることに喜びを感じるのである。

型に入ったマインドというのは、事実、条件づけられたマインド、奴隷になったマインドである。

教師は、マインドのかせを壊す必要がある。

生徒がそれ以上奴隷化されないように、そして真の自由に向かって生徒のマインドを指導するということに緊急に行わなければならない。

教師は、生徒に「いかに考えるべきか」を教える必要がある。

生徒に分析、瞑想、理解の道を教える必要性があることを認識しなければならない。

理解力を発しようとする者は誰も、独断的な方法で物事を受け入れてはいけない。まず受け入れる前に調

べ、理解し、問うということが大切である。

他の言葉で言うならば、受け入れる必要はないということである。その代わり調べ、分析し、瞑想し、理解しなければならぬ。理解が完璧であるとき、受け入れるということは不要となるのである。

学校を卒業したあと、「考える」ことも知らず、ただわれわれの親、祖父母、高祖父母らと全く同じマンネリ化した習慣を繰り返し、生きたロボットや機械のように生き続けるのであれば、知的情報で頭をいっぱいにしても何の役にも立たない。

いつも同じことを繰り返し、機械のような人生を送る。家から会社へ、会社から家へと往復する。子供をつくる機械になるために結婚する。これらのことは「生きる」ということではない。もしそのように「生きる」ため、そのために十年も十五年間も学校へ行くのであれば、勉強をしないほうがましである。

マハトマ・ガンジーは非常に独特な人であった。キリスト教のプロテスタントの牧師が、何度もそして何時間も彼の家の前に座って、彼にキリスト教に改宗するよう説得し続けたが、ガンジーは牧師の教えを受け入れることも、拒否することもしなかった。彼はその教えを理解し尊敬した。ただそれだけのことであった。何度もガンジーはこう言った。「私はバラモンであり、ユダヤ人であり、キリスト教信者であり、マホメット教信者である。」

すべての宗教は同じ永遠の価値を内包するがゆえにすべてが必要である、とガンジーは理解していたのである。

ある教義、または概念を受け入れる、あるいは拒否するというのは、マインドがまだ成熟していないことを明らかに示している。

あることを拒否する、または受け入れるということは、それを理解していないから起こるのである。

理解があるところには、「受け入れ」も「拒否」も余分なことである。

信じ込むマインド、信じないマインド、疑いを抱くマインド。これらは無知なるマインドである。

知恵の道は、信じるとか、信じない、あるいは疑いを抱くということではない。

知恵の道は、調べるとか、分析する、瞑想する、そしてわが身で体得するということである。

真実は一瞬一瞬未知のものである。真実は人が「信じていること」や「信じることをやめたこと」や「疑いをもつ」ということと何の関係もないのである。

真実は何かを受け入れること、また拒否するということでもない。真実は、体験する、わが身で生きる、理解することである。

教師のなす努力のすべては、結局のところ生徒を本当の真実の体験へと導くことに向けられるべきである。

教師は、子供の柔軟で素直なマインドを型に入れようとする古くさい有害な傾向を、直ちにやめなければならない。

偏見や、情欲、古くさい先入観などといった大人の自分が、自分たちの古くさいばかげた時代遅れの考えに従って、子供のマインドを型に入れようとし、そして傷つけるのは余りにも愚かなことである。

生徒の知的自由を尊敬し、マインドの働きの速さ、創造力に富んだ自発性を尊ぶべきである。

教師には生徒のマインドを檻の中に入れる権利はないのである。

根本的なことは、考えるべきことを生徒のマインドに書き取らせるのではなく、「いかに考えるか」を完璧な形で教えることである。

マインドは「認識」するための道具であり、教師は生徒にそのマインドの使い方を教える必要がある。

## 6 安心の追求

ひよこは怖くなったとき、保護を求めて母鳥の羽の下に隠れる。子供は驚いたとき、母親を探しまわるが、それは母親と一緒にいれば安心できるからである。

このように恐怖と、安心の追求とはいつも密接に関係している。

盗賊に襲われることを恐れる人は、ピストルに身の安全を求める。

他国からの侵略を恐れる国は、大砲や飛行機や軍艦を買い入れ、軍隊で武装し、戦争の準備をする。

仕事をすることを知らない人の多くは、貧困に直面することにおびえ、犯罪をおかしたり、泥棒になったり、人を襲ったりすることで安心を得ようとする。

知性のない多くの女性は、貧困を恐れて娼婦になる。

嫉妬深い夫は妻を失うのを恐れ、ピストルに安心を求める。そして殺し、後に刑務所に行くことになるのは明白である。

嫉妬深い妻はライバルの女性が、または夫を殺す。このようにして殺人者になってしまふ。

彼女は夫を失うのを恐れ、夫を確保するために、ライバルの女性を殺すか、または夫を殺して問題の解決をはかるのである。

借家人が家賃を払わないのではないかという恐れをいだく家主は、契約や保証書や保証金などを要求することで安心を手に入れようとする。もし子だくさんの貧しい未亡人がこれらの凄まじい多くの要求を満たすことができないければ、そして町の家主がみな同じことをするならば、最後にはこの不幸な未亡人は子供たちとともに道端や町の公園で眠らなければならないであろう。

すべての戦争は恐怖に由来している。

ゲシュタポ、拷問、強制収容所、シベリア、恐ろしい刑務所、追放、強制労働、銃殺などは、恐怖が原因で存在している。

恐怖ゆえにある国が他の国を攻撃し、安全を得るために暴力に訴える。殺すことや、侵入することによって安全が確保され、強大な国になると信じているのである。

秘密警察やスパイたちを恐れる機関では、東側も西側も同様にスパイを拷問にかけ、彼らに恐怖を与え、国家の安全のためという名目で自白させようとする。

すべての犯罪や戦争は恐怖ゆえに、そして安心の追求のために起こるのである。

かつては人々の間に誠意なるものがあつた。今日、恐怖や安心の追求というこれらのものが、誠意というすばらしい芳香の息の根を止めてしまったのである。

人は自分の友を信用しない。何かを盗まれたり、だまされたり、利用されたりするのを恐れているからである。そして揚げ句の果てに、ばかげた邪悪な格言ができる。「あなたの最も親しい友に決して背中を見せるな。」

ヒットラーの信奉者たちは、この格言は金言であると言っていた。

人は自分の友を恐れ、身を守るために格言まで使う。友人同士の間にもはや誠意が存在しなくなってしまった。恐怖と安心の追求が、誠意というすばらしい芳香を吹き飛ばしてしまったのである。

キューバのカストロ・ルスは殺されるのを恐れて多くの人を銃殺した。カストロは、銃殺することによって身の保証をはかり、このようにして安全が得られると信じていたのである。

スターリン、邪悪で流血を好むスターリンは、血生ぐさい洗淨によってロシアを腐敗させた。それが彼自身の安全を探す方法だったのである。

ヒットラーは国家の安全保障のために、あの恐ろしいゲシュタポを組織した。これは疑いの余地なく、彼自身が打ち負かされることに対して恐怖をいだいていたからである。そのためにあの流血を好むゲシュタポが設立されたのである。

世界のすべての悲劇は、人々の恐怖と、安全の追求に起因している。

教師は生徒に勇気の力というものを教えるべきである。

家庭内においてさえ、子供たちを恐怖でいっぱいにしてしまっているのは残念なことである。

子供を脅かし、怖がらせ、棒でぶったりなどする。

親や教師が、子供たちに勉強するよう脅かすのは一種の習慣である。

ほぼ共通して「もし勉強しなければ、物乞いになったり、空腹のまま通りをあてもなく歩く放浪者になってしまう」とか、「靴磨きとか、荷物かつぎとか、新聞売り、野良仕事などの貧しい仕事（いかにもこれらの仕事に犯罪かのように）をしなければならなくなるだろう」と言うのである。

両親や教師の言うこれらの言葉の背景には、子を思うゆえに、そしてまた子供の安全を保証しなくては、という恐怖感があるからである。

その結果生じる重大なことは、子供が当惑し、恐怖でいっぱいになってしまうことである。これから先の人生も恐れに満ち満ちて生きようになるということである。

親や教師は、子供を驚かすという悪趣味をもっており、無意識のうちに犯罪の道へと子供を導いているのである。前にも述べたようにすべての犯罪は「恐怖」と「安心の追求」に起因しているのである。

今日、恐怖と安心の追求というものが、地球を恐ろしい地獄へと変えてしまった。あらゆる人がみな恐怖におののいて、安全を求めているのである。

以前は自由に旅行できたが、現在では国境は武装した警備隊であふれ、ある国から他の国へ入るにはパス

ポートとあらゆる種類の証明書の提示が要求される。

これらはすべて恐怖と安心の追求というものがもたらした結果である。旅行する者を恐れ、入ってくる者を恐れ、そしてパスポートやあらゆる種類の書類に安全を求めるのである。

小・中・高校・大学の先生は、これらすべての嫌悪すべき事態を理解し、世界の善のために協力すべきである。そのために新しい世代に何を教育したらよいかを知り、生徒たちが真の「勇気の道」を歩むよう教育すべきである。

新しい世代が「恐怖」を捨て去り、何物にも何人にも「安全」を求める必要がなくなるように至急導くべきである。

それぞれがもつ「自分自身を信頼すること」を学ぶ必要がある。

恐怖と安心の追求というものが、人生を恐ろしい地獄へと落としてしまったのである。

至るところに、常に安全を求めて歩きまわっている臆病者や、おどおどしている者、また気弱な者があふれている。

人生を恐れ、死を恐れ、何を言われるか、または世間の噂を恐れ、社会的地位を、政治的地位を、名声を恐れている。金を、美しい邸宅を、美しい妻、良い夫を、職を、商売を、専売を、家具を、車を、その他もろもろのものを失うのではないかと恐れる。すべてを恐れるのである。世間には臆病者、おどおどした気弱な者がいっぱいいる。しかし誰も自分を臆病者とは思っていない。みな自分を強く勇気のある人間だと自負



しているのである。

あらゆる社会階級において「失うこと」にびくびくした利害関係が何百、何千万と存在している。それゆえ、人はみな保証を求め、なお一層複雑化していくため、人生はますます込み入り、困難で、悲痛で、残酷かつ無慈悲なものと化していくのである。

すべての陰口、中傷、陰謀などは恐怖と安心の追求に起因している。

財産や地位、力や名声を失わないようにと、中傷や陰口が広まったり、殺したり、極秘で殺人を犯すための金が支払われたりしている。

この地球上で力をもった者は、自分を脅かすような者をみな抹殺するために（この吐き気をもよおさせるような目的のために）高い給料を払って殺し屋を雇い、自分の手元に置いておくという贅沢までするのである。

彼らは力あるゆえに力を愛し、金と多くの血で力を確保しようとする。

新聞には絶えず自殺のニュースが数多く報道されている。

多くの人は、自殺する者は勇気があると思っているが、しかし本当は自殺する者は人生に恐れをいだいている臆病者である。「死」という、肉体を離れるという「庇護者」に保護を求めているのである。

戦争で英雄となった者の中には、気弱で臆病な者として人に知られていた者もいる。しかし彼は死と直面

したとき、そのときのすさまじい恐怖ゆえに、自ら猛だけしい猛獣と化した。生き残るために安全を探し、死に対抗して最大の努力を払った。それが結果的に英雄と言われることになったのである。

恐怖を、えてして勇気と錯覚してしまふことがある。自殺者が勇気があるように見えたり、ピストルを携えている者がとても勇敢に見えたりするが、しかし実際は自殺者やピストル携帯者は非常に臆病である。

生きることを恐れない者は自殺をしないし、誰にも恐れをいだいていない者は腰にピストルなどさして歩きはしない。

教師は、人々に真の勇気と、恐怖について明確に正しく教えなければならない。これは緊急である。

恐怖と安心の追求が、世界を恐ろしい地獄にしまったのである。

## 7 野心

野心には多くの原因があるが、その原因の一つに恐怖心がある。

華やかな都市の公園の片隅で、プライドの高い紳士の靴磨きをしているような身分の低い少年が、貧困や自分自身、また将来に対して恐れをいだいたために、泥棒になるということもあるだろう。

裕福な経営者の営む豪華な店で働く（身分の低い）針子が、将来や、人生や老いや、自分自身などに対して恐れを感じるようになれば、一夜にして泥棒または売春婦になることがあるかもしれない。

高級レストラン、または一流のホテルで優雅に働いているボーイが、不幸にも自分自身に対して、ボーイという身分に対して、また自分の将来などに対して恐れを感じるようになれば、ギャングか銀行強盗あるいはずる賢い泥棒になるかもしれない。

取るに足らないちっぽけな虫というのは、優雅になりたいという野心をもつものである。客に対してたいそううやうやしく、穏やかな微笑みを装い、忍耐強くネクタイやシャツや靴を出して見せる売り子は、何らかの野心をもっている。なぜなら貧困に対して、自分の暗い将来に対して、老いなどに対して大変恐怖を抱いているからである。

野心は多面性を有する。野心は、聖者の面と悪魔の面を、男の面と女の面を、関心と無欲を、徳のある人の面と罪深い人の面をもっている。

野心は結婚したい人の中に、そして結婚を忌み嫌って硬い殻をもった老いた独身者にも宿っている。

野心は、「有名な人になる」「目立つ」「はいあがる」という際限のないほどの欲望をもっている人の中にも、そして隠者となってこの世のことを何も欲さない人の中にも存在している。後者の唯一の野心というのは、天国に行くこと、自由になることである。

また現世的野心と精神的野心とがある。ときには野心は無欲とか、犠牲的行為という仮面をかぶることもある。

この卑しい悲惨な世に対して野心をもたない人は、別の次元のことに野心をもつ。金に野心をもたない人が、精神的パワーに野心をもったりするのである。

我（エゴ）は野心を隠すのが好きで、マインド（想念）の最も秘密なる歪曲したところにそれを隠しもっている。そして「私は全く何の野心も持っていません」「私は同胞を愛しています」「私は全人類の善のために無私無欲で働きます」などと言うのである。

ずる賢い政治家は裏に通じているが、ときどき表面的には無私無欲に見えるその事業で、大衆を感嘆させることもある。しかし彼がその地位を辞するとき、何百何千万ドルというお金をもって国外に出るといふことがある。

無私無欲という仮面で変装した野心は、最も抜けめない人たちさえもだますことがある。

この世には、野心的にならないように、という野心のみをもっている人々も多くいる。

気どりと虚栄心をかなぐり捨てて人が多くいるが、そういう人たちは内的に自分自身を完全にしようという野心だけをもっているのである。

寺院までひざまづいて歩き、信仰に対して盲目的に自らをむち打つ苦行者というのは、表面的には何も野心をもっていないように見える。そして他の人から何も取らないで、自分から与えるということまでする。しかし奇跡であるとか、治療、自分や家族の健康、そして永遠なる救済などといったものに野心をもっているのは明らかである。

われわれは本当に信心深い人々を賞賛するが、彼らが全くの無私無欲で宗教を愛していないのを嘆く。

聖なる宗教、崇高なる宗派、教団、精神的団体などは、無私無欲の愛に値する。

この世で、自分の宗教、宗派などを無私無欲で愛する人に出会うのはとてもまれである。それは嘆かわしいことである。

人はみな野心でいっぱいである。ヒットラーは野心ゆえに戦争に突入した。

すべての戦争は、恐怖心と野心に原因がある。あらゆる人生の最も深刻な問題は、野心にその源があるのである。

人はみな、野心ゆえに他の人と争って生きているのである。ある人は別のある人といったように、誰も

がみな他の別の誰かと争っているのである。

人はみな、人生で「何かなろう」と野心を抱くものである。そしてある年代の人々、教師、親、保護者などは、子供や若者に野心というおぞましい道を歩き続けるようにはっぱをかけるのである。

大人は子供たちに、「あなたは人生で何かならねばならない。金持ちになるとか、金持ちと結婚するとか、権力者にならなければならない」などと言うのである。

古くからおぞましい、醜い、時代遅れの世代は、新しい世代が自分たちのように野心家であることを望んでいる。醜く、そしておぞましい存在になることをである。

そして最も重大で深刻なことは、新しい世代の者たちが彼らに操縦されるままに、踊らされるままに、その野心というおぞましい道に身をまかせているということである。

どのような仕事も軽蔑してはならない、ということを経験した教師は生徒に教えるべきである。タクシートの運転手であるとか、売り子、農民、靴磨き屋などを軽蔑の目でみるのはばかげたことである。

謙虚な仕事はすべて美しいものである。すべての謙虚な仕事は社会生活において必要なものである。

われわれのすべてが、エンジニア、知事、大統領、医者、弁護士などになるために生まれてきたわけではない。

多くの人々が集まった社会において、あらゆる仕事がある、あらゆる職種が必要であり、いかなる仕事も決し

て輕蔑されるものではない。

事実、人生において人はそれぞれ何かの役に立っている。重要なのは、各々が何の役に立つのかを知ることである。

生徒一人一人の天分を発見し、その方向に指導するのは教師の義務である。

自分の天分にあったことをしている者は真の愛をもって、そして野心もなくその仕事をするであろう。

愛は野心にとつて変わるべきものである。天職とは、われわれが本当に好きで、喜びをもって従事できるような仕事である。なぜならそれはわれわれを楽しませてくれるし、それを愛することができからである。

現代において不幸にも人は、嫌々ながら野心のために働いている。それは自分の天職と一致していない仕事をしているからである。

人が自分の好きなことを仕事として働くとき、つまりその仕事が自分の真の天職ならば、愛をもって仕事をすることができるのである。なぜなら自分の天職を愛しているからであり、人生における自分の適性は自分の天職の適性にほかならないからである。

生徒をいかに指導するかを知り、彼らの適性を見出し、そして彼らに真の天職への道を指し示すということ、これはまさに教師の仕事である。

## 8 愛

学校に通っているところから、愛と言われるものについて、あらゆる角度から学ばなければならない。

恐怖や従属は、おうおうにして愛と錯覚されることがあるが、それらは愛ではない。

生徒は親や教師に依存しており、それゆえ彼らを尊敬すると同時に、恐れを抱くのである。

子供は衣服や食物、金銭、住まいなどを親に依存して生きており、自分はいつも守られているのだということを知っている。親に依存して生きているということを知っているからこそ、親を尊敬もし恐れもする。しかしそれらは愛ではない。

これらのことは、子供が自分の親よりも学校の友人により一層の信頼を寄せているという事実から明らかにわかる。

実際、子供は決して自分の親には話さないような秘密を友人には話す。

これは子供と親の間に、真の信頼関係がないこと、真の愛が存在しないということを示している。

尊敬、恐怖、依存、心配などと言われるものと、愛との間には根本的な違いが存在するということを直ち

に理解する必要がある。

親や教師は尊重されるべきであるが、しかし尊敬と愛を混同してはならない。

尊敬と愛は緊密な関係にあるが、両方を決して混同してはならない。

親は子供を心配し、子供のために最良のものを望む。例えば良い職業であるとか、すばらしい結婚、安定した生活などがそうである。そしてその「心配」を真の愛と混同するのである。

たとえとても良い意図からだとしても、真の愛なしには、親や教師がこれからの世代を賢明に導くことは不可能である、ということを経る必要がある。

地獄へ通じる道は、「とても良い意図」によって舗装されているのである。

世界的によく見られる「理由なき反抗」というケースについて見てみよう。これは世界中の至るところに蔓延している心の伝染病である。両親に大変愛され甘やかされて育った多くの良い子たちが、無防備な通行人を襲ったり、女性に乱暴を働いたり、盗んだり、石を投げつけたり、徒党を組んで歩きまわるなど、至るところで害悪をまき散らしている。そこには教師や両親たちに対する尊敬の念は存在しない。

「理由なき反抗」とは、「真の愛」の欠如した結果なのである。

「真の愛」があるところでは、「理由なき反抗」は存在することができない。

もし親が自分の子供を真に愛するのであれば、賢明に導くことができるであろう。そして「理由なき反抗」も存在しないであろう。

「理由なき反抗」とは、誤った導きの産物である。

親は、自分の子供を真実賢明に教え導くための必要十分な愛をもってはいないのである。

現代の親は、お金のことや子供により与えることだけを考えている。例えば最新型の車であるとか、最新流行の服などであるとか。しかし、それは本当に子供を愛しているからなのではなく、愛するということを知らないからである。それゆえ「理由なき反抗」に子供たちを駆り立ててしまうのである。

今の時代の「表面だけを追う傾向」は、真の愛が欠如していることが原因である。

モダン・ライフは、薄っぺらで、深さのない水たまりのようなものである。

人生が充分深さのある湖であるならば、多くの生き物や多くの魚が住む場所となる。しかし道ばたの水たまりのようでは、太陽の強い光線によってすぐ干上がり、あとに残るのは泥、不毛、醜さだけである。

もしもわれわれが愛することを学ばないのであれば、生きるというそのすべての輝きの中で人生の美しさを理解したり感謝したりすることはとうていできない。

人は尊敬や恐怖を、愛と言われるものと混同してしまふ。

われわれは目上の人を敬い、恐れ、そしてそれを愛だと思い込んでいる。

子供は親や教師を恐れ敬うが、それは彼らを愛しているからだと思い込んでいる。

子供は家庭や学校で、鞭や厳しい躰や、悪い評価、叱られることを恐れている。そして自分たちは親や教師を愛しているのだと思い込んでいる。しかし実際は彼らを恐れているだけのことである。

われわれ大人は仕事や雇用主に依存をし、貧困を恐れ、職を失うことを恐れる。そして自分は会社を愛しているのだと思い込み、会社の利益に気を配り、その所有物を大切に扱う。しかしそれは愛なのではなく、恐怖である。

多くの人々は、生と死の神秘について自分自身で考えることや、それを調べ探究し理解することを恐れる。それゆえに「私は神を愛している、それで充分だ」と叫ぶのである。

神を愛していると思っているが、実際は愛しているのではなく恐れているのである。

戦時中、妻は一緒に居たとき以上に夫を慕い、夫が無事家へ戻って来るようにと切望する。しかしそれは愛しているからなのではなく、未亡人になること、保護を失ってしまうことなどを恐れているからなのである。

心理的隷属、依存心、誰かに頼ること、それは愛ではなく、もっぱら恐怖なのである。それ以上でもそれ以下でもない。

子供は勉強において教師に依存している。退学させられること、悪い評価を受けること、叱られることなどを恐れているのは明らかである。おうおうにして自分は教師を愛していると思っているが、しかし実際は恐れているだけなのである。

妻が出産のとき、または何か病気などで死ぬ危険性があるときなど、夫は妻を以前よりずっと愛していると思い込むが、実際は妻を亡くすことを恐れているのである。食事、性、服の洗濯、やさしさ、そのほか多くのことを妻に依存しているからである。それは愛ではない。

人々はよく、自分はすべての人々を敬愛しているなどと言うが、それはあてにならない。世の中で本当に愛することを知っている人に出会うのは、非常にまれである。

もし親が子供を本当に愛するのであれば、もし子供が親を本当に愛するのであれば、もし教師が生徒を本当に愛するのであれば、戦争はこの世に存在しないであろう。戦争は一〇〇パーセント有り得ないであろう。

人々は愛というものを理解していない。そして恐怖や心理的に奴隷となった状態や情欲を、愛と言われるものと勘違している。

人々は愛することを知らない。もし人が愛することを知っているならば人生は実際、天国になるだろう。

恋人たちは互いに愛し合っていると思ひ込み、その多くは自分たちの愛を血を流してさへ誓うこともいとわかないであろう。しかし、それは単に情欲的になっているにすぎないのである。情欲が満たされたとき、砂の城は跡形もなく崩れ落ちてしまうであろう。

おうおうにして情欲はマインドやハートをだます。情欲の内にある者は、恋をしていると思い込むのである。

世の中で本当に恋をしているカップルに出会うのは非常にまれである。情欲的なカップルは数多くいるが、恋をしているカップルに出会うのはとても難しい。

アーティストたちはみな、愛の歌を唄うが、しかし愛とは何なのか知らず、情欲を愛と混同してしまっている。

人生で非常に難しいことは、情欲を愛と混同しないということである。

情欲は知覚され得るもつとも美味で繊細な「毒」であり、いつも最後には血の代償を払って勝利に到る。

情欲は百パーセント性的であり、動物的である。しかし時には非常に洗練されて繊細であるゆえ、いつも愛と混同されるのである。

教師は生徒や若者に愛と情欲の違いがわかるように、区別ができるように教えなければならない。そのようにして初めて、彼らは後の人生において多くの悲惨を避けることができるだろう。

教師は、生徒の責任感を形成する義務がある。それゆえ生徒が人生において悲惨な状態に陥らないよう、しかるべき準備をさせるべきである。

愛というものを理解する必要がある。愛を嫉妬、情欲、暴力、恐怖、執着、心理的依存などと混同してはならない。

不幸にも愛は人間の内に存在しない。しかもそれは温室の花のように栽培したり、買ったり、手に入れたりすることのできるものではないのである。

愛はわれわれの内に「生まれる」べきであり、自分自身の内にもっている憎悪、恐怖、性的情欲、不安、心理的奴隷、依存などを深く理解したとき初めて、愛はわれわれの内に「生まれる」のである。

これらの心理的欠点は、われわれのインテレクトのレベルだけではなく、潜在意識下の神秘的なまだ知られてないレベルにおいても、いかに組み立てられ機能しているかを理解しなければならない。

マインドの様々な曲がり角に隠れている、それらすべての欠点を取り除く必要がある。このようにして初めて、自発的かつ純粹な形で愛と言われるものがわれわれの内に生まれるのである。

愛の炎なしには世の中を変えることは不可能である。愛だけがこの世を真に変換することができるのである。

## 9 マインド（想念）

われわれの体験に基づいて言えば、マインドに関する複雑な問題をあらゆる角度から把握できなければ、愛と呼ばれるものを理解することはできない。

マインド（想念）は脳である、というのは大きな誤解である。マインドはエネルギー的なものであり、繊細であり、物質から遊離することができ、また催眠状態にあるときや普通の睡眠中にはるか遠いところへ移動し、そこで起こっていることを見たり聞いたりすることができるのである。

超心理学の実験室では、催眠状態の被験者に対して注目すべき実験が行われている。催眠状態にあるそれらの人々の多くは、催眠にかかっている間、遠いところで起こっている出来事や人々、そしてその状態に関して詳細に報告することができたというのである。そして科学者たちはその実験後、報告されたそれらの出来事が実際に起こり、間違いなく真実であるということを確認した。

超心理学の実験室で行われたこれらの実験によって、脳はマインドではないということが完全に実証されたわけである。

実際マインドは脳とは独立しており、時間や空間をトリップすることができ、遠くで起こっていることを見たり聞いたりすることができるのである。

E・S・P（超常感覚機能及び現象）の存在はすでに完全に実証されている。それを否定しようとするのは今や気違いか愚鈍な人々だけである。

脳は思考を形成するために作られたものであり、思考そのものではない。

脳はただ単にマインドの道具であり、マインドそのものではない。

もしもわれわれが本当に愛というものを知りたいのであれば、マインド全般について深く探究する必要がある。

子供や若者たちのマインドは、よりしなやかであり、柔軟性や俊敏性に富み、かつ目覚めている。

子供や若者たちの多くは、様々なことに関して親や教師に質問をして、それを楽しんでいる。彼らは知りがたっており、それゆえ質問をし、観察をし、大人たちが軽蔑するようなこと、また見向きもしない細かいことにまで関心をもつのである。

時が過ぎ、年を取るにしたがって、マインドは少しずつ固形化していく。

老人のマインドは固く動かず、化石のようになり、もはや大砲の音でさえもそれをゆるがすことができないくなる。

老人はもはやそうなってしまったまままで変わらず、そのままの状態で死んでいく。彼らはかちかちの固定観念でしか物事を見れないのである。



老人のたわごと、偏見、固定観念などは、もはや変化しない岩石のように見える。よく一般的に「これが私のやり方だ。いままでもそうだったし、これからもそうだ」などと言われるが、これはそれを表している。

生徒の人格形成に関与している教師は、新しい世代の人々を賢明に指導できるよう、マインドに関して非常に奥深く研究することが必須である。

時が経過するにつれて少しずつ化石化していくマインドを、深く理解する作業は苦痛を伴うものである。

マインドは、現実、真実と言われるものの殺害者であり、愛を破壊する。

老年に至った者は、もはや愛するということができない。そのマインドは過去の痛ましい体験や偏見、鉄の刃先のような固定観念などといっぱいだからである。

いまだ愛することができると思い込んでいる好色な老人がいるが、実際彼らは老人特有の性的情欲でいっぱいなのであり、情欲を愛と混同しているにすぎない。

好色な老人は男であれ女であれ、彼らはみな死ぬまで凄まじい肉欲にかられて過ごす。そしてそれを愛と思い込んでいるのである。

老いた頭の人々は愛するということができない。なぜなら痴呆、固定観念、偏見、嫉妬、体験、過去の想い出、性的情欲などを使ってマインドが愛を破壊するからである。

マインドは愛にとって最悪の敵である。超文明国には、もはや愛は存在しない。なぜならそういう国の人々

のマインドは、工場、銀行の口座勘定、ガソリン、セルロイドの匂いしからしいからである。

マインドを封じ込めるたくさんの瓶があり、各人のマインドはしっかりとそれに瓶詰めになされてしまっている。

ある人のマインドはかたくなな共産主義に瓶詰めされており、またある人は無慈悲な資本主義に瓶詰めされている。

ある人は嫉妬、憎悪、金持ちになりたいという欲望、高い社会的地位、悲観主義、あるいはある特定の人に対する愛着、自分自身の苦しみに対する執着、家族の問題などでマインドを瓶詰めになっている。

人々はマインドを瓶の中に閉じ込めるのが大好きである。瓶を粉々にしようと本気で決心をするような人々はまれである。

われわれはマインドを開放し、自由にすることがある。しかし人々は奴隷になるのを喜ぶのである。うまい具合にマインドを瓶詰めしていない人、そのような人に出会うのは、非常に難しいことである。

教師は、生徒にこれらすべてのことを教えないならならぬ。新しい世代の人々に自分自身のマインドを観察し、探究し、理解する必要を説くべきである。そしてこのような深い理解を通じてのみ、われわれはマインドを固形化する、氷結化する、瓶詰めすることから回避できるのである。

世界を変換できる唯一のもの、それはまさに愛と言われるものであるが、しかしマインドは愛を破壊してしまふのである。

われわれは自分自身のマインドを追求し、観察し、深く調べ、真に理解することによって初めて、自分自身の主、マインドの主となることができる。そうして初めて愛の破壊者を退治し、真の幸福を手に入れることができるのである。

愛について美しい幻想を抱いて生きているような人、愛について計画を練って生きているような人、自分の好き嫌い、計画や空想、規則や偏見、過去の想い出や体験などに応じて愛を操作しようとする人は、決して愛というものを知ることはないであろう。実際そのような人々というのは、もはや愛の敵となつてしまっている。

マインドのプロセスは経験の積み重ねによって成っているということを、あらゆる角度から理解する必要がある。

教師は正当な理由で生徒を叱ることもあるが、ときには全くばかげたことで正当な理由もなしに叱ることがある。その場合、それは生徒のマインドに深く記録され、そのような間違つた行動は結果として生徒の教師に対する愛を失わせてしまうことになるのである。

「マインドは愛を破壊してしまう」ということを、学校、大学の教師は決して忘れてはならない。

愛という美しいものを抹殺してしまう、マインドのそのようなプロセスをすべて深く理解する必要がある。

父親や母親になるだけでは充分ではなく、愛することを知らなければならぬ。親は自分の子供を愛していると信じているが、それは子供は自分に属するから、自分のものだから、所有しているからという理由によつてである。しかしそれはちょうど自転車や、車や、家に対するのと同じものである。

おうおうにして所有するとか依存する、などという感覚と愛は混同されるが、そういうものは決して愛に成り得るものではない。

われわれの第二の家庭である学校の教師は、自分の生徒を所有しているからとか、自分に属しているからという理由で、生徒を愛していると信じている。しかしそれは愛ではない。所有や依存というのは愛ではない。

マインドは愛を破壊するが、われわれのばかげた思考方法、悪習慣、無意識的・機械的な行動習慣、誤つた観察眼など、これらマインドの間違った機能すべてを真に理解したとき初めて、われわれは時間に属さないもの、愛と言われているものを本当に生き、体験することができるようになるのである。

愛を自分自身のマンネリ化した機械的行動に押し込めようとして、また自分の偏見、欲求、恐怖、人生体験、自分勝手な物の見方、誤つた思考方法などの誤つた軌道上で愛を成り立たせようと望む人がある。しかしそうすることは愛の息の根を止めてしまうことである。なぜなら、愛は決して抑圧されるべきものではないからである。

「我（エゴ）」が望むままに、「我」が欲するままに、「我」が考えるままに愛を動かそうと望む者は、愛を失う。なぜなら愛の神キューピットは決して「我」の奴隷にはならないからである。

愛の子供を失わぬよう、「我（エゴ）」を破壊する必要がある。

「エゴ」は過去の想い出、欲望、恐怖、憎悪、情欲、体験、自己本位、嫉妬、強欲などの集合体である。

インテレクトの層だけではなく、マインドの潜在意識のあらゆるレベルにおいても、それぞれの欠点を別個に調べ、直接観察し、理解するとき、初めて欠点の一つ一つが消えてなくなるのである。そしてわれわれは一瞬一瞬死んでいく。このようにしてのみ「エゴ」を解体、根絶できるのである。

愛を「エゴ」という恐ろしい瓶の中に詰め込もうとする者は誰でも、愛を失うことになる。なぜなら、愛は決して瓶詰めにはされるものではないからである。

残念ながら、人々は愛を自分の癖、欲望、習慣などの支配下に置き、「エゴ」に服従することを望む。しかしそれは全く不可能である。愛は「エゴ」に従属するものではないからである。

恋をしているカップル（言わば情欲にかられているカップル）は自分たちの欲望、肉欲、感違いなどのレールに沿って愛が忠実に進んでくれるものと思っているが、それは完全に裏切られることになる。

「私たち二人のことを語り合おう」と多くの恋人たち、いわゆる性的情欲で結びついているカップルは言うが、この世は彼らのような人たちでいっぱいである。そこで二人は、将来の計画についてや夢や望みについて語り始める。それぞれが自分の抱いている計画や欲望、人生観について述べ、そしてマインドが敷いた鉄道の上を、愛が機関車のように走り続けるようにと望むのである。

何と間違った道を、何を勘違いしてか、それらの恋人たちは、情欲的カップルたちは歩いているのだろうか。何と現実から遠く離れたところにいるのであろうか。

愛はエゴに従わない。夫婦が愛に鎖を付けて従わせようとするとき、愛は逃げ去り、二人は不幸の中に落ちていくのである。

マインドは「比較する」という悪趣味をもっている。ある男は自分の恋人を他の恋人と比較し、また女性は一人的男性を別の男性と比較する。教師はある生徒を他の生徒と比較する。それはまるで生徒一人一人の真価というものを認める必要がないかのようである。比較というものはすべて忌むべきものである。

美しい夕陽を眺めながら、別の日に眺めた夕陽と比較をするとき、それは自分の目の前にある美を真に理解していないのである。

美しい山を眺めながら、昨日眺めた別の山と比較するとき、それは自分の目の前にある山の美しさを真に理解していないのである。

比較あるところ、真の愛は存在しない。子供を本当に愛する親は、決して誰とも自分の子を比較したりはしない。ただ愛するのである。それだけである。

本当に妻を愛する夫は、決して他人と比べるような間違いを犯さない。彼女を愛するだけである。ただそれだけである。

生徒を愛する教師は、決して生徒をえこひいきせず、比較もせず、真に生徒を愛するのである。ただそれだけである。

比較によって分割されたマインド、二元主義の奴隷になっているマインドは、愛を破壊する。

相反するものの争いによって分割されたマインドは、新しい物事を理解することができず、化石化し、凍りついていく。

マインドには、大変深い奥行や、層、潜在意識の領域、歪曲した部分がある。しかし最も重要なのは、中央に宿っている「エッセンス」と「意識」である。

二元主義が終わり、マインドが全体を見ることができ、また穏やかさ、静けさ、さらに深遠さを手に入れたとき、そしてよりは比較しなくなったとき、そのときこそエッセンスが、意識が、目覚めるのである。これこそ『根元的教育』の本当の目的となるべきものである。

客観と主観を見分けよう。客観には目覚めた意識があり、主観には眠りこけた意識、潜在意識がある。

客観的意識によってのみ客観的認識を享受することができる。

現在、小学校から大学まで生徒が受け取っているインテレクチュアルな情報は百パーセント主観的である。

客観的認識は、客観的意識なくして獲得できるものではない。

生徒はまず自意識のレベルに目覚め、そして客観的意識を獲得していく必要がある。

「愛の道」を歩むとき初めて、われわれは客観的意識に目覚め、客観的認識を得ることができるのである。

もし愛の道を歩みたいと真に望むのであれば、われわれはマインドに関する複雑な問題を理解する必要がある。

## 10 聴くということ

世の中には、その雄弁さでもって人々を感嘆させるような演説者が多くいる。しかしかに聴くか、ということを知っている人々は非常に少ない。

聴き方を体得するのは大変難しいことである。聴くということを実に知っている人は、ごくわずかである。

教師が、あるいは講演者が話しているとき、聴衆は大変注意を傾けて話している人の一語一語を繊細に追いついて、聴いているような振りをしている。しかし聴衆一人一人の心理の奥底には、話している人の言葉一つ一つを通訳する秘書がいる。

この「秘書」というのは、「我（エゴ）」であり「自分自身」である。この秘書の仕事というのは間違った訳をすることであり、話している人の言葉を誤って通訳することである。

「我」は、自分の偏見や、先入観、恐怖、自尊心、切望、観念、記憶などに従って通訳するのである。

学校の生徒や、聴衆の一人一人は実際のところ、演説者の言っていることを聴いているのではなく、おのれ自身を、自分自身に宿るエゴの声を、大好きなマキユアベリ<sup>\*</sup>的エゴの言っていることを聴いているのである。このエゴは真実なるもの、本当なるもの、本質的なものを受け入れたがらない。

唯一マインドが過去の重みから開放され、無垢の状態になり、かつ鋭敏に新しいことに注意を向けられる状態にあるとき、そして受容性が完全に開花しているとき、そのとき初めてわれわれはその最悪の秘書——いわゆる我（エゴ）、自分自身、——から邪魔されることなく、真に聴くことができるのである。

マインドが過去の記憶によって動かされている間は、今までに蓄積されたものを単に繰り返しているだけである。

マインドが過去の数々の経験によって影響を受けている間は、過去の曇ったレンズを通して現在を見ているだけなのである。

もし「聴くことができるようになりたい」のであれば聴くことを学び、新しいことを発見したいのであれば「瞬間の哲学」にそって生きなければならない。

過ぎ去ったことをよくよ思い悩むことなく、先のことに關してあれこれ思いわずらうことなく、今現在の一瞬一瞬を生きていることは緊急に必要である。

真実は一瞬一瞬未知のものである。それゆえわれわれはマインドを絶えず鋭敏な状態にし、充分注意深く、かつ偏見や先入観の入らないようにして、真に受容的な状態にしておかなければならない。

教師は生徒に、聴き方を知ることがいかに深い意味もつかを教えなければならない。

われわれの感覚を再確認し、行動や思考、感情を洗練して、賢明に生きるということを学ぶ必要がある。

もしわれわれがいかに聴くべきかを知らず、また一瞬一瞬現れる新しいものを発見することもできないのであれば、アカデミックな教養をいくらかもっていたとしても、それは何の役にも立たないのである。

われわれは注意力であるとか、言動、人間性、まわりの物事などといったものを洗練していく必要がある。

しかし聴くことを知らないのであれば、実際自らを洗練することは不可能である。

粗雑で、荒々しく、衰弱し、退廃したマインドでは聴くということはできないし、また新しいことを発見することもできない。その種のマインドでは、「我」「エゴ」「自分自身」と言われている悪魔の秘書が通訳するおかしな訳を、歪んだ形で理解することしかできないのである。

洗練された状態になるのは、非常に難しいうえ、充分な注意力が必要である。ある人はスタイルや服装、庭や車、友人関係においてとても洗練されているが、内面的には粗雑で、荒々しく、鈍いままの状態である。

一瞬一瞬生きることが体得した者は、真の洗練の道を歩んでいく。

受容力があり、無垢で、統合的かつ鋭敏なマインドをもつ人は真正な洗練の道を歩いていくことができる。

過去の重み、先入観、偏見、心配、狂信主義などを捨て去り、新しく出会うすべてのことに自分自身を開く人は、真実なる洗練の道を意気揚々と勝利のうちに進行することができる。

退化したマインドというのは、過去のこと、先入観、プライド、自己愛そして偏見などの中に瓶詰めされて生きている。

衰弱したマインドというのは、新しいことは何も見えず、聴くこともできず、自己愛によって翻弄されて生きている。

狂信的マルクス・レーニン主義者たちは、自尊心ゆえに新しいものを受け入れず、万物のもつ第四番目の性質、つまり四次元を認めようとはしない。彼らは自分自身を愛し過ぎているために、自説の不条理な物質至上主義から離れることができないのである。われわれが具体的な事実を並べ上げて、彼らの詭弁がいかにばかっているかを解き示そうとすると、彼らは左手の腕時計を見て、言い訳をして立ち去ってしまうのである。

これらのマインドは退廃し、老衰しきっており、聴くことも、新しいことを発見することもできず、また現実を受け入れることもできないのである。なぜならマインドが「自己愛」に瓶詰めにされているからである。あまりにも自分自身を愛し過ぎているマインド、すべ文化的洗練の術を知らないマインド、荒々しく、粗雑なマインドである。このマインドは自分自身の愛する「エゴ」の言うことしか聞かないのである。

『根元的教育』は聴くこと、賢明に生きることを教える。

小・中・高校・大学の教師たちは、真の生命体の洗練という真正な道について生徒に教えなければならない。

もし学校を卒業するとき、われわれの内側、思考、観念、感性、習慣などがまるで獣のようなままだであるならば、たとえ学校に十年十五年通ったとしてもそれが何の役に立つであろうか。

『根元的教育』は今すぐ始められなければならない。なぜならば新しい世代とは、一つの時代の始まりを

意味するからである。

今こそ「真の革命」の時である。「根元的革命」のときがやって来たのである。

過去は過去、過ぎ去ったことであり、もはやその結果は出てしまった。われわれは生きているこの瞬間の、本当に深い意味を理解する必要がある。

\*マキキュアベリ的　ずるい。目的のためには手段を選ばない。理屈をこねる。

## 11 知恵と愛

知恵と愛は、あらゆる真の文明において主要な二本の柱である。

宇宙バランスの天秤において一方に知恵をのせ、もう一方には愛をのせなければならない。

知恵と愛は互いにバランスを取らなければならない。愛のない知恵は破壊的であり、知恵のない愛はおうにしてわれわれに過ちをおかさせる。

「愛は法なり、しかし意識ある愛なり。」

多くを学び知識を得ることは必要であるが、それと同時にわれわれの内に「精神的本質」を緊急に開発しなければならぬ。

たとえ知識があつたとしても、「精神的本質」が調和をとって充分開発されていないのであれば、その知識はわれわれを単に「インテリ」と称される存在にしかない。

精神の本質が充分開発されていたとしても、インテレクチュアルな知識が全くないのならば、それはまた愚鈍な聖者とならう。

愚鈍な聖者は精神的本質が大変開発されているが、インテレクチュアルな知識がないために実際に行うということができない。それは、どのように実行したらよいかがわからないからである。彼は実行する力をもつていても、その方法を知らないために何も実行することができないのである。

インテレクチュアルな知識があつても、精神的本質が充分開発されていないのであれば、その知識ゆえに人は理性的に混乱し、へ理屈をこねまわしたり、プライドでいっぱいの状態に陥ってしまつたりする。

第二次世界大戦中、精神的要素が欠如した何千人もの科学者たちには、科学と人類幸福の名のもとに実験を行い、恐ろしい罪を引き起こした。

われわれは力強いインテレクチュアルな文化を築く必要があるが、それはバランスのとれた、意識ある純粹な精神性を伴つたものでなければならない。

もしわれわれが自分の内に真正な精神的本質を開発したいのであれば、そしてそのために本気で「我」を解体したいと望むならば、倫理革命および心理革命が必要である。

残念なことに人々は、愛の欠如ゆえにインテレクトを破壊的な形で使っている。

生徒は科学・歴史・数学などを学ぶ必要があるが、それとともに同胞の役に立つよう、職業についての知識を獲得することも重要である。

勉強すること、基礎知識を蓄積することは必要不可欠である。しかしそこに恐怖があつてはならない。

多くの人は恐怖ゆえに知識を蓄積する。生きることに対して、死に対して、飢え・貧困・惨めさに対して、また何を言われるかなどに對して恐れをいだいている。そのような理由で勉強をするのである。

同胞のためにもつと役に立ちたい、あるいは隣人への愛ゆえに、という気持ちで勉強するのが本来の姿である。決して恐怖ゆえに勉強をするということであってはならない。

恐怖ゆえに勉強する学生というのはみな、遅かれ早かれ頭でっかちだけの人間になってしまう。このことは実生活の場でよく見られることだ。

自己観察をするためには、また自分自身の内に恐怖が生まれるすべてのプロセスをあらわにするためには、自分自身に誠実になるということが必要である。

恐怖は多くの面をもっているということを決して忘れてはならない。ときに恐怖は勇氣と取り違えられることがある。戦場における兵士は非常に勇敢に見えるが、しかし実際は恐怖ゆえに行動し戦っているのである。自殺者もまた、一見とても勇氣があるかのように見えるが、実際は人生を恐れる臆病者である。

無頼漢もとても勇氣があるかのように見えるが、本当は臆病である。

キューバのカストロ・ルスがそうであつたように、彼らはしばしば恐怖によって、破壊的なやり方で職業や権力を行使することがある。

われわれは決して実生活における経験や、インテレクトの開発というものに対して異議を唱えているのではない。そこに愛が欠如している、ということをお訴えているのである。

知識や人生経験において愛が欠けているならば、それは破壊的な結果を生み出すことになってしまう。

愛と呼ばれるものがそこになければ、エゴはおうおうにして経験やインテレクチュアルな知識に罣を仕掛けるということをする。

エゴは自らを太らせ強固にするため、経験やインテレクトを悪用するのである。

エゴ・我・自分自身を解体することによって、経験やインテレクトは内なる本質の手に残りいかなる悪用も不可能となる。

すべての学生は自分の適性にそつて進み、職業について深く勉強しなければならない。

勉強やインテレクトは誰をも害したりしないが、インテレクトを乱用してはいけない。そしてマインドを悪用しないような勉強をしなければならない。職業についての様々な知識を勉強したがる者、インテレクトを使って他人を傷つけようとする者、他人のマインドに暴力を振るう者たちは、マインドを悪用しているのである。

マインドをバランス良く保つためには、専門職に関する分野とともに精神的分野についても勉強する必要がある。

もしわれわれが真にバランスのとれたマインドを望むのであれば、インテレクチュアルな統合、そして精神的統合を目指すことが緊急に必要である。



教師たちは、『根元的教育』の道に生徒を導くことを真に望むのであれば、『心理革命』\*に關して深く研究しなければならない。

生徒は、頭でっかちの愚かなインテリになるのではなく、一個の責任感ある人間となって学校を卒業しなければならぬ。そのためには、『精神的本質』を獲得し、自分自身の内に真正な本質を開発する必要がある。

愛なくしての知恵は何の役にも立たない。愛の欠如したインテレクトは人を頭でっかちにするだけである。知恵はそれ自体「原子成分」であり、真の愛で満ちている者によってのみ使われるべき原子資本なのである。

\*心理革命 同著者による同タイトルの著書。『ノース心理革命』（新泉社）として発刊されている。

## 12 寛容さ

愛することも、愛されることも必要である。しかし不幸なことに人々は愛することも、愛されることもないのである。

愛と言われているもの、それは愛を情欲や恐怖とたやすく勘違いしてしまう人々にとってはいまだ未知なるものである。

もし人々が真に愛することができ、また愛されるのであれば、地上に戦争など決して起こり得ないだろう。多くの夫婦は充分に幸せでいられるはずなのに、実際は不幸にも、古い恨みを記憶の中のため込んでしまっている。

もしも配偶者が互いに寛容であるならば、痛ましい過去など忘れ、真の幸福でいっぱいの充実した生活を送ることができるだろう。

マインドは愛を殺し、破壊してしまう。経験や昔あった嫌なこと、また嫉妬など、これらすべてが記憶の中に蓄積されており、それが愛を破壊するのである。

過去を忘れるために充分な寛容さを身につけ、夫を敬愛しながら今現在を生きていくことができるならば、

恨みを抱いている多くの妻たちは幸せになれるであろう。

もし妻の昔の間違いを許し、記憶に蓄積しているいさかいや不愉快なことをはるかあなたに葬り去ってしまえるほど寛容になれたなら、多くの夫たちは妻と一緒に居ることが真に幸福なものとなるであろう。

夫と妻は、一瞬一瞬のもつ深い意味を理解する必要がある、それは緊急である。

夫や妻は過去のことは忘れ、今現在を楽しく生き、いつもたった今結婚したばかりであるかのように過ごすべきである。

愛と恨みは同時には存在できない原子成分である。真実の愛の内にはいかなる恨みも存在することはできない。愛とは永遠なる許しなのである。

苦しんでいる自分の友人を見て、それが自分の敵であるにせよ、真に苦悶する人というのは、その内に愛が存在する。

慎ましい人々や貧しい人々、生活に困っている人たちの幸福のために心から働いている人、そのような人の内に真実の愛は存在するのである。

汗水たらして畑に水をまく農民、苦しんでいる村人、お金をねだる乞食、また道端で餓死寸前で苦痛に喘いでいる野良犬などに対して、自然に、素直な気持ちで同情することのできる人の内には愛は存在するのである。

心の底から誰かを助けようとするとき、また人から言われたのではなく自然に自発的に木の手入れをし、庭の花々に水をやるとき、真の寛容さ、真の思いやり、真の愛がそこにあるのである。

この上なく不幸なことに、人は真実の寛容さをもっていない。

人は自分自身の利己的な利益、熱望、成功、知識や経験、苦惱、快樂などを心配するだけである。

世の中には、単なる偽の寛容さというのをもっている人が多くいる。ずる賢い政治家の中に、あるいは権力や名声、地位、富などの利己的な目的のために金銭をばらまく猫かぶりの選挙候補者の中に、偽の寛容さが存在する。猫と野うさぎとを混同してはならない。真の寛容さとは、欲望や利害を離れた私心のないものである。しかしそれを政界の狸たちや、ずる賢い資本家、女を欲しがる好色漢などがもっている利己的な偽の寛容さと、たやすく取り違えてしまうのである。

寛容さはわれわれの真心からやって来なければならない。真の寛容さはマインドには属さないものである。真の寛容さは真心からだよう芳香である。

もし人々が寛容であるならば、記憶に蓄積したあらゆる恨みや過去における多くの痛ましい経験のすべてを忘れることができるだろう。そして常に幸福で、常に寛大で、真の誠意にあふれ、一瞬一瞬生きることができよう。

不幸にも我（エゴ）とは記憶であり、それは過去に生き、常に過去に戻ろうと欲する。過去は人々を圧倒し、幸福を破壊し、愛を殺してしまふ。

過去に瓶詰めになっているマインドは、われわれが生きている「この瞬間」のもつ意味の深さを統合的に理解することは決してできない。

慰め<sup>なぐさ</sup>の言葉を求め、悲嘆にくれる心を癒<sup>い</sup>すため貴い香油を乞<sup>こ</sup>うてわれわれに手紙を書いてくる人は多いが、嘆き悲しんでいる人を慰めようと心を傾ける人はごく僅かである。

今生きている悲惨な状態をとうとうと語るためにわれわれに手紙を書く人は多いが、手元にある一個のパンを他の貧しい者と分かち合おうとする者は非常に少ない。

あらゆる結果の背後には原因が存在し、その原因を変えてのみ結果を変えることができる、ということ人はわがらうとしない。

「我」、愛すべきエゴは、われわれの前世において活動していたエネルギーであり、その過去のエネルギーが原因となって、現在のわれわれの存在が条件付けられているのである。

原因を改め、結果を変換するためには、寛容さが必要である。われわれの現世の舟を賢明に操縦するためには、寛容さが必要とされる。

われわれ自身の人生を根本から変革するためには、寛容さが必要なのである。

事実、本物の寛容さというものはマインドには属していない。真の思いやり、本当に誠意のある温情は、決して恐怖の産物であろうはずはないのである。

恐怖は思いやりを破壊し、ハートの寛容さを粉々にし、われわれの内にある愛というすばらしい芳香を消滅させてしまうものである。

恐怖はあらゆる墮落の根源であり、あらゆる戦争の隠された原因である。人々を退廃させ、そして殺害を犯す致命的な毒なのである。

学校の教師は、生徒に対して「真実の寛容さ」「勇氣」「心からの誠意」の道を歩むよう導くことがいかに重要であるかを理解しなければならない。

過ぎ去った世代の、弱くて愚鈍な人々は、恐怖というものがもつその毒性を理解しないばかりか、逆にそれを温室の中の花のように大切に育ててきたのである。その結果、腐敗、混沌、無秩序がはびこってしまった。

教師は、われわれが生きているこの時代、今日のこの危機的状態というものを理解しなければならない。そして原子力時代にふさわしい、革新的な倫理観を基礎とする新しい世代の確立を急ぐべきである。その革新的な倫理観は、苦痛と不幸に満ちたこの時代に「思考」という名の莊嚴なびきの中で今夜明けを向かえようとしている。

『根元的教育』とは、新時代の新しい波動のリズムに調和した、心理革命および倫理革命を基礎とするものである。

利己的な競争による凄まじいばかりの戦いに終止符を打つことができるのは、協力の心だけである。寛容という真正かつ革新的な法則を抜きにして、われわれは協力するということを知るのとは不可能である。

寛容さの欠如、そして自己本位がいかに恐ろしいかを、あらゆる角度から理解することが緊急に必要である。それはインテレクチュアルなレベルだけではなく、マインドの中の無意識層や潜在意識層の様々な歪曲した部分においても理解しなければならぬ。われわれの内において自己本位と寛容さの欠如について意識が目覚めたとき初めて、われわれの心から、マインドに属さない真の愛と真正な寛大さのうっとりするような芳香が発せられるのである。

### 13 理解と記憶

記憶するということは、見たり、聞いたり、読んだりしたこと、また他の人が自分に対して言ったことや自分に起こったことなどをマインドに蓄積することである。

教師は自分の語った言葉であるとか、文章、教科書に書いてあること、本の章まるごと、そしてうんざりする宿題などを、句読点さえも間違わずにすべてを記憶するように生徒に望んでいる。

試験にパスするということは、人から教わったことや機械的に読んだものを思い出すということである。記憶していることを言葉や文字にすること、記憶に蓄積しているすべてのことをオウムやインコのように繰り返すことにはかならないのである。

記憶したものをすべてレコードのようにただ繰り返し返すことが、イコール深く理解したことではない、ということを通して新しい世代の人々は理解する必要がある。記憶しているということは理解しているということではない。理解のない記憶は何の役にも立たない。記憶というものは過去に属するものであり、死んだようなもの、もはや生命のないものである。

小学校から大学までのすべての生徒は、心から理解するということの深い意味を真に知る必要がある。それは欠くべからざるものであり、緊急かつ直ちに行うべきものである。

「理解する」ということは何か瞬間的、直接的なものであり、強烈にわが身で生きるものである。それは大変奥深く体験することであり、必然的に意識の目覚めた行動の内にある真の「源泉」となるものである。

思い出す、記憶するということは死んだものであり、過去に属するものである。そしてそれらは不幸にも、われわれが機械的に真似をしたがったり、無意識的に追いつけたりするような理想であるとか、信条、考え、観念論などに姿を変えるのである。

「本当に理解した」ととき、心から理解したとき、内的に深く理解したとき、そこにあるのは意識の内的圧力、われわれが内側にもっているエッセンスから生まれた不断の圧力、そういったものがただ押し寄せて来るだけである。

真に理解したときというのは、自発的で、自然で、素直であり、選択という抑圧的なプロセスから解放された行動となって、また全然ためらうことのない純粹な行動となって現れるものである。理解が行動の「秘密の源泉」となったとき、それは本当にすばらしい建設的なものであり、本質的に威厳の伴うものとなるのである。

読んだものや、憧れの理想、教えられた行動の規範、また記憶に蓄積された経験などを思い出し、それに基づいてとる行動というのは打算的である。それは抑圧された選択に属するものであり、二元主義的であり、観念による選択を根拠にしたものである。それでは必然的に間違いや痛みといったものを伴うことになる。

記憶に合わせて行動するとか、記憶に蓄積されている思い出に一致するように行動を調整するなどは、何か人工的であり、愚かなことである。それは自然発生的ではないため、必然的に間違いや痛みが後からついて来るのである。

試験にパスしたり、進級するということは、どんな愚かな者であっても、ある程度の抜け目なさや記憶力があればできるのである。

それに対して試験を受けようと勉強してきた事柄を理解するということは、全く異なったことである。それは記憶とは無関係であり、真の知性や理解力に属するものである。それをインテリクチュアリズム（理性偏重）と取り違えてはならない。

記憶という倉庫に蓄積したあらゆる類の理想や理論、そして過去の思い出といったものに基づいていつも行動するような人は、常に比較をしている。そしてその比較には必ず妬みが伴うものである。そういうタイプの人は自分自身を、自分の家族を、自分の子供を、隣家の子供とか隣人と比較をする。自分の家、家具、服、すべての物を隣近所の人々がもっている物と比較する。自分の観念を他の人の観念と比べたり、また自分の子供の知性・理解力を他の子供のそれと比べる。そうして妬みが起こり、それがまた行動の秘密の源泉となってしまうのである。

この世の不幸なことは、社会のあらゆる機構は妬みと所有欲とを基盤としているということである。人はみな、人を羨む。その人の観念や、もっている物、人柄を羨み、そしてお金を羨む。もっと多くのお金を獲得しようとし、また記憶に蓄積するために、新しい理論や新しい観念を獲得しようとし、欲するのである。また隣人を羨まらしめさせるために新しいものを獲得しようとする。

本来本物の「真の理解」には真の愛が存在し、それは記憶の単なる言語化や文字化ではない。

記憶された事柄や、記憶を頼りとする事柄というのはすぐに忘れ去られる。記憶というのは当てにならないものだからである。生徒は記憶という倉庫に理想や理論や教科書全部を蓄積するが、それは実生活におい

て何の役にも立たない。なぜならそれらは結局、記憶から全く跡形もなく消え去ってしまうからである。

機械的に本ばかり読んでいる人々、記憶という倉庫に理論を詰め込むことを楽しみとしている人々は、マインドを破壊し、惨めに傷つけるだけである。

われわれは深い理解に基づいた、意識に目覚めたところの真の勉強について異論を唱えているのではない。時代遅れの教育学の、古くさいやり方を問題にしているだけなのである。機械的勉強システムや棒暗記などに異議を唱えているのである。真の理解が存在すれば、記憶は余計なものである。

われわれは勉強をする必要があり、有益な本も、学校の教師も必要である。また導師、精神的指導者、大師なども必要である。しかしあらゆる角度からその教えに関して理解することが大切である。当てにならない記憶の倉庫に教えられたことをただ単に蓄えることばかりに専念してはならない。

自分自身を記憶に蓄積した過去の思い出や理想と比較したり、望みの自分と現実にはそうではない自分を比較したりする悪い趣味をもっている限りは、われわれは決して真に自由になることはできないのである。

われわれが受け取った教えを真に理解できたときというのは、それを記憶する必要も理屈づける必要もないのである。

今ここにいる自分といずれそうなりたい自分とを比較するところに、また今の自分の実生活と自分が憧れている理想的な生活とを比較するところに、真の愛は存在しない。

あらゆる比較というものは忌まわしいものであり、その比較するといふときに、恐怖心や妬み、自尊心な

どが生まれるのである。自分が欲するものを得ることができないかもしれないという恐怖心、他人の向上に対する妬み、さらに自分が他の人々より優れていると思ひ込む自尊心などである。

われわれが生きているこの実生活で重要なことは、たとえ容姿が醜かろうと、妬み深かろうと、また自分勝手であるとか、欲張りであるとかそうでないとか様々であるが、ともかく自分が聖者であるかのように自惚れたりすることなく、完全なるゼロから出発して、自分自身を深く理解することである。つまり自分のありのままを理解することであり、望みの自分であるとか、理想の自分を見ることがではない。

「エゴ」「我」を解体するには、自分自身を観察することを学ばなければならない。また現実的にまさに今現在ここにいる実際のわれわれそのものを理解し、知覚しなければ、それは不可能である。

もし本当に理解したいのであれば、教師の言うこと、導師や神父や精神的指導者などの言うことに耳を傾けなければならない。

新しい時代の子供たちは、自分の両親や教師、精神的指導者、導師、大師などに対する敬意や尊敬の念を失っている。

われわれが自分の両親や教師、精神的指導者に対して敬意を払い、尊敬するといふことがないのであれば、彼らの教えを理解することは不可能である。

深く理解もせず、単に丸暗記したことだけを機械的に思い出すというのは、われわれのマインドや心を破壊し、妬みや恐怖心、自尊心などをわれわれの内に生じさせてしまうことになる。

意識が目覚め、かつ人の言うことを奥深く聴くことが本当にできたならば、われわれの内にすばらしい力が、そしてあらゆる機械のプロセスから、あらゆる賞賛から、あらゆる記憶から解放されたところの強大で、自然で、素直な「理解」というものが押し寄せて来るだろう。

もし生徒の脳が、義務的に記憶するための莫大な努力から免除されるのであれば、中学生に核の構造や元素の周期率表を教えることは全く可能であり、さらに高校生に相対性理論や量子に関して理解させることも不可能ではない。

中学校の教師たち何人かと話したことがあるが、彼らは古くさい時代遅れの教育学に全く狂信的に固執していることがわかった。彼らは生徒に、たとえ理解できなくても全部暗記するようにと望むのである。

ときには丸暗記するよりは理解したほうが良いと認めることもあるが、しかし物理や化学や数学などの公式は暗記すべきであると主張するのである。

そのような考え方が間違っているのは明白である。なぜならば物理、化学、数学などの公式をインテレクトのレベルだけではなく、マインドの他のレベル、つまり無意識、潜在意識、随落意識などのレベルにおいても完全に理解されたとき、もはや記憶する必要はなくなるのである。それはわれわれの心理の一部分となり、それが求められるときにはいつでも、即時に本能的認識として表現され得るからである。

このような完全な認識は一種の「全知」、意識的、客観的表現方法をわれわれにもたらすこととなる。

奥深い内観的瞑想を通じてのみ、初めてマインドのあらゆるレベルについて深く理解することが可能になるのである。

## 14 統合

「全体的統合」、それこそ心理が目ざす最高の目標の一つである。

もしも「我」が単一であれば、心理の統合という問題はいともたやすく解決されるであろう。しかし残念ながら実際、「我」はわれわれ一人一人の中に複数で存在する。

「複数の我」、これこそわれわれを悩ますあらゆる内的矛盾の根本的原因である。

もしわれわれが自らの内的矛盾を含めて、心理的にどういう形をしているのか、その自分の全体像を鏡で見ることできたなら、真の個性を未だもっていないという悲しい現実に突きあたるだろう。

人間の有機体は、「複数の我」（『ノーシス心理革命』で詳説している）によってコントロールされている。ばらばらしい機械である。

「新聞を読む」とインテレクトの我が言う、すると「パーティーへ行きたい」と感情の我が叫ぶ、そして「パーティーだって！とんでもない、それより散歩に行くほうがましだ」と運動の我が顔をしかめて言う。すると「いや散歩には行きたくない、腹がへったから何か食べたい」と生存本能の我が叫ぶ……。

エゴを構成している一つ一つの小さな我は、命令し、支配し、主人になりたいと思っているのである。

心理革命の光に照らすと、我は軍団（＝複數）であり、人間は一つの機械であることが理解できる。

小さな我々は互いにけんかをし、自分が最もすぐれていると言って争い、それぞれがボスに、主人に、リーダーになりたがっている。

これは、間違つて「人」と呼ばれているかわいそうな理性的動物（インテレクチュアル・アニマル）の内にある心理的分裂、という嘆かわしい状態を示している。

「心理」における「分裂」という状態をよく理解する必要がある。分裂するということは、自分自身がバラバラになる、分散する、裂ける、矛盾するということである。

「心理的分裂」の主な原因はおうおうにして、この上もなく繊細で、うっとりする表現で身を隠す「妬み」にある。

妬みには多面性があり、いろいろな理由によって自らを正当化しようとする。妬みは、あらゆる社会機構の秘密のバネとなり、愚かな人間は妬みを正当化して喜ぶ。

金持ちは金持ちを妬み、もつと金持ちになりたがる。一方、貧乏人も金持ちを妬み、自分もまた金持ちになりたいと思う。文筆家は他の文筆家を妬み、もつとうまく書きたいと思う。経験豊かな人は、自分よりも多くの経験を積んでいる人を妬み、その人以上の体験を積みたいと望む。

人は、パンと衣服と雨露をしのぐ場所をもつていてもそれだけでは満足しない。他人のもっている車や家、衣服、友人または敵のもっている大金などに対して妬みを感じ、その妬みが秘密のバネとなって、もつと良

くなりたい、他の人に負けないように物や衣服や名誉をより多く獲得したい、と思うものである。

このことで最も悲劇的なことは、経験や名誉、物やお金などを蓄積していくうちに、われわれの「複數の我」は巨大化し、自分自身の中の内的矛盾や恐ろしい分裂、そして良心の残酷な闘いなどがますます強化されていくことである。

そういった妬みをバネとするものは、すべて苦痛を伴うものであり、そのいずれも悲嘆にくれた心に眞の満足をもたらすことはできない。それらは、われわれの心理の中に残酷さを増大させ、痛みを増やし、そしてますますひんぱんに不満をつのらせていくだけである。

「複數の我」は、常に言い訳を見つけ、極悪の犯罪に対してまでも正当化しようとする。そして妬み、獲得し、蓄積するというプロセスが、他人の犠牲の上に成り立っているときでさえ、それを進化、発展、前進などと呼ぶのである。

人々の意識は眠っているために、自分が妬み深く、残酷で、強欲で、そして嫉妬深いということに気がつかない。あるきっかけで自分がそうであることに気がついたとしても、自分を正当化するか、もしくは自分を責めるか、または逃げ道を探すだけで理解はできないのである。

人のマインドは本来妬み深い性質であるため、妬みそのものを発見するのはむずかしい。マインドの構造は、「妬み」と「獲得」を基礎としている。

妬みという感情は、学校にいるところから始まる。クラスの中で一番頭の良い者、最も優秀な成績をおさめる者、カッコイイ服や靴、自転車をもっている者、素敵なスケート靴やきれいなボールなどをもっている



者を羨ましく思う。

生徒のパーソナリティ形成にたずさわる立場にある教師は、妬みのもつ際限なき展開をよく理解した上で、生徒の心理の中に、そのことを十二分に理解する礎を築かねばならない。

マインドは本来妬み深い性質であり、「自分のほうがもっと(MORE)」という考え方しかない。「私のほうがもっとうまく説明できる。私のほうがもっと多くの知識をもっている。私のほうが才能がある。私のほうがもっと知的である。私のほうがより多くの名誉を、尊敬を、完全さを有しており、より高い進化状態にいる……」などである。

マインドのすべての機能のその根底には、「自分のほうがもっと(MORE)」というのがある。「自分のほうがもっと(MORE)」という気持ちだが、妬みに隠された内的バネなのである。

「自分のほうがもっと(MORE)」というのは、マインドの比較過程である。比較過程はすべて忌むべきものである。例えば、私のほうがあなたよりもっと知的であるとか、誰々さんはあなたよりもっと誉れが高い、誰々さんはあなたよりもっと良い人である、あなたより賢く、より親切で、もっと美しい……などである。

「自分のほうがもっと(MORE)」という考えは時間を創る。「複数の我」は隣人よりもっと良くなるために時間を必要とし、また自分はとても才能があり、有力者になれることを家族に示すためにも時間が必要である。また自分はずっと知的であり、もっとパワフルであり、もっと強いなどといったことを敵や自分が妬んでいる人々にひけらかすにも時間がある。

比較して思考するその基礎には、妬みがあり、それはまた不満や、不安、屈折した感情といったものを起こさせる。

不幸にも、人はある極から正反対の極へ、端からもう一方の端へと移行し、まん中を歩くことを知らない。多くの人々は不満や妬み、強欲や嫉妬と闘うが、それらに対する闘いは決して心に真の満足をもたらすことはないのである。

安らかな心に宿る真の満足感、取って付けられるようなものではなく、それはわれわれが不満の原因となるもの(嫉妬、妬み、強欲など)を深く理解したとき初めて、全く自然に自発的な形でわれわれの中に生まれるということを直ちに理解する必要がある。

真の満足感を得るために、お金やすばらしい社会的地位、名誉やその他そういった類のものを手に入れようとしている人は、完全に誤りをおかしている。なぜならば、そういうものはすべて妬みを基礎としており、妬みの道は決して安らかで満足感にみちた心には通じていないからである。

「複数の我」に瓶詰めになっているマインドは、妬みを美德としたり、あげくの果てにはうっとりするような名前をつけるようなことまでする。例えば、発展とか、進化、向上心、威厳をかけた戦いなどがそうである。

こういったものはすべて、人に分裂、内的矛盾、内なる秘密の闘い、解決困難な問題などを生じさせる。

言葉のもつ最も完全な意味において、本当に「統合された」人を見つけるのは、困難である。

われわれ自身の中に「複数の我」が存在している間は、「全体的統合」の域に達することは、全く不可能である。

われわれ一人一人の中に三つの基本的要素が存在するということをここで理解する必要がある。その三要素とは、一番目に「パーソナリティ」、二番目に「複数の我」、そして三番目に霊的な成分すなわち「人のエッセンス（魂）」そのものである。

「複数の我」は、妬みや嫉妬、強欲などの原子を爆発させることによって、霊的な成分を荒々しく浪費する。われわれは複数の我を根絶し、われわれの内に霊的な成分を蓄え、意識の永続的中心を確立しなければならない。

意識の永続的中心をもっていない人は、統合されるということはない。

唯一、意識の永続的中心が、われわれを真に個性的な存在とするのである。

唯一、意識の永続的中心がわれわれを統合させるのである。

## 15 単純さ

われわれは直ちに、創造的な理解力を開発する必要がある。なぜならそれが人生において本当の自由を人に与えるものだからである。もしそれを理解しないのであれば、深く分析するという本当の批判能力を得ることは不可能である。

学校や大学の教師は、自己批判的態度による理解という道を生徒に指導しなければならない。

前章でわれわれは妬みに関する諸々のプロセスについて広範囲に勉強してきた。もし宗教的嫉妬であれ、情欲的嫉妬であれ、いずれにせよあらゆる種類の嫉妬を根絶したのであれば、妬みの本質について完全に意識を目覚めさせなければならない。というのは、妬みのもつ際限のないプロセスを深く内的に理解して初めて、われわれはあらゆる種類の嫉妬を根絶することができるからである。

嫉妬は夫婦の絆を断ち切り、友情をこわし、また宗教戦争や、兄弟殺しに至らせるような憎悪、殺人、そしてあらゆる種類の苦痛を生じさせる。

妬みはあらゆる手段を使って、崇高な目的のうしろに身をかくす。至上の聖者や大師、導師マハトマが存在したということを聞いて、自分もまた聖者になりたいと欲する者の内にも妬みが存在する。他の慈善家よりもっとすぐれた慈善家になろうと努力する者の内にも、また美德で満ちた聖人の存在を聞いて自分もその美德を得たいと欲する者の内にも、妬みが存在するのである。

聖者になろうとする欲望、高德の人になろうとする欲望、偉大な人物になろうとする欲望、そういう欲望の根底には妬みがある。

高德ではあるが、大きな間違いを犯した聖者たちがいる。その例として一人の人物のことが思い出される。その人物は自分自身を大層な聖者だと思い込んでいた。あるとき、とても腹をすかした哀れな詩人が、その聖者に美しい詩を特別に捧げるために家の戸を叩いた。詩人は老いて、衰弱し切った体をしており、食べ物を買うのになった一枚の硬貨しかもち合わせがなかった。

そのとき、詩人は聖者が喜んでくれる姿以外は何も思い浮かばなかった。しかし聖者は哀れみ深くではあるが眉をしかめて、「友よ、ここから出て行っておくれ。さあ、さあ。こんなことはしないでおくれ、お世辞などぞっとするよ。私はこの世のくだらないことには関心はないのだ。この世は幻想である……。私は、謙虚と質素の道を歩いているのだからね」と言いつて戸を閉めた。そのときの哀れな詩人の驚きと言ったら大変なものであった。

この不幸な詩人は、わずか一枚の硬貨でも恵んでもらえたらと思っただけなのである。しかし硬貨をもらえるところか、人を傷つける平手打ちにも似た言葉で聖者に侮辱されてしまったのである。彼の心は傷つき、詩を書いたその紙片をずたに引き裂いて、力なく足を引きずりながら街の通りを去って行った。

新しい世代の者は、真の理解という土台の上に立たなければならぬ。なぜなら、そのような理解とは、百パーセント創造する力があるからである。

記憶や想い出には、創造する力がない。記憶は過去の墓場であり、記憶や想い出は死んでしまったものである。

真の理解力とは、完全なる解放への心理的要因である。

記憶を呼び起こしても、われわれは本当に解放されることはない。なぜならそれは過去に属するものであり、それゆえ死んだものだからである。

理解とは、過去のものでも未来に属するものでもない。理解とは、われわれが今ここで生きているこの瞬間に属するものなのである。一方、記憶は常に過去の考えを引きずっている。

確かに、科学や、哲学、芸術、宗教などを勉強することは必要であるが、勉強したことを単に記憶するだけでは足りない。記憶というのは本来不確かなものである。

知識を記憶という墓場に積み上げるのは、愚かなことである。本来、理解すべき知識を過去が眠る墓穴に埋葬するのは、ばかげている。

われわれは決して学問や、知恵、科学に対して異論を唱えているのではない。ただ、知識という生きた宝石を、記憶という腐った墓地に積み上げておくのはもったいないと言っているのである。

われわれは学び、調べ、分析する必要があるが、それをマインドのあらゆる層をつらぬいて理解するためには、さらに深く瞑想しなければならない。

真に単純な人は、深い理解力を持ち、シンプルなマインドをもっている。

人生で重要なことは物事を記憶という墓地に埋葬することではない。それをインテレクトのレベルだけで

なく、マインドの無意識および潜在意識のあらゆる領域においても理解することが大切なのである。

学問や知識は、直ちに理解に変わらなければならない。知識や学問が、本当に創造的な理解力に変換されるとき、われわれは即座にあらゆるものが理解できるのである。なぜなら理解というのは、即座に一瞬にしてなされるものだからである。

単純な人のマインドは複雑ではない。マインドが複雑であるというのは、記憶にたよっているからである。われわれの内にあるマキャベリの「我」とは、蓄積した記憶そのものなのである。

人生の経験は、真の理解へと変換されるべきである。

経験が理解へと変わらないのであれば、また経験が記憶の中に積み上げられたままなのであれば、やがてそれらは腐敗した墓をつくり、その墓の上に動物的インテレクトの悪魔の火、煩惱の火が燃えさかり始めるであろう。

精神性を全くもっていない動物的インテレクトは、単に記憶を言葉にしているだけで、墓石の上で燃えているロウソクのようなものである。

単純な人のマインドは、経験から解放されていて自由である。というのは、経験がすでに理解に変わり、創造的な力へと変換されているからである。

生と死は親密につながっている。種子が死んで初めて芽が生まれ出てくるように、経験が死んで初めて理解が生まれる。これが本当の変換のプロセスである。

マインドが複雑な人というのは、経験でいっぱい記憶をかかえているが、これは創造性豊かな理解力が欠けているということである。もし経験というものをマインドのあらゆるレベルで完全に理解したならば、それはもはや経験として存在せず、理解力として生まれ変わるのである。

まず初めに経験をする必要がある。しかし、それを経験の領域にとどめておくならば、いたずらにマインドを複雑にし、難しくするだけである。われわれは強く生き、そしてあらゆる経験を創造性豊かな深い理解力に変換する必要がある。

理解力をもちシンプルで単純になるためには、世を捨ててお布施乞いをし、粗末な服を身につけ、人里離れた庵に住まなければならないと思っている人々がいるが、それは全く間違っている。

人里離れて暮らしている隠者や行者、物乞いする者の中にも、マインドが大変複雑で難しい人が大勢いる。

たとえ世間から離れて隠者のごとく生きていたとしても、経験でもって記憶をいっぱいにし、それが思考の自由な流れを妨げているのであれば何にもならないのである。

もし記憶の中に充滿している情報が十分に理解されておらず、またマインドの歪曲した部分や通路状の部分、マインドの無意識層などで、それらの情報が正しく意識化されていないのであれば、いくら聖者のような人生を送ろうと望んで、実際に隠者のように暮らしても無益である。

頭で得た情報を創造性豊かな本当の理解力に変換する人、人生経験を奥深い真の理解力に変え、記憶に何も残さず、本当に充実して一瞬一瞬を生きている人は、たとえ都会で豪華な邸宅に住んでいても、単純で、シンプルである。

七才未満の小さな子供たちは、単純で内的な真の美しさに満ちあふれている。それは、「心理的我」が全く不在であり、生命の生きた「本質」だけが表に現れているからである。

われわれのハートとマインドに、あの喪失した幼な心を取り戻さなければならない。もし本当に幸せになりたいのであれば、無垢を取り戻すべきである。

経験や学問が奥深い理解に変わったとき、記憶という墓地には何も残らず、われわれは単純で、シンプルで、無垢で、そして幸福になるのである。

体験したことや獲得した知識について、深く瞑想をし、充分な自己批判をし、かつ内側の心理を分析することによって、それらすべてを創造性ある深い理解力に変えることができる。これこそが、知恵と愛から誕生した本当の幸福の道である。

## 16 殺人行為

殺すという行為は、この世で最も破壊的で最悪の墮落した行為であるということは、全く疑いの余地がない。

殺すという行為の中で最も凶悪なものは、われわれの同胞、つまり人の命を奪うことである。狩猟家が猟銃で森に住む無垢な生き物を殺すのは大変恐ろしいことに違いないが、同胞である人間を殺すことは、何千倍も、何万倍も忌まわしいことである。

単に機関銃や、猟銃、大砲やピストル、原子爆弾によるだけでなく、心を傷つけるような視線、相手を見下すような目つき、軽蔑に満ちた目つき、憎悪でいっぱい目つきといったものもまた殺しの手段となり得る。さらに、不愉快な行為であるとか、腹黒い行為、侮辱に満ちた言動、人を傷つけるような言葉も同様である。

視線や言葉、残酷な行為で自分の父親や母親を殺してしまった親不孝者がこの世にあふれている。無意識の内に妻を殺した夫や、無意識の内に夫を殺した妻が世の中にあふれている。

われわれが生きているこの残酷な世界で最も不幸なことは、最愛の人を殺してしまうことである。

人は、パンのみで生きているのではなく、いろいろな心理的要素によっても生きているのである。

もし妻が許していたのであれば、もっと長生き出来たであろう夫の数は多い。

もし夫が許していたのであれば、もっと長生き出来たであろう妻が多数いる。

もし息子や嫁が許していたのであれば、もっと長生き出来たであろう父親や母親も数多くいる。

われわれの愛する人を墓場へと送りこむ病氣の原因となっているものに、人への刺すような言葉、傷つけるような目つき、また不愉快な行為などがあげられる。

老衰し、退廃したこの社会には、純粹無垢のふりをした意識の眠った殺人者が大勢いる。

刑務所は殺人を犯した者でいっぱいだが、最も悪い罪を犯した者たちは、自分は潔白であると自負し自由に世間をかつ歩している。

どんな種類の殺人行為であっても、それを正当化することは一切許されない。人を殺すことで、人生におけるいかなる問題も解決することはできないのである。

今まで戦争によって解決された問題は一つもない。無防備な都市を爆弾で攻撃したり、大勢の人々を殺しても何の解決にもならない。

戦争というものは粗雑で、乱暴で、ひどく忌まわしいものである。意識を眠らせた人間機械が戦争を起こして、他の意識のない人間機械を破壊するというのが何と多くあることだろうか。

宇宙の惑星の規模の天変地異や、空の星が最悪の位置に配置されたことによって、たびたび多くの人々が戦争に突入する。

全く意識が目覚めていない人間機械は、ある種の宇宙波動が何らかの形で悪影響を及ぼすとき、彼らは破壊的な行動をとることになる。

もし人が意識を目覚めさせるのであれば、もし教師が学校にいるときから生徒を賢明に教育し、敵意や戦争について意識の目覚めた理解に導くのであれば、今とは異なった世界になるであろう。誰も戦争に突入しようとは思わないだろうし、宇宙の天変地異を誘発する波動は、今とは違った形で役立てられることになるだろう。

戦争は人肉嗜食<sup>カニバリズム</sup>において、洞穴の生活、最悪の畜生的根性、弓、矢、槍、血のらんちき騒ぎなどにおいてがする。それらは明らかに文明とは共存できないものである。

戦争において人はみな、臆病であり、恐怖心におののいている。メダルを多くつけている英雄こそ、まさに最も臆病で、最も恐がりである。

自殺者もまたとても勇気があるように見えるが、実のところ生きていくのを恐がった臆病者にすぎない。英雄というのも、恐怖の極限状態において狂気の行動をとった自殺者にはかならない。自殺者の狂気は、英雄の勇気と混同されやすいものである。

戦場において、兵士の行為、態度、視線、言葉、歩き方を注意深く観察してみれば、彼らが全くの臆病者であることがはっきりするであろう。

教師は、生徒に戦争についての真実を教える必要がある。そして生徒が意識的にその真実を経験できるように導かなければならない。

もし、人が戦争のもつ恐ろしい真実について完全に意識を目覚めさせるのであれば、また教師が生徒を賢明に教育する術を知っているのであれば、いかなる国の人々も自分の生命が危険にさらされるような所へ、ただ単に従ってついていくということはないであろう。

『根元的教育』は、今すぐすべての学校（小学校、中学校、高校、大学）において実施されるべきである。なぜなら「平和」のために働かなければならないのは、まさに学校にいるときからなのである。

新しい世代の人々は、今こそ野蛮と戦争の意味するものについて完全に意識を目覚めさせる必要がある。

学校において、敵意と戦争に関してあらゆる面から深く理解されなければならない。

腐りかけた粗雑な観念をもつ古い世代の人々が、いつの時代にも若者たちを戦場へと駆り立て、犠牲にしてきた。まるで屠殺場へ牛を送るように。このことを新しい世代の人々は理解すべきである。

若者は、戦争挑発の宣伝や老人の道理に言いなりになってはいけない。なぜなら一つの道理にはもう一つの道理が対立し、一つの意見には別の意見が対立する。しかしいずれの道理も、意見も、戦争に関して真実を語ってはいないのである。

老人はいろいろな理論を駆使して戦争を正当化し、若者を戦争へと駆り出す。

何よりも大切なことは、戦争に関して議論することではなく、戦争というものの真実を体得することである。

われわれは理論や分析に対して異論を唱えているのではない。ここで言いたいのは、まず初めに戦争に関する真実を体得し、その後に論じたり分析を行うということである。

「汝、殺すなかれ」という真実を体得するには、奥深い内的瞑想なくしては不可能である。深い瞑想によって初めて、われわれは戦争に関する真実を体得できるのである。

教師は生徒に単なる知識としての情報だけを授けるのではなく、マインドを操作することや真理を体験することも教えなければならない。

老衰し退廃した現在の人類は、もはや殺すこと以外に考えが及ばない。殺して、殺して、殺しまくるというこの現象は、退廃した人類特有のものである。

テレビや映画の画面を通して、犯罪者がその手口やアイデアを宣伝する。

新しい世代の子供たちはテレビや子供向けのお話、映画、雑誌などを通じて、殺人や銃の撃ち合い、恐ろしい犯罪などの毒を毎日、多量に注入されている。

今日のテレビ番組では、憎悪に満ちた言葉、邪悪なもの、銃の撃ち合いなどを含まない番組というのは見あたらない。それらなしにはテレビはもはや機能しないのである。

地球における各国政府は、犯罪の宣伝に対しては何の対策もとっていない。子供や若者のマインドは、犯罪の道をおぼろしく歩する犯罪者によって操られているのが現状である。

映画や物語などを通して、殺すという考えがあまりにも宣伝、普及されているため、誰にとっても、それはとてもなじみ深いものとなってしまっている。新しい世代の反抗者たちはあたかも罪を犯すようにと教育されている。殺すことが楽しいから殺してしまい、他人が死ぬのを見て快感を覚える。そのようなことは、テレビや映画、本、雑誌で学んだのである。

至るところで犯罪がはびこっているのに、政府は殺すという本能をその根本から正すための措置を何一つとっていない。

教師が、このマインドの伝染病を治すために、大声を張りあげ世界を変革するときが来たのである。

教師は、警告の叫びをあげ、地球上の各国政府に映画やテレビなどに関して検閲の基準を考えなおすよう緊急に依頼すべきである。

そのような流血を見世物としたことが原因で、犯罪は恐ろしく増加している。いつの日にか人々は、殺される心配なしに自由に道を歩くことさえできなくなるであろう。

血を題材としたラジオやテレビの番組、映画、そして雑誌などが、殺人という犯罪の宣伝媒介となり、軟弱で退廃したマインドにそういう罪を犯す快感を覚えさせているのである。もはやそういったマインドは、他の人に銃弾をあびせるにしても、短剣で刺すにしても、その前に、自分の心に聞いてみようとはしない。

殺人という犯罪があまりにも宣伝されたため、軟弱なマインドは犯罪についてなじみ深くなり過ぎ、最近では映画やテレビで見たことをまねしようとして殺人を犯すことさえ起こっている。

国民の教育者である教師は、新しい世代のために闘うという義務を遂行すべきである。流血を見世物としているものを禁止する、すなわち殺人とか強盗などを扱ったあらゆる種類の映画を取り消しにするよう政府に要請すべきである。

そのような教師の闘いは、闘牛やボクシングにまで広げなければならない。

闘牛士は、最も臆病で罪深い者である。闘牛士は、有利なものはずべて自分のものにしたがり、観客を楽しませるために殺している。

ボクサーは、殺人の怪物のような者である。観客を楽しませるために、サディスティックなやり方で相手を傷つけ、殺したりする。

このような種類の流血の見世物は百パーセント野蛮であり、人々のマインドを犯罪の道へと進むよう刺激する。もしわれわれが本当に地球の平和のために戦うのを望むのであれば、あらゆる種類の流血の見世物に對して、徹底的なキャンペーンを始めなければならない。

人のマインドの中に破壊的要因があるかぎり、戦争は避けられないであろう。

マインドの中の戦争を引き起こすような要因には、憎悪、あらゆる種類の暴力、エゴイズム、怒り、恐怖心、犯罪本能、テレビやラジオ、映画などによって宣伝された好戦的観念などがある。



人の中に戦争を起こさせる心理的要因がある間は、平和のための宣伝、「ノーベル平和賞」は、無意味なものである。

実際、多くの殺人者が、「ノーベル平和賞」を受け取っている。

## 17 平和

平和は、マインドからやって来るものではない。なぜなら平和はマインドに属するものではないからである。平和は安らかな心よりたち昇る豊かな芳香の香水である。

平和とは、政策、国際警察、国際連合、両米州国家機構、国際協定、あるいは平和という名目で戦っているような軍隊の中にはない。

もしわれわれが本当に平和を望むのであれば、戦争中の見張り番のように、マインドを敏速かつ柔軟にして常に警戒し、注意深く生きることを学ばなければならない。それは平和というものが、ロマンチックな空想でも美しい夢でもないからである。

われわれが一瞬一瞬を油断しないで生きるということを学ばなければ、平和へ通じる道はしだいに狭くなり、歩くのがとても困難になり、しまいには袋小路に陥ることになる。

安らかな心に宿る真の平和とは、美しい娘がわれわれの到着を喜んで待っていてくれる家のようなものではない、ということであらかじめ知っておく必要がある。平和は、一つの目標でもなく、ある場所などでもない。また平和を追い求め、捜し、平和に関して計画を立て、平和のために戦い、平和のために宣伝し、そのために働く組織を設立するなど、これらのことは全く見当はずれなことである。平和はマインドに属するものではなく、安らかな心から発せられるうっとりするような香水なのである。

平和は売り買いできるものでもなく、緩和政策、特別な統制、警察などのシステムによって獲得できるものでもない。

ある国では、軍隊が野原を駆けめぐり、町や村を破壊し、人を殺し、盗賊の疑いある者たちを銃殺したりする。おそらくそれらはすべて平和の名のもとに行われていることだろうが、このような行動の結果は、人々の中に残忍性を増加させていくだけである。

暴力はより残虐な暴力を生み、憎悪はより強い憎悪を生じさせる。平和とは、征服されるものでも、暴力によって得られるものでもない。われわれが「我」を解体したとき、われわれ自身の中にある戦争をつくりだす心理的要因をすべて破壊したとき、そのとき初めて平和は訪れるのである。

平和を望むのであれば、それについてよく考え、勉強し、平和という肖像の片隅だけではなく、全体を見る必要がある。

われわれが心の底から根本的に変革したとき、平和はわれわれの内に生まれる。

平和のための組織、統制、緩和などという問題は、それぞれ孤立した項目である。それらは人生という大海における点であり、また「存在」という肖像全体から隔離した一部分である。そういうもので、決して平和という問題を根本的に、全体的に、そして決定的な形で解決することはできない。

平和という肖像の全体を見なければならぬ。世界に起こっている問題は、同時に個人に起こっている問題でもある。もし個人の内側が平和でないのであれば、社会、そして世界に戦争は起こり続けるであろう。

教師は、野蛮なことや暴力を好むのでなければ、平和のために働くべきである。

教師は新しい世代を担う生徒たちに、直ちに進むべき道を示す必要がある。安らかな心に宿る本当の平和とは何かを、そしてそれに確実に導いてくれる内的な道とは何かを示す必要がある。

人は真の内的平和というものを充分理解するに到ってはいない。望んでいることは、自分の歩いている道を誰も横切らないように、邪魔しないように、妨げないということである。しかし彼自身は他人を邪魔したり、困らせたり、同胞の生活を苦痛なものにしたりする権利を自分勝手に行使しているのである。

人は真の平和を体験したことがない。ただ平和について、愚かな意見、ロマンチックな理想、間違った概念をもっているにすぎない。

泥棒にとっては、警察が彼の仕事の邪魔をせず、罰を受けることなくまふと盗むことができることを平和と言うだろう。密輸者にとっては、当局から手入れを受けず密輸品をあらゆる所にもち込めることが平和ということになるだろう。略奪者にとっては、政府の検査官に禁止されず、物を大変高く売りつけ、思う存分搾取することが平和なのである。また売春婦にとっては、保健関係の当局者、あるいは警察に介入されることなくベッドで快楽にひたり、自由に男たちから搾取することが平和ということになるだろう。

各人それぞれが、平和について愚かな空想の数々をマインドに浮かべている。そうして平和に関して偽りの観念、信念、意見、愚かな概念というエゴまる出しの壁を、自分のまわりに積み立てているのである。

一人一人それぞれが自分の気まぐれや、好み、癖、間違った習慣などに合った自己流の平和というものを思い描いている。それが間違っているとしても、自分自身の平和を生きたために、空想で作った保護壁の内側

に閉じこもり、鍵を閉めるのである。

人は平和のために闘い、平和を望み、欲するが、平和がどういふものなのかを知らない。

人は自分のやりたいことが思い通りにできるように、他からうるさく言われたくないと望んでいるにすぎないのである。そしてそれを平和と呼ぶのである。

どのようなことをするのかは重要ではなく、人それぞれが自分のしていることは良いことだと思い込んでいる。人は極悪の犯罪に対してでさえ正当化しようとする。酔っぱらいが悲しそうにしていれば、それは悲しいから飲んでいと言ひ、楽しそうにしていれば、楽しいから飲んでいと言ひ、常にアルコールを飲むという悪癖を正当化する。人はみな、同じように正当化する。あらゆる犯行の言い訳を見つけ、誰も自分を悪いとは考えもせず、それどころか正義感の強い誠実な人間だと自負しているのである。

平和とは、働かず全く努力することもなく、すばらしくロマンチックな空想いっぱいの世界にとっても安らかに生きることだ、と勘違いしている放浪者が多くいる。

平和について見当違いの意見や概念が数多くある。

われわれが生きているこの痛ましい世界に、人々はそれぞれ、自分で作り出した空想的な平和や自分の考えている平和というものを求めている。人は、たとえ自分自身の内側に戦争、敵意、その他あらゆる問題を生じさせる心理的要因をひきずっていようと、自分が夢見ている平和、自己流の特別な平和をこの世に見ることを望んでいるのである。

世界的危機にある現在、有名になりたい者は平和のための組織を設立し、宣伝し、平和の擁護者となる。多くのずる賢い政治家が、たとえ自分の利益のために人々を犠牲にすることがあっても、また身にふりかかる危険から逃れるために殺人を命じたとしても、「ノーベル平和賞」を獲得していたということを忘れてはならない。

エゴ根絶の教義を地球の至るところで教えながら、人類に献身する真のマスターたちもまた存在する。

そのようなマスターたちは、われわれが内側にひきずっているメフィストフェレス\*的要素を根絶して初めて、心に平和が訪れるということを自分自身で体験して知っているのである。

一人一人の内に、憎悪や強欲、妬み、嫉妬、獲得欲、野心、怒り、自尊心などがある間、戦争は避けられないであろう。

平和を見つけたと自負している多くの人々がこの世にいる。しかしそういう人々を観察してみると、明らかに彼らは平和をかすかにも認識しておらず、ただ単にある種の孤独でなくさめになる習慣の中に、あるいはある特別な信仰などの中に自らを閉じ込めてしまっているにすぎないことがわかる。実際のところ、そういう人々は安らかな心に宿る真の平和というものを漠然とも体験したことがないのである。そのような人々は無知ゆえに、自分で人工的な平和をつくりあげ、本当の心の平和なるものと混同してしまっているのである。

われわれがもっている偏見、信念、先入観、欲望、癖などといった間違った壁の中で、平和を探すのは愚かである。

マインドの中に敵意や仲たがひ、問題や戦争を生じさせるような心理的要因がある間は、真の平和はないであろう。

真の平和は、正統な美を充分に理解するときやって来る。

平静な心の美は、真の内的平和というかぐわしい芳香を放つものである。

友情の美、そして礼節の芳香について、今ここで理解する必要がある。

言葉のもつ美しさを今理解することである。われわれの放つ言葉には、いつもそれ自体に誠意の成分が含まれている必要がある。リズムの乱れた言葉、不調和な言葉、ぞんざいな言葉、ばかげた言葉などは決して使うべきではない。

言葉の一つ一つが、誠実な交響曲シンフォニーとなるべきである。文章の一つ一つが精神的美しさで満ちたものでなければならぬ。黙るべきときに話すことは、話すべきときに黙っているのと同じくらい犯すべきことではない。罪深い沈黙もあれば、卑劣な言葉もある。

話すことが罪となるときもあり、黙っていることが罪となるときもある。話すべきときに話し、黙っているべきときに沈黙しなければならない。

言葉をもてあそぶのはやめよう。なぜなら、言葉は重大な責任を伴うからである。

言葉を口から出す前に、すべてその言葉のもつ重みを計るべきである。というのは、言葉の一つ一つが多

くの有益なものと多くの無益なもの、多くの恩恵あるいは多くの被害のどちらかをこの世にもたらすからである。

われわれのとり顔つき、身ぶり、手ぶり、態度、服装など、あらゆる行為に注意しなければならない。これらのもの——顔つき、身ぶり、手ぶり、服装、テーブルにつくときの椅子への座り方、食べ方、家や職場やその他で人に接するときの態度——が常に美しく調和のとれたものであるように。

親切な心の放つ美を理解し、良い音楽の奏でる美を感じとり、創造的芸術の美を愛し、われわれの思考、感じ方、行動のしかたをもっと洗練する必要がある。

至高なる美というものは、根元ねもとから完全に決定的に「我」が死んだとき初めて、われわれの中に生まれるのである。

われわれの内に「心理的我」が元気に生きている間、われわれは醜く、ぞっとするようなむかつく存在である。「複数の我」が存在する限り、われわれの内に完全なる美はあり得ない。

われわれが真の平和を望むのであれば、「我」を宇宙の塵と化さねばならない。そうすることによって初めて、内的美がわれわれの内に存在することになるだろう。そしてその美から愛という素晴らしいものと、安らかな心に宿る真の平和がわれわれの内に生まれるであろう。

創造力あふれる平和は一人一人の内に秩序をもたらし、混乱を排除し、そしてわれわれを心からの平和で満たす。

マインドは本当の平和というものを理解できない、ということを知る必要がある。安らかな心に宿る平和は、苦勞の結果でもなく、あるいは平和の宣伝に関わっている組織や団体に属しているからといってやって来るものでもない。

真の平和は、われわれがマインドとハートに無垢を取り戻し、繊細で美しい子供のような存在となったとき、そしてあらゆる美しいものと醜いものに、あらゆる良いものと悪いものに、あらゆる甘いものと苦いものに感じやすくなったそのとき、全く自然に、シンプルな形でわれわれのもとへとやって来る。

マインドと心の内に失ってしまった幼な心を取り戻す必要がある。

平和とは、果てしなく広大で無限であり、マインドによって形づくられるものではない。また気まぐれの結果でも、観念の産物でもない。平和は善意を超越した一つの原子成分、あらゆるモラルを超越した一つの成分、「絶対」という存在自身の中心から放たれる一つの成分なのである。

\*メフィストフェレス ドイツ伝説の悪魔。ゲーテの『ファウスト』の中では、ファウストが自分の魂を売り渡した悪魔として登場。

## 18 真 実

幼年または青年時代から、多くの精神的歪み、家庭内の深刻な問題、学校での困難などを背負い、われわれ悲しき存在の、苦難の道が始まる。

幼年時や若い頃は、それらの問題はわれわれにそれほど深く影響することはないが、成長していくにつれて次のように自問し始める。「自分は誰なのか？ どこから来たのだろうか？ どうして苦しまなければならないのか？ 自分の存在の目的は何なのか？」等々。

われわれは誰でも、人生の途中で自分自身に対してそのような問い掛けをしたことがある。あるときは、なぜこんなにも悲しみやむなしさ、戦い、苦しみがあるのか答えを求め、調べ、深く考え、理解しようとしたが、不幸にもいつもある理論や意見、信条、あるいは隣の人が言ったこと、またある物知り風の老人が言った答えなどに自分を瓶詰めにして、それで納得してしまうのである。

われわれは純粹なる無垢と平穏平静な心に宿る平和とを見失ってしまったために、あらゆる厳しさの中にある真実を直接体験することができなくなった。他の人の言うことに左右され、そして間違った道を歩んでいくのは明白なことである。

資本主義社会は、神の存在を信じない無神論者を徹底的に非難する。マルクス・レーニン主義社会は、神の存在を信じるものを非難する。しかし結局どちらも同じことであり、それは一つの見解、気まぐれな意見、

そしてマインドの投影にすぎない。たやすく信じる人も信じない人も、また懐疑的な人も、真実を体験したとは言えないのである。

マインドは信じたり疑ったり、意見を形づくること、推測することなどに満足するが、真実を体験することは、そういったことは別のことである。

われわれは太陽の存在を信じたり、信じなかったり、あるいは疑うことさえもできるが、天体の王である太陽にとってわれわれの意見などはどうでもよく、ただ存在するものすべてに光と生命を与え続けているのである。

盲信する、あるいは信じない、また懐疑的であるといったことの背景には、偽りのモラルから来る様々な影響と、偽りの尊敬という間違った概念が隠れている。そしてその陰に隠れて「我」は太り強くなっているのである。

資本主義社会においても、共産主義社会においても、それぞれの主義に従って、各々の気まぐれや偏見、理論に応じてそれぞれ特有のモラルがある。資本主義陣営でモラルとされているものが、共産主義陣営では非モラルとされたり、あるいはその逆もある。

モラルは習慣や場所、あるいは時代によって異なるものである。ある国においてモラルとされることが、他の国では非モラルと見なされ、ある時代にはモラルであったものが他の時代には非モラルとなる。モラルには本質的な価値は全くないのである。それを深く分析すると一〇〇パーセント愚かなことであることがわかる。

『根元的教育』はモラルを教えるのではない。『根元的教育』は、新しい世代が必要としている「倫理の革命」を教えるのである。

はるか昔の闇の時代から、真実を探し求めるために世間から遠ざかる人々というのはいつもの時代にも存在した。

しかし真実を探し求めるため世間から遠ざかるのは愚かなことである。なぜなら真実は世間に、そして今ここにいる人の内にあるからである。

真実は一瞬一瞬未知のものであり、それは見つけるために世間から離れたり、同胞を見捨てたりすることではない。

真実は、半分本当であるとか、半分間違いであるとかいう代物しろものではないのである。

真実は根元的である。真実かあるいは真実でない、ということであり、半分真実で半分間違いである、ということとは決してあり得ない。

真実が時間にしばられ、ある時代において真実であったものが、他の時代にはそうでなくなるといいうのはおかしいことである。

真実は時間とは全く関係がない。真実は時間ではないのである。一方「我」は時間であるゆえ、真実を知ることができない。

型にはまった、一時的なあるいは相対的な真実といったものを想定するのは愚かである。人々は、概念や意見を真実と言われているものと混同している。

真実は、意見や伝統的真実などとは無関係である。なぜなら、それらはマインドのところに足りない投影にすぎないからである。

真実は一瞬一瞬未知のものであり、心理的「我」がなくなったとき初めて体験できるものである。

真実とは、詭弁、概念、意見などの分野ではない。真実は直接体験してのみ認識できるものである。

マインドはただ意見を述べることができるだけであり、意見は真実とは無関係である。

マインドは決して真実を理解することはできないのである。

小学校から大学までのすべての教師は、真実を体験し、そして生徒にその道を示す必要がある。

真実は直接体験ということであり、理論や意見、概念などの分野ではない。

われわれは勉強する自由もあり必要もあるが、理論や概念、意見などの一つ一つに内包されている真実を自分自身で直に体験することが緊急に必要である。

われわれは研究し、分析し、探求していく必要があるが、勉強しているものすべてに含まれている真実を体験することが緊急である。それを後に遅らせるようなことがあってはならない。

マインドが対立した意見によって動揺したり、混乱したり、苦しんでいる間は、真実を体験することはできない。

マインドが静かになり、沈黙の中にあるとき初めて真実を体験することができるのである。

教師は生徒に深い内的瞑想の道を教え示すべきである。

深い内的瞑想の道は、われわれのマインドを静寂と沈黙へと導いてくれる。

マインドが沈黙し、思考や欲望、意見などが空になったとき、真実がわれわれのもとへやって来るのである。

## 19 知 性

おうおうにして西側諸国では、世界史の教師の多くが仏陀、孔子、マホメット、ヘルメス、ケツアルコアトル<sup>\*</sup>、あるいはモーゼ、クリシュナといった人たちを蔑視する傾向がある。

また、古代の宗教や神々、神話などに対してあざ笑い、ひやかし、皮肉などを言うこともある。それらはまさに知性の欠如によるものである。

教育過程のあらゆる段階において、宗教のテーマはもつと尊敬され、崇拝されるべきである。そしてその取り扱い方は、創造力豊かな真の知性に基づくべきである。

宗教の形式はその中に永遠の価値を保有しており、各国民あるいは各人種のもつ心理的または歴史的必要性に応じて形づくられている。

すべての宗教に、同じ原則と同じ不変的価値が存在する。ただ形式が異なっているにすぎない。

キリスト教信者の誰かが、仏教、ユダヤ教あるいはインドの宗教などを嘲笑するのは知性的とは言えない。なぜなら、すべての宗教は同じ土台の上に立っているからである。

多くの理性的な人々が、宗教とその教祖に対して皮肉った言い方をするのは、軟弱なマインドを中毒させ

ているマルクス主義の毒に原因がある。

教師は、生徒が同胞を心から尊敬し合う道を歩むよう指導すべきである。

無遠慮な人があるゆる理論をかかげて、寺院や宗教、宗派、あるいは学校や精神的団体を嘲弄するのは、全くもって嘆かわしく、卑劣なことである。

学校を卒業したあとは、あらゆる種類の宗教、宗派、学説を信仰している人々と場を共有していかなければならない。その時、ある寺院に入って取るべき態度を取れないような者は知的とは言えない。

学校で十年あるいは十五年間勉強をし、そして卒業するときになっても、若者たちは他の人々と同様にたいへん愚かで眠りこけており、学校へ入学した最初の日と同じように、空虚で知性が足りない状態のままである。

生徒は、中でも特に感情センター<sup>\*</sup>を至急開発する必要がある。なぜなら、学識がすべてではないからである。生命間の深い調和、ひっそりとたたずむ木立の美しさ、森で歌う小鳥の鳴き声、音楽のシンフォニー、美しい夕日の織りなす色彩などといったものを感じ取る必要がある。

また、人生の恐ろしい対象のすべて——例えば、われわれが生きているこの時代における残酷で無慈悲な社会的側面、栄養失調で飢えた子供たちを抱え、一切のパンを乞うている不幸な母親たちでいっぱいのは街頭、多くの貧しい人々が住んでいる壊れかけた建物、健康を害する燃料を使った車で充滿している嫌悪すべき高速道路など——を感じ取り、そして深く理解する必要がある。



学校を卒業すると、人は自分のもつエゴイズムや問題だけでなく、他の人々のもつエゴイズムや社会が抱えている多くの問題にも直面しなければならない。

最も深刻なことは、学校卒業時には学識面での準備はできていたとしても、意識が眠ったままであるため本当の知性をもち合わせていないことである。そのため学生は人生と闘う十分な準備ができていないのである。

本当の知性というのは何なのかを問い、明らかにするときにやって来た。辞書や百科辞典では、本当の知性のもつ意味を厳粛に定義することはできない。

知性なくして根元的に変換することはできないし、真の幸福もありえない。人生で本当の知性をもっている人に出会うのはとてもまれなことである。

人生で大事なことは、知性という言葉を知るだけではなく、その深い意味をわれわれ自身の内に体得することである。

多くの人は自分は知的であると自負し、また酔っぱらいは自分が知的であると自慢する。自分自身をあまりにも知的だと思い込んだカール・マルクスは、物質至上主義という道化芝居を書き、それによって世界から永遠なるものを失わせてしまった。様々な宗教の僧は銃殺され、仏教、キリスト教、その他の宗教の尼僧が辱めを受け、多くの寺院が破壊され、何千、何百万もの人々が拷問にかけられたりした。

誰でも自分は知的だと自慢することはできるが、本当にそうなることは難しい。

書物による情報や知識を得たり、体験をより多くしたり、あるいは他人を羨まし<sup>うらや</sup>がらせるために人より多くの物を手に入れたり、裁判官や警官を買収するためにより多くの金を手にしたからといって、知性なるものを自分のものにできるわけではない。

知性とは、何かを「より多く(MORE)」得たからといって、もてるものではない。「より多く」という過程によって、知性を自分のものにできると思っている人は、完全に間違っている。

「より多く」という有害なプロセスに関して、マインドの潜在意識および無意識のあらゆる領域において緊急に、徹底的に理解する必要がある。なぜなら、その奥に親愛なる「エゴ」、「我」、「私自身」が密かに隠れており、それが太り強くなるために、「より多く」、「もっと多く」と欲するからである。

われわれが内に抱えているこのメフィストフェレス、このサタン、この「我」が次のように言う。「自分のほうがあの人より多く金をもっている、もっと美しい、もっと知的である、もっと名声がある、もっと賢い……。」

知性なるものを本当に理解したいと望む者は、深く瞑想することによって、知性を感じ、知性を生き、知性を体得することを学ばなければならない。

人が、腐った墓に埋める不確かな記憶(機械知的情報、人生の体験など)が、常に、「(自分のほうが)より多く」、「(自分のほうが)もっと多く」という方向にわれわれを導く。このようにして、人は決して蓄積されるものもつ深い意味を理解するには到らないのである。

多くの人が本を読み、そしてそれを記憶し、さらに多くの情報を蓄積したことに満足する。しかし読ん

だ本の教えについて聞かれたとき、教えの深い意味を理解していないということがわかる。読んだ本のいずれの教えも自分では活用していないにもかかわらず、「我」は、もっと多くの情報を、もっと多くの本を欲するのである。

知性というものは、より多く書物から情報を得たり、より多くの体験をしたり、より多くの金や名声を獲得したからといって、自分のものになるというわけではない。われわれが「我」にまつわるすべてのプロセスを理解したとき、また「より多く」という機械的心理反応を深く理解したとき、知性はわれわれの内に花を咲かせるのである。

「より多く」の基本的中心はマインドであるということ把握する必要がある。実際、「より多く」は、そう要求する心理的「我」自身であり、マインドはその基本的な核である。

本当に知的になりたいのであれば、表面的なインテレクトのレベルだけではなく、マインドの潜在意識そして無意識のあらゆる領域において死ぬ決意をしなければならぬ。

「我」が死んだとき、「我」が完全に解体したとき、われわれの内に残る唯一のものは、真正なる「本質的存在」、真の「本質的存在」、あれほど求められてはいるが獲得するのが困難な本当の知性である。

人々はマインドに創造力があると思っているが、それは間違いである。「我」には創造力はなく、マインドは「我」の基本核なのである。

知性は生命の本質的存在に属しており、「本質的存在」の属性であるゆえに創造力をもつのである。マインドと知性を混同してはならない。

知性とは温室の花のように栽培され育つもの、あるいは貴族の称号がお金で買えるように何かお金で買えるようなもの、または素晴らしい図書館をもつようなものと思っている人々がいるが、それは完全に根本的に間違っている。

マインドのあらゆるプロセス、あらゆる反応、習慣になっている心理的（自分のほうが）「より多く」という反応などについて深く理解して初めて、知性の燃え立つ炎が自然に自発的にわれわれの内に燃えあがるのである。

われわれの内にもっているメフィストフェレスが解体していくにつれて、創造性豊かな知性の炎が少しずつわれわれの内に具現し、燃え盛り、燦然と輝き始めるのである。

われわれの真の本質は「愛」であり、その愛から、時間に属しない真正で本物の「知性」が生まれる。

#### \* ケツアルコアトル アステカ族の救世主 神。

#### \* 五つのセンター

- 人間の有機体を働かせる機能の一つに、五つのセンターがある。
- 1 インテレクトチュアルセンター（頭部） Ⅱ 頭脳としての働き。思考し、考える場。
- 2 運動センター（首のつけ根） Ⅱ 機械的動作・言動、習慣などの場。
- 3 本能センター（尾骨） Ⅱ 自己保存の本能、性本能などの場。
- 4 感情センター（太陽神経叢） Ⅱ 感情すべてに関係している。
- 5 性センター（性腺） Ⅱ 生殖機能に関係するが、本来霊的な力を持ち、この力によって、人間は進化、変革することができ、神近き存在となることができ、これらのセンターの調和が心身の健康を保つ。

全くの病人を除いて、人はみな人生において何かの役に立つ存在にならなければならない。しかし自分が何の役に立てるかを知ることが大変難しいことである。

この世で本当に重要な何かがあるとするならば、それは自分自身を知ることである。自分自身を知っているという人はとてもまれであり、また信じがたいかもしれないが、人生で天職の感性を開発したという人に出会うというのは容易なことではない。

ある人が自分の人生で成さなければならぬ役割を完全に悟ったとき、そのとき彼は自分の天職は信仰であり、それを伝道する人になることだと理解した。そして事実彼は、自らの自由意志によって、人類を導く存在へと自分を変えたのである。

自分の天職を認識した人、自分自身で自らの天職を発見できた人というのは、凄まじい変化を遂げるものである。そしてそれはや世間的な成功を追い求めたりせず、お金や名声、他から受ける感謝にはほとんど興味を示さなくなる。その代わりに自分自身の内にあるエッセンス（魂）から放たれた内的で、奥深い、未知なる呼び掛けに応じたことによってたらされる幸福に喜びを感じるのである。

このようなことで最も興味深いことは、天職というのは「我」とは全く関係ないということである。奇妙に思えるかもしれないが、「我」はわれわれ自身の天職を忌み嫌っている。というのは、「我」は絶え間なく入

ってくる多額の収入であるとか、高い地位や名声などといったものを欲するからである。

「天職」というものは、われわれ自身の内的エッセンス（魂）に属するものである。それはとても内的なものであり、とても奥深く、心の底にあるものである。

「天職」というものは、人に、あらゆる苦しみや悲しみを代償としてまでも、真の勇氣と無私無欲で、最も凄まじく、かつ危険を伴った仕事をさせようとするものである。それゆえ、「我」が真の天職を忌み嫌うのは当然なことである。

たとえあらゆる悪口や裏切り、中傷に平然として耐えなければならぬとしても、天職の感性は、同時に、真の英雄の道を進むようにわれわれを導いてくれている。

一人の人間が、「私は誰であるのか、私の真の天職は何であるのかを知っています」と真に言うことができる日、彼はその瞬間から本当に正しく、愛をもって生き始めることができるだろう。こうして一人の人間は自分の仕事の中に生き、そしてその仕事はその人の中に生きることになるのである。

真に誠実な心でこのように言える人というのは実際ごくわずかである。そう言える人は選ばれた人であり、天職への感性が最も高いところにある人である。

われわれの本当の天職を見つけることは、疑いの余地なく、最も深刻な社会問題であり、それは社会におけるあらゆる問題の根底となるものである。

われわれがそれぞれ自分の真の天職を発見するということは、事実、とても貴重な宝物を見つけるのと同

じである。

ある人が、完全に、確実に、彼の真の正当な職を見つけたとき、彼はただその事実だけで、絶対必要で不可欠な存在となるのである。

自分の天職が、今従事している仕事に完璧に一致しているときには、強欲も権力欲もみじんもなく、本当の使徒のごとく、自分の仕事を遂行する。

そのとき仕事は、強欲や退屈、または転職欲をわれわれに引き起こすかわりに、たとえ苦痛を伴ういばらの道を忍耐強く歩かなくてはならないとしても、本当の、深い、内的幸福感をもたらしてくれるのである。

実際、仕事がその人の天職と一致していないときというのは、「より以上に」という目でしかその仕事を見ることができない。

「我」の構造作用は、「より以上に」である。より多くのお金、より多くの名声、より多くの計画などである。そしてより多くを求める人物が偽善者、搾取者、残酷、無慈悲、妥協を許さない者になっていくのは当然のことである。

官僚社会をじっくりと調べてみれば、現在の仕事が個人の天職に一致していることは、全くまれであるということが確かめられる。

また様々な労働組合を詳しく見てみると、その仕事が個人の「天職」に一致していることはほとんどないということも確認できる。

特権階級について、それを洋の東西を問わず注意深く観察してみると、天職の意識が全く欠如していることがはっきりとわかる。いわゆる「お金持ちのお坊ちゃまたち」は、武器を手にして退屈しのぎに襲撃したり、無防備な女性に暴行を働いたりしている。彼らは人生に自分の居場所を見つけれず、道を迷ってさまよい歩き、そして変化を求めて「理由なき反抗者」となるのである。

世界的危機にある現在において、人類の直面しているこの混沌とした状態は凄まじくショッキングなことである。

自分の仕事に満足している人は誰もいない。なぜならその仕事は天職と一致していないからである。

職を求める人は山ほどいるが、それは誰も餓死したくないからであり、その職は自分の天職とは一致していない。

多くの運転手が医者かエンジニアになるべきであったり、多くの弁護士は大臣に、また大臣は服の仕立て師になるべきだったかもしれない。靴磨きを仕事とする者の多くが大臣、あるいは大臣が靴磨きになるべきだったかもしれない。

人々が自分に該当しない仕事、個々の「天職」と全く関係ない仕事についていることが原因で、社会機構は最悪な状態で動いている。それは該当しない部品で構成されたエンジンみたいなものである。その結果、大惨事や失敗、愚かなことが起こるのは避けがたいことである。

ある人物が天職の資質がそなわっていないにもかかわらず、宗教的指導者やインストラクター、または政治的リーダー、あるいは精神的団体、科学団体、文学団体、慈善団体などのディレクターとして働いている

場合、われわれはその人物が「より以上に」ということしか思考しようとせず、人に言えない秘密の目的をもって仕事を、より多くの仕事を自分自身に課していく姿を目の当たりに見ることができよう。

その仕事が個人の「天職」に一致しないときというのは、結果として搾取（利己的利用）に走るのは明白である。

われわれの生きている凄まじいばかりのこの唯物主義の現代において、わずかな天職意識さえもない多くの商人たちによって、教師という仕事が勝手気ままに占められている。その結果として、搾取、残酷さ、真の愛の欠如が横行することになったのである。

多くの者が医学部や法学部、または工学部で勉強するために、教えるということで学費を稼いだり、または他にやれるものがないからという理由で教えたりしている。そのようなインテレクチュアルな詐欺による被害者は、生徒たちである。

今日、天職で教師になっている人に出会うのはとても困難であり、そういう教師に出会えた生徒は最も幸運な者と言えるだろう。

教師という天職についてはガブリエラ・ミストラルの感動的な散文『女教師の祈り』の一節にうまく言い表されている。この中で田舎の女教師は、神聖なる者（秘密の教師）に向かって次のように言う。

「わが学舎に唯一の愛を与えたまえ。」

美の焼け跡が、ひとときもわが優しさを奪うことがありませんように。

師よ、わが熱意が冷めることのないよう、わが失望がすぐ立ち去りますように。

この不純な、いまだわれを動揺させて止まない人々の誤解を、取り去りたまえ。

傷つけられたとき、わが身より生ぜし不服の態度を取り去りたまえ。

理解されずとも苦しむことなく、教へ子たちに忘れられようと悲しむことがありませんように。」

「われをして母親たちよりも母親らしくしたまえ。」

わが血を分けた者でなくとも、母親のごとく生徒たちを愛し、守ることができまますように。生徒たちの中から、わが完璧な詩を体現する存在が生まれますように。そしてわが唇が再び歌わなくなったときのために、彼らに私の最も深いメロディーが刻みこまれますように。」

「毎日毎日、一瞬一瞬の戦いを放棄することがないように、わが人生の内にあなたの『真実の言葉』が可能であることを示したまえ。」

自らの天職意識によってこのように情愛に満ち、かつ霊的感性をもった教師が生徒に与える心理的影響というものがいかにすばらしいかを、誰も推し測ることはできないであろう。

人は次の三つの道のいずれか一つを通して天職に出会う。

一番目の道——ある特別な能力によって「自分自身で発見する」。

二番目の道——ある緊急な必要性に迫られて見えてくる。

三番目の道——非常にまれだが、両親や教師の指導によるもの。つまり教師や両親が生徒の素質をよく観察したため、その生徒の天職を発見する。

多くの人々は、人生で緊急に解決策を必要とするような状況において、あるいはまた人生の危機的な決定

的瞬间において、自らの「天職」を発見することがある。

ガンジーはごく普通の弁護士であった。しかし南アフリカにおいてインド人の人権が侵害されたとき、彼はインドへの帰国を取り止め、同国人の主張を弁護するためにその地に留まった。瞬間的な必要が、彼に全生涯を掛けさせる「天職」の道へと導いたのである。

人類への偉大なる貢献者たちは、緊急に対策をとらなくてはならないような危機的狀態に陥ったとき、自らの「天職」を見つけたのである。そのような人としてイギリスの自由の父、オリバー・クロムウェル、そして新しいメキシコの立役者ベニート・フアレス、南米独立の父ホセ・デ・サン・マルティンとシモン・ボリバルなどが思い起こされる。

イエス・キリスト、仏陀、マホメット、ヘルメス、ゾロアスター、孔子、伏羲たちは、「内なるもの」が放つ内的な呼び掛けの声を聞き、ある決定的瞬間、自らの真の「天職」を理解することができたのである。

この『根元的教育』は、生徒のもつ潜在的な能力を様々な方法で発見するためのものである。

時代遅れの教育学が現在用いているところの生徒の「天職」を発見する方法は、全く残酷で、的のはずれた、無慈悲なものである。

進路適性検査の問題集などの天職を推し測るテストは、勝手に教職を占領している商人たちによって作成されているのである。

ある国では、生徒たちは高校や専門学校に入る前に、大変恐怖に満ちた心理的苦痛を体験させられる。彼

らは数学、生物、社会などについて質問されるのである。

これらの方法で最もひどいものは、かの有名な頭の回転の速さと深く関係したIQ指数や心理テストである。

答のタイプによって評価に従い、生徒は三種類の高等学校の内の一つに瓶詰めされる。一番目は物理・数学、二番目は生物科学、三番目は社会科学である。

物理・数学からはエンジニア、建築家、天文学者、航空関係の専門家などが生まれる。生物科学からは薬剤師、看護婦、生物学者、医者などが生まれ、社会科学からは弁護士、文学者、哲学・文学博士、企業の上級管理者などが生まれる。

それぞれの国によって学習の計画は異なっており、三種類の高等学校がすべての国にあるわけではない。多くの国々ではたった一種類の高等学校しかなく、それを終わると生徒は大学へ進むのである。またある国では生徒の資質・適性は試験されないが、その代わりに生徒は生計を立てるための専門職につこうと、各専門学部へと進む。その専門職が資質と一致しなくても、また自分の「天職」とは一致しなくてもそうするのである。

生徒の資質・適性を試験する国もあれば、試験しない国もある。生徒をその「天職」に応じて指導することとも知らず、また彼らの生まれつきの資質や適性を調べようとするのは賢明なことではない。

また進路適性検査のテスト、心理テスト、IQ指数など、それら訳のわからないような質問は愚かなことである。

進路適性検査のテストは何の役にも立たない。なぜならマインドは危機状態に陥る瞬間というものがあ、もしそういう瞬間に試験が行われたならば、その結果は失敗であり、生徒に誤った方向を教えてしまうことになるからである。

生徒のマインドには海と同じように上潮期・下潮期、プラス・マイナスのリズムがある。男性ホルモンや女性ホルモンにバイオリズムが存在するように、マインドにもバイオリズムが存在する。ある時期には男性ホルモンがプラスになり、一方女性ホルモンはマイナスになり、またその反対も起こるということである。

「バイオリズム」の科学を知りたい人には、「バラ十字ノステイック」の優れた賢者であるアーノルド・クルム・ヘラー博士（メキシコ陸軍の大佐医師でベルリンの医学部の教授）の書いた有名な本『バイオリズム』を勉強することをお勧めする。

試験という緊張状態のもとでは、感情が危機的状态になったり、あるいは心理的に神経過敏な状態になったりするために、生徒が入学試験に失敗するということは充分あり得ることである。

スポーツや、歩き過ぎ、または大変厳しい肉体労働などによって運動センターを乱用すると、たとえマインドがプラスにあっても「インテレクト」の危機を招く恐れがある。そしてそれによって生徒が試験で失敗することもある。

本能センターと関連した危機（通常性的快楽や感情センターなどとも関連する）も生徒を試験に失敗させることになる。

性的危機（極端な性の抑圧、性的な悪習慣など）は、マインドに破壊的な影響を与え、生徒を試験の失敗

へと導くことになる。

『根元的教育』では、「天職」の胚芽はインテレクトチュアルセンターだけではなく、人間という有機的機械のもっている心理的・生理的な他の四つのセンターにもまた保管されていることを説いている。

直ちにインテレクトチュアルセンター、感情センター、運動センター、本能センター、性センターという五つの心理的センターを考慮に入れる必要がある。インテレクトだけが唯一、認識のためのセンターであると考えるのは間違いである。もしも特定の人物の天分を発見するためにインテレクトのセンターだけを試験するならば、それは実際に個人や社会にとって大変な害になるだけでなく、重大な不当行為を犯すことになってしまう。なぜなら天分の胚芽はインテレクトのセンターにあるだけではなく、各個人の心理的・生理的な他の四つのセンターのそれぞれにもあるからである。

生徒の真の天分を見つけるために唯一存在する道は、「真実の愛」である。

もし両親や教師たちが家庭や学校で生徒のすべての行動を細かく観察し、相互に協調、協力し合うならば、生徒それぞれがもって生まれた素質を見出すことができるであろう。

それが、生徒の天分を見出すために親や教師ができる唯一の明白な道である。

そのためには両親や教師たちに真の「愛」があることが求められる。しかしそこで教職を天職として、献身的に教壇に立っている先生たちの真の愛がなければ、前に述べたようなことは実践されないであろう。

もしも政府が本当に社会を救済したいと望むのであれば、意志というムチを使って商人を寺院から追い出

す必要がある。

至るところに『根元的教育』を広め、新しい文化の波を推し進めるべきである。

学生は勇気を出して自分の権利を守り、政府に、天職としての真の教師を要求しなければならない。幸いストライキというすばらしい武器があるが、学生はその武器をもっているではないか。

ある国の小学校から大学までの先生の中には、天職や自分の素質に一致するからというのではなく、教師という指導的立場に立っている人々が実際にいる。このような先生たちは他人を指導することはできない。なぜなら自分自身を指導することができなかったからである。

生徒を賢明に指導することができ、天職として働く本物の教師が緊急に必要である。

複数の「我」ゆえに、人間は人生劇場で自動的にいろいろな役を演じる。少年、少女は教室にいる間は一つの役を、また外の通りにいるときは他の役を、そして家にいるときはまた別の役を演じている。

もし少年や少女の天分を見出したいのであれば、学校で、家で、そして通りでさえも彼らを観察する必要がある。

この観察という仕事は、本物の教師と親が緊密に協力し合って、初めて実現されるのである。

古くさい教育学では、天分を演繹的に推定するために成績を観察するというシステムが存在する。社会に關する教科で最高の成績をとって他に抜きん出た生徒は、未来の弁護士として評価され、生物学に優れてい

る生徒は強力な医者のように決められ、そして数学に強い者は未来のエンジニアとして見なされるのである。

天分を演繹的に推定するこのばかげたシステムは、あまりにも経験に頼りすぎている。なぜなら、マインドにはすでに言ってきたように全体的形態だけではなく、ある特別な、特殊な状態においてもその高低があるからである。

おうおうにして学校では文法に最低だった者が作家となり、後に言語の真の大家として人生で成功を勝ち得ることがある。著名なエンジニアで、学校に行っていたときにはいつも数学で最低の成績だったという人も大勢いる。学生時代、生物や自然科学で赤点をとったという医者の数も少なくない。

多くの親は自分の子供の適性を調べる代わりに、彼らの中の愛すべき「エゴ」、心理的「我」の延長だけを見ようとする。これは残念なことである。

弁護士である親の多くは自分の子供が自分の後を継ぐように望み、また商売人たちは子供が自分の財産を受け継いで管理・経営してくれるように望む。彼らは子供の天職については少しも興味を示すことはないのである。

「我」はいつも上昇すること、ピラミッドの頂上に到達すること、自分の存在を認めさせることを望んでいる。そして自分の野心が失敗に終わったとき、自分自身が達成できなかったことを子供を通じて達成しようとするのである。このような野心的な親というのは、子供の「天分」とは全く関係のない職業に子供をつかせるものである。



## 21 三つの脳

新時代の革命的心理学において、間違つて人と呼ばれているインテレクチュアル・アニマルの有機的機構は三つのセンター、または三つの脳から成り立っている。

まず第一番目の脳というのは、頭蓋骨の箱の中に閉じ込められている脳のことであり、第二番目の脳は、具体的には背部にある背柱に相当するもので、それは中心部の骨髄とそこから走り出ているすべての神経から構成されている。第三番目の脳は、決まった場所や特別な臓器にあるというのではなく、いわゆる交感神経叢および人間の有機体にあるすべての特殊な神経中枢から構成されている。

一番目の脳は思考の中枢であり、二番目の脳は運動の中枢、そして三番目の脳は感情の中枢である。

思考中枢を乱用すると、インテレクチュアルエネルギーが過剰に消耗されることが実際に証明されている。まさしく精神病院は、インテレクトが死んだ人の墓場であると言うことができる。

調和とバランスが取れたスポーツは運動センターに有益であるが、スポーツをしすぎると運動エネルギーの過剰消耗を引き起こし、その結果運動センターが死んでしまうということにもなり得る。そしてそのような死は半身不随、下半身不随、進行性麻痺などの病気として現れてくるのである。

美的感性、神秘学、エクスタシー（法悦）、高等音楽などは、感情の中枢を開発するのに必要であるが、この脳を使い過ぎると感情エネルギーの無益な消耗または流失を招くことになる。「ニューウェーブ」の実存主義者たち、ロック狂信者、現代芸術の偽の官能芸術家たち、好色な病的肉欲者たちは、感情の脳を乱用しているのである。

信じがたいことであるが、死は確かに一人一人の中で、これら一つ一つの分野ごとに進行している。すべての病気のその元凶は、三つの脳のいずれかにあるということがはっきりと確認されている。

偉大なる聖なる法は、決まった資本量すなわち「生命力」をインテレクチュアル・アニマルの三つの脳の一つ一つに貯蔵した。その資本量を貯めておくことは実際、寿命を長くすることという意味し、その資本量を消耗するということは死に至ることを意味する。

何世紀もの恐ろしい夜を通して、われわれのもとに届いた古い言い伝えによると、太平洋上にあった古代ムー大陸では人類の寿命は、千二百〜千五百才くらいであったと言われている。

何世紀もの時が流れるにつれ、この三つの脳を間違つた形で使ってきたため、寿命が少しずつ短くなっている。

ファラオたちがいた古代エジプト時代のケムという太陽王国では、人の平均寿命はもはや百四十才くらいまでになっていた。

ガソリンとセルロイドに象徴される、実存主義とロックの反抗者のこの現代では、何社かの生命保険会社の報告によると、人の寿命は五十才そこそこである。

ソ連のマルクス・レーニン主義者たちは、常に虚勢をはり、たわごとを言い、寿命を延ばす非常に特殊な血清を発明したなどと触れまわりますが、あの老人のフルシチョフはまだ八十才に満たず、彼は一方の足をもち上げるために、片方の足に許しをこわねばならない。

アジアの中央に、もはや自分の若い頃を思い出せないような老人たちから成る宗教的共同体が存在しているが、彼らの平均寿命は四百才から五百才である。このアジアの僧たちが長生きする秘密は、三つの脳を賢明に使用していることにある。

三つの脳がバランスよくかつ調和的に機能すれば「生命力」を節約することになり、その当然の結果として寿命が長くなるのである。

「あらゆる源からのバイヴレーションを均等化する」という、よく知られた一つの宇宙の法が存在する。前述の僧院に住む僧たちは、三つの脳を調和的に使うことによって、その法を有効に使うことができるのである。

時代錯誤の教育学は、生徒を思考中枢の乱用にと駆り立てるが、その結果に関しては、すでに精神医学が知るところである。

三つの脳を知的に開発することができるのは、『根元的教育』を通じてである。バビロニア、ギリシア、インド、ペルシア、エジプトなどにあった古代の神秘学校では、生徒は知的に組み合わせられた戒律や、踊り、音楽などを通じて、三つの脳のために直接的で総合的な情報を受け取っていた。

古代では、劇場が学校の施設の一部を成していた。特別なパントマイムや音楽、口伝教育などと組み合わせ

された戯曲や喜劇または悲劇は、各人の三つの脳に情報を与えるのに役立っていた。

当時の学生は思考中枢を乱用することなく、自分の三つの脳を賢くかつバランスよく使うことができたのである。

ギリシアにおけるエレウシスの神秘的舞踊、バビロニアの演劇、ギリシアの彫刻などは生徒に知識を伝えるために常に用いられていた手段であった。

この騒がしいロックの退廃した現代において、生徒は混乱し道に迷い、マインドの乱用という暗闇の中を歩いているのである。

現在、三つの脳を調和的に開発するためのクリエイティブな本物のシステムは存在していない。

小学校から大学までの教師たちは、教室を出る時間が来るのを今か今かと待ちかまえている退屈きった生徒の、その不忠実な記憶に向かって話しかけているだけである。

生徒の三つの中枢に総合的、全体的な情報を流すために、インテレクトと運動と感情をうまく組み合わせることが不可欠であり、それは緊急になされなければならない。

ただ一つの中枢だけに情報を流すのは間違っている。第一番目の脳だけが唯一、認識の脳なのではない。生徒の思考中枢を乱用するのは罪を犯しているようなものである。

『根元的教育』によって、生徒を調和のとれた開発の道へと導くべきである。

革命的心理学では、三つの脳はそれぞれ全く異なった、独立したものであるということを明らかにしている。そしてこの三種の脳は本質的存在に異なった衝動を引き起こさせ、このことは実際われわれに全く共通点のない、性質や表現も異なった三つの人格を与えている。

新しい時代の革命的心理学は、一人一人に異なった三つの心理的見地が存在するということを教えている。心理的本質の一部によってわれわれはあるものを欲しがり、また別の部分では全く異なった何かを好み、そして第三の部分で全く反対の何かをする。

自分の愛する人を亡くしたときであるとか、自分の内に何か大変悲劇的なことが起こったときなど、これら最大の苦痛を味わう瞬間というのは、感情のパーソナリティは絶望にいたる一方で、インテレクトのパーソナリティは「なぜ」そういう悲劇が起きたか自問し、そして運動のパーソナリティは現状から逃げることをだけ考えるのである。

これらの三つの異なった、おうおうにして互いに矛盾する人格は、すべての学校において特別な方法とシステムを使って賢明に教育され、開発されなければならない。

心理学的観点からすると、インテレクトのパーソナリティだけを教育するのは愚かなことである。人は三つのパーソナリティをもっており、それらは『根元的教育』を今すぐ必要としている。

## 22 善と悪

「善」と「悪」は、存在しない。あることがわれわれにとって都合が良いときは善であり、都合が悪いときは悪となる。善と悪は、マインドの利己的な都合と気まぐれの問題である。

「善」と「悪」という不吉な言葉をつくり出した人は、アトランティス人のマカリ・クロンヴェルンクジオンという人物である。彼は海底に沈んだアトランティス大陸において、「アカルダン」という科学学会の著名な会員であった。

年老いた古代の賢人は、自分のつくり出した二つの言葉が人類に大変な害を及ぼすことになろうとは全く予想だにできなかった。

アトランティス時代の賢者たちは、「自然の進化の力、退化の力、中和の力」のすべてについて深く研究していたが、この年老いた賢人は、最初の二つの力を「善」と「悪」という言葉に定義しようと思いついた。「進化」タイプの力を善、「退化」タイプの力を悪と名付け、中和の力には名称を付けなかった。

これらの力は人間の内側と自然の中で作用し、中和の力は支えとバランスを取る点となるものである。

プラトンがその著作『共和国』<sup>リパブリック</sup>の中で述べているかの有名なポセイドニス島とともに、アトランティス大陸は海中に沈んだが、何世紀も過ぎ去った後に、東洋の古代文明「ティクリアミシヤナ」において、ある

僧が「善」と「悪」という言葉を乱用するという重大な過ちを犯した。善と悪を基礎として、一つのモラルをつくるためにそれらの言葉を愚かにも用いたのであった。その僧の名前はアルマナトオラと言った。

幾世紀もの時が歴史とともに過ぎ、人類はこの二つの言葉の悪習に染まり、それをあらゆるモラルの基礎とするようになったのである。今日この二つの言葉はスーブの中にさえ見つけられる。

現在「モラルの回復」を望んでいる多くの「改革者」たちがいるが、彼らやこの悲嘆にくれた世の中にとって不幸なことは、マインドが「善」と「悪」の中にすっかり瓶詰めになってしまっているということである。

すべてのモラルは「善」と「悪」という言葉を基礎にしている。それゆえ「モラルの改革者」というのは、実際は「反動者」なのである。

「善」と「悪」という言葉は、常にわれわれ自身の過ちを「正当化」するために、あるいは非難するために役立っている。

正当化したり、非難したりする人というのは、理解することができないのである。進化の力の展開を理解できるのは知性ある人であるが、その力を「善」という言葉で正当化するのは知性がない人である。退化の力のプロセスを理解するのは知性あることだが、その力を「悪」という言葉で非難するのは愚かなことである。

どんな遠心力も、求心力に変えることができる。どんな退化の力も進化の力に変換することができるのである。

「進化」状態にあるエネルギーの無限なるプロセスの中に、「退化」状態にあるエネルギーの無限なるプロセスが存在する。

人間一人一人の中に様々なエネルギーが存在し、それらが「進化」したり、「退化」したりして、絶えず変換しているのである。

あるタイプのエネルギーを正当であるとし、また別のタイプのエネルギーを不当であると非難するのは、理解ではない。重要なのは理解することである。

人が「真実」を体験することは非常にまれである。それはマインドが瓶詰めになっているからである。「善」と「悪」という相反するものの中に、人は瓶詰めになっているのである。

ノーシス運動における「心理革命」は、人間の有機体の中、および自然の中で作用している様々なタイプのエネルギーについて研究することを基礎としている。

ノーシス運動は「倫理の革命」を提唱しているが、それは反動者たちのいうモラルとも、あるいは「善」と「悪」という保守的で時代遅れの言葉とも全く関係がない。

人間の有機体という心理・生理学的実験室の中に存在する進化の力、退化の力、中和の力について、深く研究し、理解しなければならない。

「善」という言葉は正当化されるために、「進化」のエネルギーについて理解するのを妨げる。また「悪」という言葉は非難されるために、「退化」のエネルギーについての理解を妨げる。

正当化する、あるいは非難することは理解することではない。自分の欠点をなくしたい人は、それらを正当化したり、非難したりしてはならない。

われわれの過ちを「理解」するのは、緊急に必要である。

「怒り」について、マインドのあらゆるレベルで理解することは、われわれの内に冷静沈着さ、そして温和さが生まれるための基本である。

食欲の無限の言い訳を理解することは、われわれの内に博愛と利他主義が生まれるために絶対必要である。

肉欲について、マインドのすべてのレベルで理解することは、われわれの内に真の純潔さが生まれるための必要条件である。

妬みについて、マインドのあらゆる領域にわたって理解することは、われわれの内に他人の進歩や福祉のために協力し幸福を感じるという感情が生まれるために必要である。

自尊心について、そのあらゆる色合いや段階について理解することは、われわれの内に自然で素直な形で、謙虚さという異国的な花が咲くための基礎となる。

怠惰と呼ばれている無気力の要素に関して、表面上のグロテスクな形態だけではなく、より繊細な形においても理解することは、われわれの内に活動力が生まれるために必要である。

暴飲暴食に関するいろいろなパターンを理解することは、本能センターの悪癖——例えば宴会好き、酩酊狩猟、肉嗜好、死に対する恐怖、「我」を持続したいと望む欲望、消滅に対する恐怖など——を破壊するのに匹敵する。

小学校から大学までの先生たちは、自分の生徒たちに、まるで「我」がより良いものになるかのごとく、彼ら自身もより良いものとなるようにアドバイスをする。それはあたかも「我」が美德を積み重ねること、彼らも特別な美德を積み重ねるように言うのである。

「我」は決して良くなることもないし、より完全になることもないということを、そして美德を欲する者は「我」を太らせ強くしているということを、緊急に理解する必要がある。

「完全な正しさ」は、「我」を解体したとき初めてわれわれの内に生まれる。美德というものは、自分の心理的欠点をインテレクトだけではなく、マインドの潜在意識および無意識層のあらゆる領域において理解したとき、自然に素直な形でわれわれの内に生まれるのである。

良くなりたいと欲するのは愚かであり、聖人になろうと欲することは羨望であり、美德を欲することは、強欲という毒で「我」を太らせ、強くすることを意味するのである。

「我」の完全なる死が、インテレクトのレベルだけではなく、マインドのあらゆる歪曲した部分、層、領域、通路においてもなされることが必要である。われわれが本当に死んだとき、「完全」といわれる「それ」が、われわれの内に残るのである。美德でいっぱい「それ」が、われわれの内的本質のエッセンス（魂）である「それ」が、時間に属さない「それ」が残るのである。

ここで、そして今、われわれ自身の中で展開されている進化の力のあらゆる無限のプロセスを深く理解することによってのみ、また一瞬一瞬私たち自身の中でプロセスされている「退化」の力のいろいろな形状をあらゆる角度から理解することによってのみ、われわれは「我」を解体することができるのである。

「善」と「悪」という言葉は、「正当化」したり、「非難」したりするのに役立つが、決して理解することには役立たない。

欠点にはそれぞれ多くの色合い、奥行、背景、深さがある。一つの欠点をインテレクトのレベルで理解したということは、マインドの潜在意識、無意識、下層意識の異なった領域で理解したということにならない。

欠点は、そのいづれもがインテレクトのレベルにおいて姿を消しても、マインドの他の領域で存在し続けることができるのである。

「怒り」は自らを審判官の法服で変装する。多くの人々が貪欲にならないようにと欲を出す。お金に欲がない人は、精神的パワー、美德、愛、この世における幸福、または死後の幸福などを欲しがる。

多くの男性や女性は異性を前にして心を動かされ、魅了される。なぜならば美しさを愛するゆえ、自分自身の潜在意識が自分を裏切り、「肉欲」が美的センスという名でカムフラージュするからである。

多くの妬み深い者たちは、聖人を妬み、そして苦行、難行に身をゆだねる。なぜなら自分も聖人になりたからである。

多くの妬み深い者たちは、人類に献身する人々を妬み、そして自分もまた偉大な人になろうとする。そし

て自分が妬んでいる人々をあざけり、彼らに対してあらゆる中傷の限りをつくす。

地位、お金、名声、権威を自慢に思っている人もいれば、貧しいことを誇りに思っている人もいる。

樽のなかで寝ていることを誇りに思っていたディオゲネスは、ある日ソクラテスの家に着いたとき次のようにあいさつをした。「君の自尊心を踏みにじってやったぞ、ソクラテス。君の自尊心をね。」するとソクラテスは答えた。「そうだ、ディオゲネス、確かに君の自尊心で私の自尊心を踏みにじっているね。」

虚栄心の強い女性は、髪をカールさせ、他の女性の妬み心を誘うかのようにできる限りわが身を飾り立てるが、その虚栄心は謙虚さの衣をまといカムフラージュする。

ギリシアの哲学者アリスティッポスにまつわる話だが、己の知恵と謙虚さを他に示すかのように、古びてたくさん穴のあいた長衣を着て、右手に賢者の杖を握りしめ、アテネの通りを歩いていた。するとソクラテスが彼を見て、次のように叫んだ。「ああ、アリスティッポスよ、服の穴から君の虚栄心がよく見えるよ。」

多くの者は怠惰ゆえに貧しく、しかし一方では生計を立てるために働き過ぎる者がいる。また「我」を解体するために、自分自身を研究し認識することに怠惰な人々がいる。

暴飲暴食はやめたが、しかし残念ながら酔っぱらって狩りに出かける人は多い。

欠点にはそれぞれ多くの面があり、心理的な階段の一番下から一番上まで、段階的に展開され、プロセスされるのである。

ある素晴らしい散文詩の韻律の中にもまた罪が隠れている。

罪もまた、聖人の衣服を着ている。殉教者の衣を、純潔の衣を、使徒の衣などを身にまとっているのである。

「善」と「悪」は存在しない。これらの言葉は、言い訳を探したり、われわれ自身の欠点を深く詳細に探究することから逃れるのに役立つだけである。

## 23 母 性

人間の生命は一つの単細胞として始まり、そして当然ながらそれは生きている細胞の驚くべき速い成長の渦へと巻き込まれていく。

いかなる創造物においても、受胎・妊娠期間・誕生の過程は常にその生命が始まるための驚くべき、かつすばらしい三重奏である。

われわれがこの世に存在し始める最初の瞬間が、顕微鏡でしか見えなくらい非常に小さい単細胞の状態から始まる、ということとは驚くべきことである。

われわれは取るに足らない小さな細胞としてこの世に存在し始め、やがて年を取り老人になり、記憶を積み込んだ状態で人生を閉じる。

「我」は記憶である。多くの老人は、ほんの一時の間さえ現在に生きていることはない。ただ過ぎ去ったことばかりを思い出して生きているのである。老人は、ただ一つの声と影にすぎない。老人は過去の幽霊であり、蓄積された記憶であり、そしてその記憶は子孫の遺伝子へと受け継がれていく。

人の受胎は非常に速い速度で始まり、やがて生命の異なったプロセスを経て少しずつゆっくりと成長していく。

ここで時間の相対性というものについて思い出してみよう。ある夏の日の午後、わずかに数時間だけ生きる小さな虫は、われわれから見れば、まるで生きていなかったかのように見える。しかし実際は人間が生きて八十年間のそのすべてを、その数時間に生きているのである。彼らは猛スピードで生きているのである。同じように人間は、一つの惑星が数億年、数兆年生きるその全過程をその八十年間で生きているのである。

精子が卵子と出会い、妊娠が始まる。人間の生命を始める細胞は四十八個の染色体をもっている。染色体は遺伝子に分かれ、そして多くの遺伝子はまた、一つの染色体なるものを構成していく。遺伝子を研究することはとても困難である。なぜなら遺伝子は信じがたい速さで振動するわずかな分子によってできているからである。

このすばらしい遺伝子の世界は、三次元と四次元世界の間帯を構成している。

遺伝子になう原子は遺伝子の中にある。われわれの祖先から受け継いだ心理的「我」は、受胎した卵の中に入り込む。

電子技術と原子科学時代の今日において、ある先祖の吐き出した最後の一息に帯びていた電磁気的な痕跡が、その子孫の一人である受胎される卵子の遺伝子と染色体に刻み込まれる、と断言しても何ら大げさなことではない。

人生の道のりは、死の馬の蹄の跡によって描かれる。人が存命している間、異なったタイプの様々なエネルギーがその有機体を通して。そのエネルギーはそれぞれ独自の活動システムをもっており、それぞれの時期、それぞれの時間に活動する。

受胎二か月後には消化機能が活動し始め、四か月後には呼吸と筋肉の組成に密接に関係する原動力が活動し始める。

万物の生と死が織りなす科学的展開物は驚嘆すべきものである。多くの賢者たちは人間の子供の誕生と、天体空間における世界の誕生は緊密に類似していると断言している。

九か月の終わりにには子供が生まれ、十か月ですべてのすばらしい代謝機能と接続組織の調和した、完全な発達が始まる。

生まれたばかりの赤ちゃんのひよめき(前頭と後頭の骨と骨のすきまで、呼吸のたびに動く部分)が二―三才で閉じるのは、脳脊髄系統が完了したしるしである。

多くの科学者たちは、自然は想像(イマジネーション)をもち、この想像によって現在あるすべてのもの、過去にあったすべてのもの、そして将来あるであろうすべてのものに生きた形を与えている、と言っている。

少なからぬ人々は、「想像」というものをあざ笑い、想像を「家の狂人」とさえ呼ぶ人々もいる。

「想像」という言葉には多くの混乱があり、「想像」を「空想(ファンタジー)」と取り違える人々も多い。

ある賢者たちは、二種類の想像があると述べている。一つは機械的想像、もう一つは意志による想像である。前者はマインドの残りかすでできており、後者はわれわれの内にもつ最も威厳があり高貴なものと同じしている。



また観察と体験を通じてわれわれが明らかにできたことは、主観的で墮落意識的、かつまた病的で機械的な潜在想像というタイプも存在するということである。

この自動的に働く潜在想像は、インテレクトの範囲よりも下のほうで機能している。

エロティックなイメージ、病的な映画、皮肉を含む風刺的な話、ゾッとするようなジョークなどは、おうにして無意識のうちにこの機械的な潜在想像を働かせているのである。

深く分析した結果、エロティックな夢や夢精は、この機械的な潜在想像によって起こるというきわめて論理的結論を得ることができた。

絶対的純潔は、この機械的潜在想像が存在する限り不可能である。

意識の目覚めた想像とは、この主観的、墮落意識的、潜在意識的、機械的な潜在想像と呼ばれるものとは根本的に異なるものである。

どのような表象も、高揚した品位のある形で知覚されることができ、機械的、墮落意識的、潜在意識的、および無意識のタイプの潜在想像は、自動的に官能的、肉欲の色合いやイメージをつけて働き、われわれを裏切るのである。

もしもわれわれが全体的、総合的な純潔を深く望むのであれば、意識的な想像だけではなく、機械的想像や無意識的、自動的想像、また潜在意識の奥に隠れた潜在想像をも同様に警戒する必要がある。

「性」と「想像」とは密接な関係があるということを決して忘れてはならない。

深く瞑想することによって、あらゆるタイプの機械的想像やあらゆる形態の潜在的、自動的な墮落想像を、客観的な意識の目覚めた想像に変換しなければならない。

客観的想像とはそれ自体本質的に創造力を有するものである。それなしに発明家たちは電話やラジオ、飛行機などを発明することもなかったであろう。

妊娠中の女性が描く想像は、胎児の成長の基盤となるものである。母親の描く想像が胎児の心理を左右するということが立証されている。

妊娠中の女性が、美しい絵や崇高な景色を眺め、クラシック音楽や調和ある言葉を聴くことは緊急に必要である。それによって自分のおなかの中の胎児の心理に調和的に働きかけることができるであろう。

妊娠中の女性はアルコール類を飲むことも、タバコを吸うことも、醜いものや不快なものを見ることがしてはならない。なぜならこれらすべては、赤ちゃんが調和的に成長するために有害となるからである。

また人々は、妊娠中の女性の犯す気まぐれや過ちを許すことを知らねばならない。

狭量で真の理解が欠如している多くの男性は、妊娠中の女性に対し怒ったり、傷つけたりすることがある。慈愛を欠いた夫のしうちに対して感じる妻の悲しさ、苦痛は、胎児の肉体だけではなく心理にも影響を与えていくのである。

創造性豊かな想像力を考慮するならば、妊娠中の女性は、醜いもの、不快なもの、不調和の生じるもの、吐き気をもよおすようなものは、当然見るべきではない。

今こそ、政府が母性に関する重大な問題を解決するのに本腰を入れるときである。

キリスト教や民主主義を高く評価する社会において、母性のもつ宗教的意義が敬われていないということは、何という筋違いであろうか。多くの妊娠した女性が、夫から捨てられ、社会から見放され、全く庇護もなしにおなかの子供とともに生きのびようと、一かけらのパンや仕事（多くの場合かなり過酷な肉体労働）を乞うている姿を見るのは、何と嘆かわしいことであろうか。現代社会におけるこれら人間以下の状態、この残酷さ、そして政府や国民の責任の欠如といったものが、未だ民主主義が存在していないということを明白に示している。

妊婦のための部屋がある病院も、まだ問題を解決しているとは言えない。なぜならそのような病院には、出産間近な女性だけしか入れないからである。

極貧状態にある妊娠中の女性のために集合住宅、ホールと住居のある本物の公園都市が緊急に必要である。そして病院とこれらの女性たちの子供のために保育園も同様に必要である。

これら集合住宅は、かなり貧しい状態にある妊婦たちの寝起きする場所として提供されるべきである。そこにはあらゆる種類の設備が整い、花々や音楽、調和のある美しい物などによって飾られることが望ましい。それによって妊婦に関する大きな問題が完全に解決されるであろう。

人間社会は一つの大きな家族である。自分に関係のない問題というものは存在しない、ということのをわれ

われは理解する必要がある。なぜならあらゆる問題は、それぞれがいろいろな形をとって、それに関連するサークルの中に、またその社会に属するすべてのメンバーに悪影響を与えるからである。極貧状態にいる妊娠中の女性を貧しさゆえ差別するのは許されることではない。そういう女性たちを生活困窮者収容所に入れて過少評価したり、さげすみ、隅に押しやりたりするのは罪深いことである。

われわれが生きているこの社会に、継子（まま子）は存在するはずがない。われわれはみな人間であり、同じ権利をもっている者同士なのである。

もし本当に共産主義によって飲み込まれたくないのならば、われわれは真の民主主義社会をつくる必要がある。

## 24 人のパーソナリティ（人格）

一人の人間が生まれ、そして六五才で死んだ。しかし彼は一九〇〇年以前にはどこにいたのだろうか、そして一九六五年以後はどこに行ってしまったのだろうか。公式の科学は、これらについて何もわかっていない。これは生と死に関するあらゆる質問の概略的なパターンである。

明らかに次のようなことが言えよう。「人は、その人の持ち時間が終わったので死ぬのである。死人のパーソナリティには、明日という日は存在しない。」

一日は一つの時間の波であり、一か月は別の時間の波であり、一年一年もまた別の時間の波である。そしてこれらの波がすべて一体となって鎖を作り、人生という大きな波を形成していくのである。

時間は円である。「人のパーソナリティ」の人生は、一つの閉じたカーブである。

「人のパーソナリティ」の人生は、その持ち時間の中で展開し、その時間の中で生まれ、死に、決してその持ち時間を越えて存在し続けることはできない。

この時間というものは、多くの賢者たちによって熱心に研究されてきた。この時間とは、疑いの余地なく「四次元」のものである。

ユークリッドの幾何学は三次元世界においてのみ適用できる。しかし世界には七つの次元があり、その「四次元」が「時間」である。

人々のマインドは、「永遠」とは時間を延長した直線上にある、と考えている。しかしこの観念ほど間違っているものはない。なぜなら「永遠」は「五次元」だからである。

存在の一瞬一瞬は、時間の中で起こり、そして永遠に繰り返す。

生と死はお互いが触れ合う二つの端である。人が死んで生が終わり、そしてまた別の生が始まる。一つの時間が終わり、そしてまた別の時間が始まる。死は永遠なる回帰と密接に関連している。

このことは、存在という同じドラマを繰り返すために、死んだ後もまたこの世に回帰し、戻らねばならない、ということをお互いに教えてくれる。しかし、人のパーソナリティが死とともに消滅するのであれば、一体誰が、何が回帰して来るのだろうか。

ここでもう一度明らかにしなければならないのは、死後も存在し続け、そして戻って来たがるものがあるということである。それは、まさに「我」であり、その「我」がこの涙の谷に戻ってくるのである。

ここで回帰の法を、近代神智学で教えるところの肉体転生の理論、と混同してはならない。

その肉体転生の理論は、クリシュナ信仰に起源をもつものであるが、その後いろいろな人によって不幸にも手を加えられ、変形されたものになってしまった。それがヴェーダ系のヒンズー教である。

クリシュナの本来の真正な信仰では、英雄や先導者など、すでに「神聖なる個性」をもっている者だけが再び肉体を与えられると教えている。

複数の「我」は帰還し、戻っては来るが、これは肉体転生ではない。大衆、多くの人々は帰って来るが、これは肉体転生ではない。

物事や現象が帰還するという概念、永遠に繰り返すという概念は、そう古いものではなく、ピタゴラスの知恵の中に、そしてインドの古い宇宙進化論の中にも見出すことができる。

ブラフマの昼夜の永遠なる帰還、カルパス(KALPAS)の中断ない繰り返しなどは、ピタゴラスの知恵や、永遠なる回帰、永遠なる帰還の法則と非常に密接に関連している。

ゴータマ仏陀は永遠なる帰還と連続する生命の輪の教義をとて賢明に教えたが、その教義は仏陀の後継者たちによって著しく変形された。

帰還するということは、もちろん一人の新しい人間のパーソナリティの形成を意味するものであり、そのパーソナリティは幼児七才までに形成される。

家族の雰囲気や、家の外における環境、学校の生活といったものが人のパーソナリティに特徴的な、初期の色合いを与えるのである。

そして大人たちが示す事例が、幼児のパーソナリティに決定的影響を与える。

子供は大人の言う教訓よりも、その姿を見て学ぶのである。大人の間違った生き方、ばかげた言動、退廃した習慣といったものが、子供のパーソナリティに、われわれの時代の懐疑的でひねくれた独特の色合いをつけていくのである。

この現代にあつて不義・姦通は、じゃがいもやたまねぎを見るよりもさらに一般的になってしまった。当然のことながら、このことはダンテの絵に見るような修羅場を家庭の中に生じさせることになってしまった。

継母よめははや継父よめちちによってムチや棒で打たれるのを、苦痛や恨みでいっぱいになりながら、ひたすら耐えなければならぬ子供たちもこの時代にたくさんいる。そういった子供たちは、そのパーソナリティを、苦痛や恨み、憎悪という罫いの中で展開、発達させていってしまうのである。

通俗なことわざの一つに「他人の子供は頭の中から足の先までくさいにおいがする」というのがある。もちろん例外もあるが、しかし例外など片手でも十分な数であらう。

嫉妬によって起きる両親の口論、苦しみで満ちた母親の、あるいは抑圧され、打ちのめされ絶望感に打ちひしがれた父親の泣き声、嘆きといったものが、子供のパーソナリティに、生涯を通じて決して忘れ得ない、深い苦痛と憂鬱という消えることのないしるしを残すことになるのである。

優雅な家に住むプライドの高い夫人たちは、自分の雇っている女中が美容院へ行くときや、化粧をするとき、意地悪な扱いをする。それは自分のプライドをひどく傷つけられたと感じるからである。

これらの醜いシーンの数々を見ることになる子供は、傲慢で自尊心の強い母親の側につくか、あるいは虚栄心の強い、さげすまれて不幸な女中の側につくか、どちらにしても最も奥深いところで傷つき、おうおう

にしてその結果は「子供のパーソナリティ」に破局的な影響を与えることになるのである。

テレビが普及されるようになってから、家族の結びつきは失われてしまった。以前は、夫が仕事から帰ってくると妻は大変喜んで出迎えた。しかし今は、妻はテレビを見ていて忙しいので玄関に夫を出迎えることはしなくなった。

今日では父親や母親、息子や娘たちはみなテレビの画面を前にして意識のないロボットのようである。もはや夫はその日に起きた問題や仕事などについて、一切妻と話すことができなくなっている。なぜならその妻は、昨日の映画やアル・カポネ演ずる身の毛もよだつような恐ろしい場面、ニューウェーブの踊りなどを見ていて、夢遊病者のようになっていっているからである。

この新しいタイプの超現代的家庭で育った子供たちは、テレビの画面で見た犯罪の恐ろしい場面をまねしたり、それに成り切ったり、大砲やピストル、おもちゃの機関銃のことばかりを考えるようになる。

テレビというすばらしい発明が破壊的な目的に使われているのは残念である。もし、人類がテレビを自然科学を勉強するために、また「母なる自然」の荘厳なる真の芸術を教えるために、そして崇高な教えを人々に与えるために品位をもって利用するのであれば、そのときこの発明は人類にとって祝福されるものとなるであろう。そして人類のパーソナリティを開発するために、知性豊かに利用されることができであろう。

子供のパーソナリティに、リズムやハーモニーの狂った音楽、低俗な音楽で栄養を与えようとするのは、全くもってひどいことである。また強盗と警官の話や、悪癖や売春の場面、不義姦通のドラマ、ポルノなどの話で子供のパーソナリティに栄養を与えようとするのはばかげている。

そのような結果として理由なき反抗者、そして未成年者による殺人などがあるのは、われわれの充分知るところである。

母親が自分の子供をぶったり、棒で叩いたり、取り乱した残酷な言葉でののしったりするのは、嘆かわしいことである。このような言動は、子供に恨みや憎悪、愛の喪失といったものを起こさせる。

棒やムチ、大声、怒鳴り声の中で育った子供たちは、敬意や崇拜という感覚が欠如し、粗野で不法な言動をする者になる、ということを実際われわれは目にしてきた。

家庭内において真にバランスをとるということの必要性を、ただちに理解しなければならない。

優しさと厳しきは、正義の天秤の両方の皿の上で、相互にバランスをとらなければならない。

「父親」は「厳しさ」を、そして「母親」は「優しさ」を表す。「父親」は「知恵」を、そして「母親」は「愛」を象徴する。

「知恵」と「愛」、「厳しさ」と「優しさ」は相互に宇宙の天秤の両方の皿の上でバランスをとっている。

父親と母親は家庭の幸福のために、相互にバランスをとらなくてはならない。

今すぐ、すべての父親・母親は、「魂」の「永遠なる価値」という種を子供のマインドにまく必要がある。

現代の子供たちがもはや「尊敬する」という感覚をもちあわせていないのは嘆かわしいことである。これ

は、カウボーイ物語や強盗・警察官のお話に原因がある。テレビや映画などによって子供のマインドが毒されてしまったからである。

ノース運動の中で出された『心理革命』という本の中で、エゴとエッセンス（魂）の深い違いが明白にわかりやすく述べられている。

三才から四才の頃、エッセンス（魂）のもつ美しさそのものが子供を通して現れる。その年頃の子供は、すべての心理的な面において柔らかく、優しく、そして美しい。

しかしエゴが子供の柔らかいパーソナリティをコントロールし始めるとき、そのエッセンスのもつすべての美しさが消え始め、代わって人類特有の心理的欠点が生え始めるのである。

エゴとエッセンスを区別するとともに、パーソナリティとエッセンスも区別する必要がある。

人間はエッセンスをもって生まれるが、パーソナリティはもって生まれない。後者はつくる必要があるのである。

パーソナリティとエッセンスは調和的にバランスをとって開発する必要がある。

パーソナリティがエッセンスを犠牲にして開発されるとき、その結果「インテリ」になるのをわれわれは実際に見てきた。

長年の観察や体験を通じて言えることは、エッセンスの開発だけを行った場合（パーソナリティと調和的

に開発することに全く留意せず行った場合）、その結果は理性のない、パーソナリティの欠如した、気高い心はもっているが全く適応性のない、無能力な信心深い人物ができあがるということである。

パーソナリティとエッセンスが調和的に開発されているならば、男性であれ、女性であれ、光輝く存在となるであろう。

エッセンスの中にわれわれがもっているものは、すべて自分のものであり、パーソナリティの中にもっているのは、すべて借りものである。

エッセンスの中にわれわれの先天的な特徴・性格があり、パーソナリティの中にまわりの大人たちのお手本となる言動、家や学校、外で学んだことが入っている。

子供が、そのエッセンスの栄養とパーソナリティの栄養の両方を受け取ることができるよう急がれるべきである。

エッセンスは優しさ、無限なる慈悲、愛、音楽、花、美、調和などを栄養とする。

パーソナリティは大人の示す良い手本、学校での賢明な教育を栄養とすべきである。

子供は幼稚園の後、七才で小学校に入学する必要がある。

子供は学校で最初の文字を遊びながら学ぶべきであり、そうすることにより勉強は彼らにとって魅力的で、すばらしく、幸せなものとなるであろう。

この『根元的教育』では、まさに幼稚園に入ったときから「パーソナリティ」の三つの面（思考・感情・行動）のそれぞれに注意し、子供のパーソナリティを調和的に、そしてバランスとれた形で発達させていく必要性を説いている。

子供の「パーソナリティ」の創造と発達、親と教師に重大な責任がかかっている。

「パーソナリティ」の質はひとえに、いかなる心理的材料によって創造され、栄養として与えられたかによる。

心理学を勉強している学生の間では「パーソナリティ」、「エッセンス」、「エゴ（我）」について多くの混乱がある。

ある学生は「パーソナリティ」を「エッセンス」と取り換え、また他の学生は「エゴ」を「エッセンス」と混同したりする。

「人格をもたない人生」を研究の目標とするまやかしの秘教学校、神秘学学校が数多くある。

しかしここで明らかにしておかなければならないことは、われわれが解体すべきものは「パーソナリティ」ではないということである。

われわれが崩壊しなければならないのは「エゴ」、あるいは「我」と呼ばれるものであり、これこそが宇宙のチリと化す必要のあるものだということを緊急に理解しなければならない。

「パーソナリティ」は単なる行動の乗り物であり、創造し、製造する必要のあった一つの乗り物にすぎない。

世界にはカリギュラ風の人、アッチラ王風の人、ヒットラー風の人などがいるが、たとえ邪悪なパーソナリティをもっていたとしても、「エゴ」あるいは「我」を完全に解体したとき、そのパーソナリティは根本的に変換できるのである。

この「エゴ」あるいは「我」の解体ということは、多くの偽秘教家たちを混乱、困惑させてきた。というのは彼らは「エゴ」は神聖なものであり、「エゴ」あるいは「我」こそが、己自身の「本質」であり、「神聖なモノド（それ以上分解できないもの）」であるなどと信じているからである。

「エゴ」あるいは「我」と呼ばれるものに、神聖なものは何一つないということを緊急に理解する必要がある。今、直ちにそうしなければならぬ。

エゴ（我）は聖書の中で言うところのサタンであり、それは積上げられた記憶、欲望、情欲、憎悪、恨み、あるいは強欲、不義姦通、家族や人種、国民性から受け継いだものなどである。

おもしろいことに多くの人々は、われわれの中に「優我」あるいは「神聖我」と、「劣我」が存在すると言

う。「優」も「劣」も常に一つの物事がもつ二つの面であるに他ならない。「優我」、「劣我」はそれぞれ同じエゴがもつ二つの面なのである。

「神聖な本質」「モノイド」「内的な自身」は「エゴ」とは全く関係がない。「本質」は「本質」であり、ただそれだけのことである。「本質的存在」のその存在理由は「本質的存在」なのである。

「パーソナリティ」それ自身は、単なる一つの乗り物にすぎず、それ以上のものではない。「パーソナリティ」を通して、「エゴ」または「存在の本質」が表現される。そしてどちらが現れるかはわれわれ自身の選択によるのである。

「パーソナリティ」を通じて、われわれの「真の本質」である心理的エッセンスだけが現れるように、「エゴ（我）」を根絶することは急務である。

教育者は、パーソナリティの三つの面の調和的な開発の必要性を完璧に理解する必要がある。

「パーソナリティ」と「エッセンス」の完璧なバランス、思考と感情そして行動の調和的な発達、倫理の革命といったものが『根元的教育』の基礎となるのである。

## 25 十代の少年・少女

今こそ、性の問題に関する偽りの貞操や偏見を徹底的に捨て去るときである。

少年少女の性の問題を明確に理解する必要がある。

十四才になると、抑えがたい性のエネルギーが、交感神経系を通して十代の若い有機体にほとばしる。

この特別なタイプのエネルギーは、男性の声がわりや、女性の子宮の働きを促し、人間の有機体を変換していく。

人間の有機体は、粗雑な要素を生命力のある、洗練された成分に変換していく真の工場である。

われわれが胃に入れた食物は、多くの変換と洗練を経たのち、最終的にパラケルススがエンス・セミニス（精子の実体）と呼んだ半固体で半液体の成分になる。

柔軟性、展延性がある液体状のガラスのような、この精子の内に潜在的な形で生命すべての胚芽が含まれていのである。

ノーシスの教えは、精子の中に、生命が強烈に沸き出る源、カオス（混沌）を認める。



パラケルスス、センデイボギウス、ニコラス・フラメル、ライムンド・ルリオなどの中世の錬金術師たちは、この「エンス・セミニス」または秘密の哲学の水銀を、深い敬意を払って研究した。

この「硫酸塩」は、精囊せいのうの中で自然が知性をもって生成した真のエリキサせいりきさである。

いにしへの知恵であるこの水銀、この精液の中に、存在のあらゆる可能性が事実秘められているのである。不幸なことに、心理的な正しい指導を受けていない多くの若者たちは、マスターベーションという悪癖にふけったり、同性愛という退廃した性の道を歩いて、正道から外れてしまう。

子供や若者に、インテレクチュアルな情報が多種多様に与えられる。例えば、運動をするよう勧められるが、運動のし過ぎはあわれにも命を縮めることになる。しかし性エネルギーが表出する思春期が始まる時、不幸にも両親や教師たちは間違った厳格主義とばかげたモラルにしばられ、性に関して罪深く黙り込んでしまふのである。

罪深い沈黙があり、忌まわしい言葉がある。性の問題に関して沈黙するということは罪でありまた性の問題について誤ったことを言うのもまた罪である。

もし両親や教師たちが黙って何も言わず、性的に退廃した者たちが代わって話をするのであれば、経験のない青少年たちはその犠牲者となるであろう。

もし少年が両親や教師に相談することができなければ、彼はすでに間違った道を歩んでいるクラスメイトに相談をするだろう。その結果を見るにはさほど時間はかからない。その少年は、間違った助言に従ってマ

スターベーションという悪癖にふけるか、もしくは同性愛という間違った道を歩むことになるであろう。

マスターベーションは脳の潜在力を完全に破壊してしまうことになる。精液と脳の間には密接な関係があるということを知る必要がある。そして精液を知的化し、脳を種子化（発達の可能性をもつこと）しなければならない。

性エネルギーを質的に変換、昇華し、脳の潜在力に変えることによって、脳は種子化されるのである。

このようにして精液は知的になり、脳は種子化される。

ノーシス・サイエンスは、内分泌学を深く研究し、性エネルギーを変換するための方法やシステムを教えるが、それはこの本で今取り扱う範囲ではない。

もし読者がノーシスについて情報を得たいのであれば、ノーシス関連の本を学び、そしてその研究に参加することをお勧めする。

青少年たちは美的感性を開発し、音楽や彫刻、絵画を学んだり、また高い山へ登ったりなどして、性エネルギーを崇高なものにしなければならない。

何と多くの美しくいられたであろうはずの顔が、しおれてしまったことか！ 何と多くの脳が、退廃してしまっているのだろうか！ それらすべては、適切なときに警報の叫びが届かなかったゆえにである。

マスターベーションという悪癖は、男女を問わず、青少年の間で、手を洗うよりもっと一般的なことと

なってしまった。

収容所は、マスターベーションというむかつくような悪癖で自らの脳細胞を破壊した男女でいっぱいである。マスターベーションをする者の行く先は精神病の収容所である。

同性愛という悪習は、その常習者たちを骨の髄まで衰弱、退廃させている。

洗練され、文明大国と自負しているイギリスのような国々で、同性愛の映画が野放しに上映される映画館があるなどとは信じ難いことである。

さらにイギリスで同性愛者同士の結婚を公的に認めようという努力がなされているとは、嘆かわしいことである。

世界の大都市では、同性愛専用のクラブや売春宿まである。

今日、女性の敵である恐ろしい結社が、その驚くべき退廃した兄弟愛によって結集した組織をつくっている。

多くの読者は、「退廃した兄弟愛」という言葉に大変驚くかもしれないが、いつの時代にも、常に罪深き兄弟愛が種々存在したということを忘れるべきではない。

女性の敵であるこの病的な結社は、疑いの余地なく罪深き兄弟愛である。

この女性の敵たちは、いつも、あるいはほとんどいつも官僚社会の中で重要な地位を占めている。

ある同性愛者が刑務所へ送られたとしても、すぐに放免される。なぜなら罪深き結社に属する者が重要な地位を占めていたために、しかるべき影響力が行使されたからである。

ある柔弱な同性愛者が不幸に陥ったとき、すぐに罪深き結社の邪悪な人物から経済的援助が与えられる。

同性愛者同士は、ユニフォームを着かざし、お互いを認識し合う。同性愛者がユニフォームを着るとするのは驚くべきことだが、事実そうなのである。同性愛者のユニフォームはこれから流行しようとするファッションと一致する。同性愛者がすべての新しいファッションを起こすのである。あるファッションが一般的になると彼らはまた別の流行をつくり出す。このようにして、罪深き結社のユニフォームは、常に新しいのである。

今日、世界のあらゆる大都市には、おびただしい数の同性愛者が存在する。

同性愛という悪習は、思春期にその恥すべき行進が始まるのである。

青少年の通う多くの学校が、事実同性愛の売春宿となってしまうている。

多くの少女たちは、男の敵である恐るべき道を大胆にも進んでいくのである。

おびただしい数の少女たちが同性愛者である。女性の同性愛者たちの罪深き結社は、男性同性愛者たちの罪深き結社と同じくらい強力である。

間違った貞操概念を根本的にはっきりと打ち直し、そして性の神秘についてのすべてを隠すことなくオーブンに少年少女に教える示すことを、直ちに行わなければならない。そのようにしてのみ、新しい世代が再生の道を歩むことができるのである。

\*エリキサ 非金属を金に代えるといわれた錬金薬剤、賢者の石。

\*ノース関連の本 『ノース心理革命』(サマエル・アウン・ベオール著、新泉社発行) 『完全なる結婚』(サマエル・アウン・ベオール著、ノース書院) 『性エネルギー活用秘法』(ミゲル・ネリ、佐伯マオ共著、学研) 『アストラル・トリップ』(ミゲル・ネリ著、徳間書店)

## 26 青年期

青年期は、各七年間からなる二つの期間に分かれる。最初の期間は二十一才に始まり、二十八才で終わる。次は二十八才に始まり、三十五才で終わる。

青年期の基礎は、家庭、学校、そして社交の場でつくられる。

『根元的教育』の礎石の上に立った青年期は、まさに建設的であり、本質的に品位あるものである。

誤った礎石の上に立った青年期というのは、その当然の結果として誤った道を行くことになる。

大多数の人々は、人生の前半を、残りの人生を惨めに過ごすことになるように費やしてしまう。若者はおうおうにして、「偽りの男らしさ」という間違った概念ゆえに、売春婦の手に落ちてしまうのである。

青春期の不節制は、三十年間の非常に高い利息のついた老年期支払いの約束手形となるのである。

『根元的教育』を欠いた青年期は、絶え間ない陶酔の中にいる状態である。それは過ちの熱病であり、アルコールや動物的情欲の熱病を患っている状態である。

人が人生で成すであろうすべてのことは、最初の三十年間の人生で潜在的に現れている。

今も昔もわれわれが知っている人類の偉大な行動の大部分は、三十才前に開始された。

三十才に到達した者は、多くの友や同僚が次々と倒れていった大きな戦から、逃れ出てきたかのように感じられるときがある。

三十才になると、男女ともはや活発さ、熱心さを全く失ってしまい、そしてもし最初の試みが失敗すれば、たいそう悲観的になり次の勝負をあきらめてしまう。

壮年期における幻想とは、青年期の幻想を引き継いだものである。『根元的教育』を欠いてしまうと、老年期に話題に上るものは、おうおうにして絶望である。

青年期はいつしか消えていくはかないものである。美は青年期の輝きではあるが、それは幻であり、一時的なものである。

青年期には才能が生き生きと輝くが、しかし判断力は弱い。判断力があり、かつ才能が輝いている若者というのは実にまれである。

『根元的教育』を欠いた若者は、情欲的で酒に溺れ、インテリで皮肉屋であったり、強欲で色欲が強く、大食家であったり、妬み、嫉妬、喧嘩早さ、盗み癖があったり、また自尊心が強く、怠惰であったりする。

若さとは、すぐに姿を隠す夏の太陽である。若者は若さのもつ生き生きとした力を無駄使いするのを楽しんでいる。

老人は、若者を利己的に利用するという過ちを犯し、彼らを戦争に送り込む。

もし若者が『根元的教育』の道を進むのであれば、自分自身を変換し、そして世界を変えることができるであろう。

青年期は幻想でいっぱいであり、それはわれわれを失望へと導くだけである。

「我（エゴ）」は、若さがもつ火を、自らをたくましく強化するために利用する。

「我」は、年老いたときの全く悲惨な状態を思いやることもせず、どんな犠牲を払ってでも情欲を満足させようとするのである。

若者はただ性エネルギーを消耗すること、そして酒やあらゆる類の快樂に身をまかせることに興味があるだけである。

快樂の奴隷になるのは娼婦の特性であり、本当の人間の姿ではないということを若者は気づきしめない。

どんな快樂も思う存分続くということはない。快樂への渴望はとりもなおさず、「インテレクチュアル・アニマル」を最も卑劣な状態におとし入れる病氣なのである。

スペイン語圏における偉大な詩人ホルヘ・マンリケ曰く、

「何とすみやかに快樂は消え去るものであろうか、  
そしてあとに残る想いは、心を痛めるのみ。」

なぜなら過ぎ去りし時は、いつも甘くわが胸によみがえるものなれば」

アリストテレスは快樂について次のように言っている。「快樂を判定するにあたって、われわれ人間は公正な裁判官とはなり得ない。」

「インテレクチュアル・アニマル」は快樂を正当化して享受する。フリードリッヒ大王は次のように強調して断言することをはばからなかった。「快樂は、この人生において最もリアルな善である。」

最も堪えがたい苦痛とは、最も激しく快樂が長く続いたあとにできた産物なのである。

遊び好きな若者は雑草のごとく数が多い。そして遊び好きの「我」は常に快樂を正当化する。

長期に渡って道樂をし続ける者は、結婚するのを嫌うか、またはそれを先へ先へと延ばそうとする。この地上にあるあらゆる快樂を得たいがため、結婚しないでいるということは誠に困ったものである。

青年期の活力を使い果たした後、やっと結婚するなどということはばかげている。そのような愚かなことの被害者は、彼らから生まれた子供たちである。

多くの男たちは疲れたので結婚をし、多くの女たちは好奇心ゆえに結婚をする。そうした見当違いの行為の行きつくところは、常に失望である。

賢明な男性は自らが選んだ女性を、真実心の底から愛する。

もし現実にもじめな老後を迎えたくないのであれば、青年期に結婚すべきである。

人生のすべてのことには、その時期がある。若者が結婚するのは普通であるが、老人の結婚は時機はずれの感がある。

若者は結婚し、そして家庭を築いていくということを知らねばならない。そのとき忘れてはならないこと、それは家庭は嫉妬という怪物によって崩壊されてしまうということである。

ソロモン曰く、「嫉妬というものは墓穴のごとく残酷なものである。その嫉妬がおこす真つ赤な火は、実際にめらめらと燃える炎のごときである。」

「インテレクチュアル・アニマル」という人種は犬のように嫉妬深い。嫉妬は一〇〇%動物的である。

女性を監視しようとする男性は、誰と自分が交際しているのかわからないでいる。どういうタイプの女性であるかを知るために、彼女を監視するようなことはしないほうが良い。

嫉妬深い女性があげる毒をふくんだ叫び声は、狂犬病の犬の歯より殺人的である。

嫉妬を抱くのは愛があるゆえ、と言われるがそれは偽りである。嫉妬は決して愛からは生まれえない。愛と嫉妬は同時に存在することができないものであり、嫉妬は恐怖に起因するものである。

「我」は様々な理由をつけて嫉妬を正当化する。「我」は自分の愛する者を失うのを恐れるのである。

「我」を心から本当に解体したいと願う者は、いつでも自分の一番愛するものを喜んで手放せる心の準備をしておかねばならない。

われわれが長い間、実際見てきた中で明らかに言えることは、道楽のために年頃過ぎてもなお独身の男性というのは、嫉妬深い夫になるということである。

人は凄まじいばかりに性エネルギーを消耗してきた。

男性と女性は、恐怖心や嫉妬からでなく、お互いの自由意志で、そして愛によって結ばれているべきである。

「偉大なる法」を前にして、男は自分の行為に責任をもち、女も自分の行為に責任をもつべきである。夫は妻の行為に責任をもつことはできず、妻も夫の行為に責任をもつことはできないのである。

お互い自分自身の行為に責任をもち、そして嫉妬を消滅させなさい。

青年期の根本的な問題は結婚である。

何人かの恋人をもち、娼<sup>かん</sup>を売る若い女性は、結局結婚できないでいる。なぜならその恋人たちは彼女に幻滅していったからである。

もし若い女性たちが本当に結婚を望むのであれば、自分の恋人と交際を保つことを知る必要がある。

愛を情欲とを混同してはならない。恋をしている男女というのは、愛と情欲とを見分けることを知らない。

情欲はマインドと心（ハート）をだます毒である、ということを知り直ちに知る必要がある。

情欲にかられた男女は、本当に恋をしている、と血の涙を流して誓うことさえできるであろう。

しかし動物的情欲が満たされた後、トラップでつくった城は夢のごとく崩れ落ちるのである。

多くの夫婦が結婚に破綻をきたす原因は、愛ゆえではなく、動物的情欲ゆえに結婚したからである。

青年期に歩む最も重大なステップは結婚であり、学生の間、若者はこの重要なステップのために準備されるべきである。

多くの若者たちが経済的打算のため、または単に世間体をつくらうために結婚しているのは嘆かわしいことである。

動物的情欲のため、世間体のため、または経済的打算のためにした結婚というのは、失敗に終わる。

多くの夫婦が、性格の不一致ゆえに結婚に失敗する。

嫉妬深く、怒りっぽい、強暴な若者と結婚する女性は、その非情な男の犠牲者になることだろう。

嫉妬深く、強暴な、怒りっぽい女性と結婚する若者は、明らかに人生を地獄の中で過ごすことになるであ

ろう。

二人の間に真の愛が通い合うためには、第一に動物的情欲の存在を許してはならない。そして嫉妬という「我」を解体し、怒りを崩壊し、あらゆることに対して無私無欲になることができたとき、その礎ができあがるのである。

「我」は家庭を崩壊し、調和を乱す。もしも若者たちがこの『根元的教育』を勉強し、そして「我」を解体しようと望むならば、必ずや「完全なる結婚」の道を見出すことができるであろう。

「我（エゴ）」を分解してのみ、初めて家庭に本物の幸福が存在するのである。

幸福な結婚生活を送りたいと望む若者たちに、この『根元的教育』を深く勉強し、「我」を解体するよう勧める。

驚くほど嚴重に自分の娘を監視し、恋人をつくるのを好まない親たちが多くいる。そのようなことは一〇〇%ばかげたことである。なぜなら娘たちは恋人をつくり、そして結婚する必要があるからである。

そのような理解のなさの結果、隠れて恋人をつくったり、誘惑の手を伸ばすプレイボーイの餌食となってしまう危険に常にさらされるのである。

若い女性には恋人をつくる自由をもつべきである。しかしまだ「我」を解体してないゆえに、恋人と二人だけにはしないほうが望ましい。

若者たちは家でパーティなどをする自由が与えられるべきである。健康な娯楽は誰にも害を及ぼしたりはしないし、それは若者たちにとって必要なものである。

若者に害を及ぼすのは、酒、タバコ、性エネルギーの消耗、らんちき騒ぎ、乱行、酒場、キャバレーなどである。

家族パーティー、健康的なダンス、心地良い音楽、大自然の中へ出掛けることなどは、誰にも害を及ぼしたりはしない。

マインドは愛を痛めつける。多くの若者たちは、経済的な恐れや、過去への囚われ、そして未来への心配ゆえに、すばらしい女性と結婚する機会を失ってしまう。

人生に対する恐れ、飢えや貧困に対する恐れ、そしてマインドのつくり出す虚栄の計画といったものが、結婚を延期する根本的な原因となるのである。

多くの若者は、ある金額を貯めるまで、あるいは自分の家や最新式の車を手に入れるまで、あるいはその他多くのばかげた品々を手にするまで結婚はしないと決意する。まるでそのような品々が幸福そのものであるかのごとく錯覚しているのである。

そのような男性が人生に対する恐怖心ゆえ、死への恐怖心ゆえ、あるいは人のうわさを気にする余りに、すばらしい結婚のチャンスを逃してしまうのは残念である。

そのような男性たちは一生独身のままで過ごすか、あるいは結婚したとしても遅すぎるために、もはや家

庭を築き、子供を教育するための充分な時間がなくなってしまうのである。

妻子を養うために男性が必要とするものは、専門職、またはまじめに一つの職についているということである。ただそれだけのことである。

また多くの若い女性が夫を選び好みたために、独身のままでいることになる。計算高く、欲深い自己本位の女性は、年頃過ぎててもなお独身のままでいるか、または結婚しても完全に失敗してしまう。若い女性は、男性は欲深い、計算高い、エゴイステイックな女性には幻滅するということを理解する必要がある。

夫を得るために派手な化粧をしたり、眉を抜いたり、髪をカールさせ、かつらやつけまつげを着けたりする若い女性たちがいる。しかし彼女たちは男性の心理を理解してはいない。

男は本性として化粧の濃い人形を嫌い、全くの自然な美しさや純真な微笑を賞賛する。

男は女性の中に誠実さ、気どらなさ、無私無欲の真実の愛、自然な純真さを求めるのである。

結婚を望む女性は、男性の心理を深く理解する必要がある。

「愛」は知恵の極致である。愛は、愛を栄養とする。永遠なる青年期の燃える火、それは愛である。

## 27 壮年期

壮年期は三十五才に始まり、五十六才で終わる。

壮年の男性は自分の家庭を治め、息子や娘を導くことができなければならない。

普通の人生においては、壮年の男性は家族の長となっているが、青年期および壮年期に家庭を築き財産をつくらなかった者は、もはやそれらを築くこともできなく、事実彼は失敗者である。

老年期に家庭や財産を築こうとする者は、実際哀れである。

強欲の「我」が極端に働くと、多くの財産を蓄えることを欲する。人は食物、衣服、そして寝るところを必要とする。パンや家、肉体をおおうための衣類は必要であるが、生きるために巨額の金を貯め込む必要はないのである。

巨万の富、または貧困、われわれはこのどちらも擁護しない。それらはどちらも両極端であり、避けるべきものだからである。

多くの者が貧困という泥の中でもがいている一方、多くの者が巨万の富の中で転げまわっている。



つつましい財産、すなわち心地よい庭のある家、確実な収入源、あるいはいつも小ぎれいに身なりを整えておくこと、飢えないこと、こういったことは必要である。これらはあらゆる人間にとって、普通のことなのである。

貧困、飢え、病氣、無知といったものは、文化水準が高く、文明が進んだ国と自負している国においては、決して存在すべきではない。

いまだに民主主義は存在していない。それをわれわれで創造する必要がある。衣食住が欠けている国民が一人でもいる間は、民主主義というのは事実美しい理想にすぎないのである。

家族の長は理解力があり、知的であらねばならない。決して大酒飲み、大食家、酔っぱらい、暴君などであつてはならない。

壮年期の男性は、その経験から、子供というのは自分の行いをまねし、もし自分の行いが誤っていれば、子孫に愚かな道を歩ませることになるということを知っている。

壮年の男性が何人もの女性をつくり、いつも酒ばかり飲んで泥酔したり、やたらに宴会に出掛けたり、らんちき騒ぎをしたりするということは、誠に愚かなことである。

壮年の男性の肩には、家族全員に対する責任が重くのしかかっている。そしてもし彼が誤った道を進むのであれば、この世により一層の無秩序をもたらし、混乱や不快な状況をつくり出すことになるのである。

父親や母親は子供たちの性的な相違を理解しなければならない。娘が物理、化学、代数などといったもの

を勉強するのは理に合わないことである。女性の脳は男性の脳とは異なっており、今述べたような数学は男性にはとても適するものであるが、女性のマインドには無益であり、むしろ有害でさえある。

子をもつ親たちは、学校における勉強のすべてのカリキュラムが、子供たちにとって活力のあるものになるように心から努力する必要がある。

女性は読み書き、ピアノを弾くこと、編み物や刺しゅうをすることなど、あらゆるタイプの女性的な仕事ができるように学ぶべきである。

そして女性は教室の椅子に座っているときから、母親として、そして妻としての崇高な使命を果たすために準備されるべきなのである。

男性にとって適切であるような複雑で難解な教科で、女性の脳を痛めつけるということは、おかしいことである。

親やあらゆる学校の先生たちは、女性に特有の、ふさわしい女らしさを引き出すように、もっと気を配る必要がある。まるで男のように、女性を軍隊化し、町の通りを旗や太鼓をもって行進するようにさせるのは愚かなことである。

女性は十分に女らしく、男性は十分に男らしくあるべきである。

中性、同性愛者というのは、退廃と野蛮性の産物である。

長い間難解な勉強にたずさわっている女性は、老けてしまい、結婚する相手がなくなってしまふ。

現代においては、女性は短期間の専門的な勉強や、美の開発、タイプ、速記、裁縫、教育などを学ぶことが適切である。

普通、女性は家庭のためだけに働くべきである。しかし、現代われわれの生きる時代の残酷さゆえ、女性は外に出て、生きるために働かなくてはならなくなっている。

真に文化水準が高く、文明の進んだ社会においては、女性は生きるために家の外で働くという必要はないはずである。

女性が家の外で働くということ、これは最も残酷なものうちの一つである。

退廃した現在の男性たちが、偽りの秩序をつくり出し、女性からその女らしさを消させてしまったのである。女性を家から連れ出し、あくせくと働かせてしまったのである。

男の頭をもち、男のようになった女性は、タバコをふかし、新聞を読み、ひざ上のスカートをはき、肌をさらし、カード遊びをしたりする。このような女性は、現代の男性が退廃した結果の現れであり、一つの文明が終わりに近づいていることを表す社会的な汚点である。

現代的スパイになった女性、麻薬中毒者の女医、スポーツの女性チャンピオン、アルコール中毒者、自分の美しさを失うのがいやで子供に自分の乳を与えないようなゆがんだ心の女性、このような女性たちは、文明が偽りであることを示す忌まわしい一つの兆候である。

この偽りの秩序に対して真に戦いを挑む準備のできた、かつ健全な意志をもった男女が、今、ともに手を取り合って世界を立て直すときがやって来たのである。

世界に新しい文明、新しい文化を打ち建てる 때가来たのである。

女性は家庭の礎である。それゆえにその礎の石がどこで変形したひどい姿のものであるならば、その社会生活は大惨事ともなった結末を向かえることになるであろう。

男性は異なった特質をもっており、それゆえ医学、物理、化学、数学、法律、工学、そして天文学などの勉強に満足できるのである。

男性の軍隊化した学校はおかしくはないが、女性の軍隊化した学校というのはばかげているだけではなく、とてもこっけいである。

未来の妻たる女性、子供をその胸に抱くはずの未来の母たる女性が、男性のように町の大通りを行進しているのを見るのは、何かとても気味の悪いものである。

このようなことは、単に女性が女らしさをなくしてしまったことを示すだけではなく、男性においてもその男らしさを失ったことを示しているのである。

男性、本当の男、男らしい男であれば、女性が軍隊のように列をつくって行進するのを決して受け入れることはできないであろう。男性がもつ綿密さ、心理的特質、男らしい思考が備わっているならば、人類の退廃ぶりを堪能するまで見せつける、このような見せ物に吐き気を感じずにはいられないだろう。

女性は自分の家庭へ戻り、女らしさ、自然の美しさ、本来の無垢さ、真のシンプルさといったものを取り戻す必要がある。現在の物事の秩序をすべてストップさせ、この地上に一つの新しい文明、文化を打ち建てる必要があるのである。

親や教育者たちは、真の知恵と愛をもって、新しい世代を育てることを知らねばならない。

また息子たちは、ただ単にインテリクチュアルな情報を受け取ったり、仕事をしたり、専門職の資格を得たりするだけではいけない。責任をもつということを知り、正しく、そして意識の目覚めた愛の道を歩む必要があるのである。

壮年期の男性の肩には、妻や息子、娘に対する責任がのしかかっている。

貞潔で、控えめな、温和で、高德な、責任感の強い壮年の男性は、その家族から、そしてあらゆる人々から尊敬される存在である。

浮気をしたり、性エネルギーを消耗し、不快なことやあらゆる類の不正をし、人々に衝撃を与えるような壮年の男性は、みなに嫌われる存在となる。そして自分自身に苦痛をもたらすばかりでなく、自分の家族をも苦しめ、まわりの人々すべてに苦痛と混乱をもたらすことになるのである。

壮年期にいる男性は、自分の現在の時間を正しく生きることを知る必要がある。青年期はもはや過ぎ去った、ということを経験する男性が理解することは急務である。

青年期と同じドラマや場面を壮年になってからも繰り返し経験したい、と望む者は愚かである。

人生のそれぞれの時期には、その時期特有の美しさがあり、人はその美しさを生きることを知らなくてはならない。

壮年期の男性は老年期がやって来る前に、充分集中して仕事をしなければならない。それはちょうど、アリの厳しい冬が到来する前に自分の穴に葉を運び、冬の準備をするのに似ている。壮年の男性も、敏速に先見の目をもって行動をしなければならない。

多くの若い男性は、あらゆるエネルギーを惨めに使い果たし、壮年になったときには、醜く、ひどく哀れな姿をした失敗者となる。

多くの壮年の男性が、もはや自分は若さを失っているということに気づかず、若いときのような道楽を繰り返しているのを見るのは本当にこっけいである。

終わりに近づいているこの文明の最も大きな不幸の一つは、アルコール癖である。

若いときに多くの者が飲酒にふけり、壮年になってもまだ家庭をもたず、財産もなく、十分な収入のある職業にもついておらず、ただ酒を求め、飲み屋から飲み屋をまわり歩くような生活をしている。それはおどろくほど惨めな姿である。

家族の長や教育者は、若者に特別な注意を向け、より良い世界をつくるという健全な目的をもって若者たちを誠実に導いていくべきである。

## 28 老年期

人生は、初めの四十年でわれわれに本を与え、続く三十年間に解説を授けてくれる。

二十才にして人は孔雀であり、三十才にしてライオン、四十才ではラクダ、五十才にはヘビ、六十才では犬、七十才には猿、そして八十才にはただ単に一つの声と影にすぎなくなる。

時間はすべてをあらわにする。それは誰に尋ねられるでもなく、独り言を話し続けているとても興味深い多弁家のようなものである。

間違つて人と呼ばれている、哀れな「インテレクチュアル・アニマル」がつくつたもので、時を経てもお破壊されることのないものなどは、何一つないのである。

逃げていく時間は元に戻すことはできない。

時は今隠れているものすべてを公にし、そしてこの瞬間すばらしく輝いているものすべてを覆い隠してしまふ。

老いというものは愛のようなものである。若者が着るような服を身につけて変装したとしても、それを隠すことはできない。

老いは人の自尊心をくじき、そして屈服させる。謙虚な人と、謙虚にさせられた人は異なるものである。

死が近づいてきたとき、人生に失望している老人は、老いというものはや荷物ではないということに気づく。

人はみな長生きをしたいと望み、そして老年に到る。しかし老いること、そのことは人々を驚かせる。

老年は五十六才に始まり、老衰し、死ぬときまで七年ごとの区切りをもって進行していく。

老人にとって最大の悲劇は、老人であるという事実そのものにあるのではなく、老人であることを認識しようとしたがらない愚かさ、そして老いそのものが罪であるかのように、また自分を若いと信じこもつとする、そのばかげた考えにあるのである。

老年期において最良のこと、それは自分がゴールのすぐ近くにいたという自覚をもつことである。

心理的「我（エゴ）」は、何かを経験したからとか、年を重ねたからといって良くなっていくことはない。むしろ複雑になり、より一層困難に、やっかいになっていくものである。それゆえ次のようなことわざもある。「三つ子の魂百まで。」（原書の文章を日本語に直訳した場合「性格と容ぼうは墓場まで」）

気むずかしい老人の心理的「我」は、醜い手本を示すことができないために、美しい助言をして自らを慰める。

老人たちは、老年という年令は、もはや青年たちが熱狂的に快楽を享受することを死刑という罰によつて

制するしかないということ、そしてそれは恐ろしく暴君的であるということをよく知っている。それゆえ美しい助言で自らを慰めるほうを選ぶのである。

「我」は「我」を隠し、「我」はそれ自身の一部を隠す。そしてすべてが隠された崇高なる言葉と美しい助言のラベルによって飾られるのである。

「私自身」の一部が、「私自身」の他の部分を隠す。「我」は自分に都合の悪いことは隠してしまうのである。

観察と経験から完璧に言えることは、悪癖がわれわれを見放したとき、その悪癖を捨てたのは自分からだと思いたがるということである。

「インテレクトチュアル・アニマル」の心（ハート）は、年令とともに良くなっていくことはなく、むしろ悪くなっていく。そしてまるで石のように固くなっていき、若い頃欲ばりで、うそつき、怒りやすい性格であったならば、年老いたときにはより一層、それらがひどくなっているであろう。

老人は過去の中に生きており、老人はたぐさんの「昨日」の集まりである。老人は蓄積された記憶そのものであり、老いた人は生きているその瞬間を全く無視している。

完全なる老いに達する唯一の方法は、自らの心理的「我」を排除することである。一瞬一瞬を死ぬ、ということを学んで生きるならば、われわれは崇高な老いに到達することができるのである。

すでに「我」を排除した人たちにとって、老いとは、大いなる安らぎと自由の宿るものとなる。情欲が根

本的に、完全に、決定的な形で死んだとき、人は一人の主人からだけではなく、多くの主人から解放されたような自由を得ることができる。

「我」の残りがささえ見当たらないという、無垢なる老人に出会うのは大変難しいことである。そのような老人は、限りなく幸せであり、一瞬一瞬を生きている人である。

白髪のある賢者、知恵ある老人、愛に満ちあふれた人物は、事実何世紀もの時の流れの中で、人々を賢く導く灯台のような存在になる。

「我」のほんの残りがささえもっていないマスターである老人は、過去の世界に何人か存在し、現在も存在している。このようなノスティック・アラハット（叡智の阿羅漢）たちは蓮の花のように神秘的でかつ神聖な存在である。

根本的、かつ決定的に「複数の我」を排除した「尊敬すべき老人のマスター」とは、「神聖な愛」「崇高な力」そして「完全なる知恵」が完全に具現された人である。

もはや「我」をもっていない老マスターは、事実「神聖なる本質」が完全に具現された人なのである。

このような「崇高なる老人」、そのようなノスティック・アラハット（阿羅漢）たちは、はるかなる昔から世界を照らし続けてきたのである。仏陀、モーゼ、ヘルメス、ラーマクリシュナ、ダニエル、聖なるラマたちを思い出してみよう。

あらゆる教師や親たちは、新しい世代が老人たちを尊敬するよう、敬うように導かなければならない。

名前をもたぬ神聖で、真実なるもの、それには三つの面がある。すなわち知恵と愛、そして言葉である。

「神聖なるもの」その父親的表現は「宇宙の知恵」であり、その母親的表現は「無限の愛」である。そして子の表現は「言葉」である。

家庭において父は知恵を象徴し、母は愛を、そして子は言葉を象徴する。

年老いた父は、息子や娘たちからのあらゆる援助を受けるに値する存在である。もはや年老いて働くことがでなくなった父親を、息子や娘たちは扶養し、敬うのは当然のことである。

もはや働くことができない尊敬すべき年老いた母親を、息子や娘たちが世話をし、愛することが必要である。その愛から尊敬が生まれるのである。

誰であろうと、自分の父を愛せないような者、自分の母を敬えないような者は、左の道、誤りの道を進んでいくことになる。

子供が自分の親を裁く権利はないのである。この世に完全な人はいない。たとえある方面に欠点がなくとも、別の部分で欠点があるものである。われわれはみな同じはさみで切られているのである。

「父性愛」を過少評価する者がいるかと思えば、「父性愛」を嘲笑する者さえいる。人生においてそのように振るまう者は、名をもたない「その方」に通ずる道を決して歩むことはないであろう。

父を忌み嫌い、そして母を忘れるような親不幸の子供は、事実、心がねじ曲がり、あらゆる「神聖なるもの」を憎悪するのである。

「意識の革命」とは、父を忘れたり、敬うべき母を軽視したりするような「恩知らず」を意味するのではない。「意識の革命」とは「知恵」「愛」「完全なる力」である。

父の中に知恵のシンボルがあり、そして母の中に愛の流れてやまない泉があり、この最も純粋な本質なしに、至高の「内的実現」を成し遂げることは全く不可能である。

## 29 死

死というものが、実際いかなるものであるのかを、深く、かつマインドのあらゆる領域において緊急に理解する必要がある。そのように死を理解して初めて、不死というものを統合的に理解することができる。

棺の中におさめられた愛する人の肉体を見て、死のもつ神秘が理解できるわけではない。

真実は一瞬一瞬未知のものであり、死に関する真実もまた例外ではない。

「我」はいつも、当然のことながら、死から安全でいられることや、何か保証となるものを欲している。そして恐ろしい墓石の向こうで、どのような形にせよ不死というものを約束し、良い地位を請け合ってくれるような権威を求めているのである。

「我」自身はあまり死にたいとは思わない。「我」は存在し続けていたいのであり、死を大変恐れている。

真実は、信じるとか疑うとかいうものではない。真実とは安易に信じることや懐疑であることは全く無関係であり、概念、理論、意見、観念または先入観、仮定、偏見、肯定、否定などという範疇のものでもない。死に関する神秘の真実についてもまた例外ではない。

死の神秘についての真実は、直接的体験によってのみ認識できる。

死の「実際の」体験を、経験したことのない者に伝えることは不可能である。

どんな詩人も「愛」について美しい文を書くことはできるが、愛を自ら経験したことのない者に愛に関する真実を伝えることはできない。同じように、死を自ら体験したことのない人に死に関する真実を伝えるのは不可能であろう。

死について真実を知りたい者は、研究して自ら体験し、しかるべく探すべきである。そうして初めて、死のもつ深い意味を発見することができるであろう。

長年の観察と経験から、人々は実際には死のもつ深い意味をそれほど理解したいとは思っていないということがよくわかった。人々が実際興味があるのは、単に肉体の死後もずっと生きていたいという、ただそれだけのことなのである。

多くの人々は物質的な幸福や名声、家族、信仰、概念、そして子供などを通して、自分を存続させたいと望むが、いかなる心理的な存続も無益であり、一時的で、はかなく、不安定であることがわかると、とたんに足場を失い、不安になり驚き、恐れ、そして果てしない恐怖でいっぱいになってしまうのである。

哀れな人々は、存続するものはすべて、時間の中で展開されているのだということをわろうとはしない。

存続するものはすべて、時の経過とともに衰えていくことを哀れな人々は理解しようとはしない。

哀れな人々には、存続するすべてのものは、やがて機械的な、マンネリ化した退屈なものになっていくということが理解できないのである。

死の深い意味について、完璧に意識を目覚めさせることは、緊急かつ必要不可欠である。そのようにしてのみ、存在しなくなることへの恐怖を消滅させることができるのである。

人類を注意深く観察してわかることは、マインドは常にすでに知っていることの中に瓶詰めにされているということである。それは墓の向こうにおいても知っていることが続くように願っているということである。すでに知っているものの中で瓶詰めになっているマインドは、決して未知なるもの、現実なるもの、真実なるものを知ることはいないであらう。

正しい瞑想によって、時間という瓶を壊しそこで初めて、「永遠なるもの」「時間に拘束されないもの」「真実なるもの」を体験することができるのである。

存続することを欲する人々は死を恐れる。彼らにとって信仰や理論は、単に麻酔剤としてしか役に立たないのである。

死そのものは全く恐れるものではない。むしろ何か快い、崇高で言葉に言い表せないものである。しかし既知のものの中に瓶詰めになったマインドは、軽信から懷疑へと揺れ動く悪循環をただ繰り返すだけである。われわれが真に、死のもつ奥深い意味に完全に意識を目覚めさせたとき、そのとき「生」と「死」は全一で、完全な総体であるということをも自分自身で直接体験し、発見することになるのである。

死というのは生命の貯蔵所である。生命の道は、死のひづめの跡で形成されている。

生命とは限定されたもの、また限定するエネルギーである。生まれてから死ぬまで、その人間の有機体の中を様々な種類のエネルギーが流通する。

人間の有機体が唯一抵抗できないタイプのエネルギーは、死の光線である。この光線は非常に高い電圧を有していて、人間の有機体はその電圧に耐えることができないのである。雷光のひと光りが一本の木をずたずたに引き裂くと同様、死の光線も人間の有機体の中をかけめぐり、破壊してしまふのである。これは避けることはできない。

死の光線は、死の現象を誕生の現象とつなげる。

死の光線は、非常に奥深い電圧を生じ、また受胎した卵の遺伝子を組合わせる決定的な力をもったある種のキー（鍵）を生じさせる。

死の光線は人間の有機体をその基本的要素に戻すものである。

「エゴ」 エネルギーをもった「我」は残念ながらわれわれの子孫の中に生き続ける。

死について真実なことは、死と受胎に関することは時間に属するものではないということである。瞑想のサイエンスを通じてのみこれは体験できるのである。

小学校から大学まですべての教師は、真実なるもの、実在なるものを体験する道を歩むように生徒に教えるべきである。



### 30 真実の体験

デルフィの荘厳なる寺院の入口には、次のような聖句が彫られている。「己自身を知れ、さすれば宇宙をそして神々を知るであろう。」

瞑想という超越的な科学は、古代ギリシアの神秘的儀式を執り行った司祭のこの聖なる言葉を礎石として  
いる。

もしわれわれが真実、正しい瞑想の礎石を築きたいと望むならば、マインドのあらゆるレベルにおいて自分自身を知る必要がある。

すみやかに瞑想の正しい礎石を築くことは、野心やエゴイズム、恐怖、憎悪、精神的パワーへの欲望、結果をすぐに手に入れたいたいという欲望などから解放された状態になることを意味する。

疑いの余地なく、瞑想の「礎石」を築いたマインドは、明らかに穏やかで、深く、威厳のある沈黙の中にある。

極めて論理的な観点から見ても、自分自身を知ることなしに「真実」を体験したいと望むのは余りにも愚かなことである。

欲望、過去の想い出、心理的欠点などの一つ一つを、マインドのすべての領域において「あらゆる角度から」理解する必要がある。

瞑想中、まさにわれわれを特徴づけるところのあらゆる心理的欠点や、嬉しかったこと、悲しかったこと、無数の過去の想い出、外界や自分の内から来る数々の衝撃、あらゆる種類の欲望や情欲、長い間根にもっている恨み、憎悪といったものが、次々とマインドの画面を通り過ぎていく。

瞑想の礎石をマインドに築くことを真剣に望む者は、われわれの判断におけるポジティブな価値、そしてネガティブな価値に充分注意し、単に頭のレベルだけでなくマインドの潜在意識、墮落意識、無意識のすべての領域においても、あらゆる角度から理解すべきである。

これらの価値すべてを深く学ぶことは、すなわち自分自身を知ることの意味する。

マインドの画面を通りすぎるあらゆる作品に、初めと終わりがある。様々な形や欲望、情欲や野心、過去の想い出などの行進が終焉したとき、マインドは穏やかになり、深い沈黙状態となる。それはいかなる思考も存在しない「空」である。

心理学を勉強している現代の学生は、「光明なる空」を体験する必要がある。われわれ自身のマインドの内  
で起こる「空」の爆発が、変換の原理を体験し、感じ、生きさせてくれるのである。その「原理」こそ真実である。

穏やかなマインドと、無理やり穏やかにされているマインドを区別しなさい。

沈黙しているマインドと、強制的に沈黙させられているマインドを区別しなさい。

論理的に見ても、マインドが暴力によって静められているときというのは、その奥深いところや他の側面において、穏やかどころかえって解放されようと戦っていることがわかるはずである。

実際分析してみると、マインドが力によって沈黙を強いられている場合、その奥深いところでは沈黙しておらず、マインドは叫び、ひどく絶望していることを理解できるはずである。

われわれに、幸運な贈り物として本当の穏やかさと自然で自発的な沈黙が訪れるのは、インテレクトのすばらしい画面に写るわれわれ自身の内的な映画が終わるときである。

マインドが自然で自発的に穏やかであるとき、マインドがすばらしい沈黙状態にあるとき、そのとき初めて「光明なる空」になるのである。

「空」というものを説明することは簡単ではない。どのようなものだと決められるものでも、言葉に表されるものでもない。「空」に関してわれわれが述べるとどのような概念も、おうおうにして主要な点で違ってしまうことになる。

「空」は言葉で描写することも、表現することもできない。人間の使う言語というのは、主に現存する物事、思考、感情を表すために創造されたものだからである。ゆえに現存しない現象や物事、感情を明白に、そして詳しく表すには充分ではないのである。

存在する形で、限定された言語を使って「空」について議論しようとするのは、疑いの余地なく愚かで間違っている。

「空」とは非存在であり、存在は「空」ではない。

形は空と異ならず、空は形と異なるものではない。

形は空であり、空は形である。物事が存在するのは空ゆえにである。

空と存在はお互いに補足し合い、対立し合っていない。空と存在はお互いに溶け込み合い、抱き合っている。

普通の感性をもつ人があるものを見るとき、そのものの存在する面だけしか見ず、その空なる面は見えない。

「正覚を得た人」はどんなものに対しても、その存在している面と空の面を同時に見ることができるのである。

空とはただすべてのものの実体のない、非人格的な性質の部分を表す言葉であり、絶対的な無執着と自由の境地を表すしるしである。

小学校から大学まですべての先生は、『ノーシス心理革命』を深く研究し、真実の体験への道を生徒に教えないければならない。

すべての思考が終わったとき初めて、真実を体験するに到るのである。

「空」の発露によって、われわれは純粋な真実の輝きを体験することができる。

その「認識」、真実の中の「現在」、「空」、特徴も色もなく「本来、空なるもの」こそが「本当の心理」「普遍的な慈悲」なのである。

「あなたの知性」の真実なる本質は「空」である。しかし何もない「空」ということではない。それは束縛されない「知性そのもの」であり、それはキラキラと輝き、普遍的で幸福な「意識」、普遍的な知恵、ブツダである。

あなた自身の「空なる意識」と、光り輝く喜びに満ちた「知性」は離れられないものである。その「ダルマ・カーヤ」の結合、それは「完全なる正覚の状態」である。

あなた自身の「輝ける意識」「空」、そして偉大な光彩を放つ体と分離することができない意識には、もはや「生死」はなく、不変なる光「阿弥陀仏」があるだけである。

この認識で充分である。あなた自身の「知性」がブツダの如く「空」にあり、そしてそれが自分自身の「意識」であると知ることが、すなわちブツダの神聖なる魂の中に居続けることなのである。

瞑想をしている間、あなたの「思考回路」が他に気を散らさないようにしなさい。今、瞑想をしているのだ、ということも忘れなさい、自分は瞑想しているのだ、と考えたその考えそのものが瞑想を邪魔するからである。真実を体験するために、あなたのマインドは「空っぽ」でなくてはならない。

### 31 心理革命

小学校から大学までのすべての教師は、インターナショナル・ノース・ムーブメントが提示する『心理革命』を深く研究すべきである。

起こりつつあるこの『心理革命』というのは、以前にこの名称で知られていたものとは、全く根本的に異なるものである。

まさに疑いの余地なく明言できることは、あらゆる時代の深い夜から脈々と続く何世紀もの時の流れの中で、「理由なき反抗」とかわいい「ロック」のジェントルマンに象徴されるこの現代ほど、「心理学」が地に墜ちている時代はないということである。

この現代の、時代遅れで復古的な心理学は、残念ながらその存在の意義と、それ自身の真の起源との直接的な接触をすべて失ってしまっている。

性的退廃、そして全面的にマインドが破壊状態にある現代では、心理学という用語を極めて正確に定義するのが不可能であるばかりでなく、心理学の根本的主题が何であるかを本当に知ることがない。

「心理学」が最新の現代的な科学である、などと誤った考えをもっている人は全く混乱している。なぜなら「心理学」は「古代神秘」を教える古い学校に起源をもつところの大変歴史のある科学だからである。

インテリ気取りの人、超現代的な不良、時代遅れの人などに「心理学」と言われるものを定義することはできない。それはこの現代を除いては、「心理学」はこの名前のままで存在したことはなかったからである。というのは、心理学が政治的または宗教的色合いが強く、社会を攪乱する傾向があり、疑わしきものであると考えられてきたために、たくさんの衣で変装する必要があったからである。

昔から、人生という劇場の様々な場面において、「心理学」は哲学という衣を賢くまとうて常にその役割を演じてきた。

「ヴェーダ」の都、聖なるインドを流れるガンジス川のほとりに、幾世紀もの恐ろしい夜を経て生き続け、純粋な本質を包含する優れた「体験的心理学」であるヨガの体系が存在する。

七つのヨガは、常に哲学的システムや、方法、あるいは手順として示されてきた。

アラブの世界においてスーフィ教の神聖なる教えは、部分的に形而上的、宗教的ではあるが、実際は完全に心理学的な性質をもっている。

多くの戦争や人種的、宗教的、政治的偏見などで骨の髄まで朽ちてしまった古きヨーロッパでは、何と前世紀末まで「心理学」は気づかれないように、哲学という衣で変装していたのである。

哲学は、論理学や認識理論、また倫理や美学などと分割細分化されているが、結局それ自身は疑いの余地なく「明らかなる自己反省」「存在の神秘的認識」「覚醒意識の機能心理を知る」ことである。

多くの哲学の学派が犯した誤りは、心理学を哲学より低いもの、人間性の最も低級な面やつまらない部分

とのみ関わるもの、と考えた点である。

宗教の比較研究でわかったことは、「心理学のサイエンス」が、常にすべての「宗教原理」と非常に内的に結びついているということである。そして異なった時代の様々な国々において、その最も正統な神聖なる文献の中に、「心理学的」サイエンスのすばらしい宝が存在しているということである。

ノーシス運動を深く調べると、初期キリスト教時代のノスティックたちによって記された『フィロカリア (PHILOKALIA)』という題名のすばらしい編集物を見つけることができる。これは今日なお、「東方教会」において、特に僧への教えに使われているものである。全く疑いもなくわれわれが強く断言できることは、この『フィロカリア』は本質的に「純粋な体験心理学」であるということである。

ギリシア、エジプト、ローマ、インドあるいはペルシア、メキシコ、ペルー、アッシリア、カルデアなどの「古代神秘学校」において、「心理学」は常に哲学や真の客観的芸術、科学や宗教と結びついていたのである。

古代において「心理学」は、「神聖な踊り子たち」が舞う優美な形の中に、または奇妙な象形文字や美しい彫刻の謎の中に、あるいは詩や悲劇の中に、そして寺院に流れる快い音楽の中にまで、賢く隠されていたのであった。

科学や哲学、芸術、宗教が分かれて別々になる以前、「心理学」はすべての古代の神秘学校においては至高の位置にあった。

「カリギュラ」つまり「暗黒の時代」の到来によって（われわれはまだこの時代にいるが）、イニシエイト

の学校が閉鎖され、「心理学」は現代の様々な「秘教的流派」または「偽<sup>にせ</sup>の秘教的流派」のシンボルの中に、とりわけノスティック秘教主義の中に生き残った。

深く分析、研究すると、過去から現在にわたって存在する様々な心理学の体系や教義は次の二つに区分されることになる。

第1 多くのインテレクチュアルな人々が想像するような教義。現代の心理学は事実この分野に属する。

第2 「意識の革命」という点から人間を研究する教義。

この後者の教義はまさに根元的教義であり、最も古い起源をもつものである。この教義によってのみ、われわれは心理学の生きた起源とその深い意味を理解することができるのである。

われわれがみな「意識の革命」という新しい見地から、人間を研究することがいかに重要であるかを「マインドのすべてのレベル」において完全に理解したとき、心理学とは、すなわち「個人」の徹底的かつ「根本的変換」と密接に関係した原理、法、事実を研究することであるということがわかるであろう。

すべての学年の教師は、われわれが生きているこの「危機的」時期について、そして新しい世代が直面している心理的混迷という破局的状態について、統合的にかつ緊急に理解する必要がある。

「新しい世代」を「意識の革命」の道へ誘導する必要がある。そしてそれは『根元的教育』でいう「心理革命」によってのみ可能なのである。

## 32 心理的反抗

あらゆる人種を詳細に研究するために、世界の国々をまわり歩いてきた人が、次のようなことが確認できたと言っている。それは、誤って「人」と呼ばれている哀れな「インテレクチュアル・アニマル」の本性は、古代ヨーロッパや、奴隷状態に疲れきったアフリカ、ヴェーダの神聖なる地や、西インド諸島、オーストラリア、中国などどこにあっても、常に同じであるということである。

この具体的な事実、すなわち研究熱心な人を驚かすこの凄まじい現実、旅人がその地の学校、大学などを訪れることによって、明らかに確かめることができる。

大量生産の現代において、すべてのものがベルトコンベアーで大量に生産される。大量の飛行機、車、ゼいたく品等々。

少々グロテスクに聞こえるかもしれないが、工業学校や大学などもまた、明らかに大量生産の頭脳工場になっってしまったと言える。

この大量生産時代にあつて、人生における唯一の目的は経済的保証を見つけることにある。人々はあらゆることに恐れを抱き、保証を探し求めている。

大量生産の現代において、自主独立の思考をもつことはほとんど不可能に近い。なぜなら、現代の教育の

型は、単なる都合主義にもとづいているからである。

「新しい世代」はこのインテレクチュアルな凡庸さにとても満足している。もし誰かが他の人々とは別の、違ったものになりたいと望むならば、世間の人はみな彼を失格者と見なし、批判し、のけ者にし、仕事を断ったりする。

楽しく過ごすためにお金を得ようとする欲望、人生で早く成功しようとする、経済的保証を希望すること、他人に見せるためたくさんのものを買おうとする欲望などが純粹で自然でかつ自発的な思考にストッブをかけるのである。

恐怖心というものがマインドの働きを鈍くし、ハートを硬くするというのが、はっきりと実証されている。

大変な恐怖心を抱き、そして保証を求めるこの時代において、人々はより安全で、問題が少ないと思われる自分の洞穴に、巣窟に、すみっこに隠れ、そこから出ようとはしない。人生に恐怖を抱き、新たな冒険や体験などを怖がっているのである。

現代のこの大げさに吹聴された教育は、恐怖心や保証の欲求にもとづいており、人々は恐れおののいて、自分自身の影さえも怖がっている。

人々はあらゆることに恐れを抱いている。すでに設定されてある古い規範から抜け出すことを恐れ、他の人々と異なるのを恐れ、革新的な考えをもつことや退廃している社会のあらゆる偏見を打ちやぶることを恐れているのである。

幸運にも世の中には、マインドに関するあらゆる問題を、真に深く調べようとする誠実で理解力のある人が少数だが存在する。しかし、われわれのほとんどは現状に矛盾を感じるといったような反抗的な魂をもち合わせてはいない。

「反抗」というものは二つのタイプに分けられる。一つは、暴力的心理的反抗。もう一つは、「知性」の奥深いところの心理的反抗である。

一番目の反抗は反動的、保守的で時代遅れである。二番目の反抗は「革命的」である。

一番目の心理的反抗は、古くなった衣をつくろったり、くずれないように古い建物の壁を修理するような「修繕者」に見られる。それは後退するタイプであり、血と酒のにおいのする革命家や、軍隊による暴動やクーデターを起こすリーダーたちがそうである。彼らは銃を肩にかけ、自分の気まぐれや理論を受け入れない人々すべてを、銃殺して喜ぶ独裁者である。

二番目の心理的反抗は、仏陀、イエス、ヘルメス、変革者、「知性ある反抗者」、「直観者」、「意識革命」の偉大なる勇士などに見られる。

官僚的な社会の中ですばらしい地位に上がる、階級の頂点へはい上がる、自分の存在を感じさせる、などという愚かな目的だけで教育された人々というのは、真の深さが欠けている。愚かで、表面的であり、空虚で、全くあてにならない者たちである。

思考と感情が真に「統合」されていない人は、たとえ高等な教育を受けていたとしても、その人生は不完全で、矛盾に満ち、退屈極まりないものであり、あらゆる類の無数の恐怖に苦しんでいるということは明らか

かである。

全く疑いの余地なく確かに言えることは、「統合的な教育」のない人生は、まわりに害を与え、無益で有害なものであるということである。

この「インテレクチュアル・アニマル」は、不幸にも、バラバラな「実体」というものによって構成されている「内なるエゴ」をもっている。それは「誤った教育」によって、ますます強くなっていく。

われわれ一人一人が内側に引きずっている複数の「我」というものが、われわれのもつあらゆるコンプレックスや矛盾の根本的な原因なのである。

「我」を解体するため、『根元的教育』にある心理学的教えを新しい世代に伝えなければならない。

「エゴ（我）」を形成している様々な実体を根絶して初めて、われわれは自分の中にそれぞれの意識の中心、すなわち覚醒した永遠なる意識を設けることができるのである。そしてそのとき統合された存在となるのである。

われわれ一人一人の中に複数の「我」が存在する間は、自分自身の人生をつらいものにするだけでなく、他人の人生までも苦痛なものにする。

法律を勉強し弁護士になっても、紛争を長く続かせるのであれば、それは何の役に立つというのであろうか。われわれの頭に多くの知識を詰め込んでも、混乱した状態を続けるのであれば、それは何の値打ちがあるというのだろうか。技術や工業力を、われわれの同胞を破壊するために使うのであれば、それは何の価値

があるであろうか。

もしわれわれが毎日の生活の中で、哀れにもお互いを破壊し合っているのであれば、知識を得ても、学校の授業に出て、勉強をしても、それは何の役にも立ちはない。

教育の目的が、毎年毎年ただ単に、新たな求職者や、新しいタイプのよた者、あるいは隣人の宗教を尊ぶことすら知らない粗野な者を生み出すだけであってはならない。

『根元的教育』の真の目的は、統合された真の男女、つまり意識の目覚めた知性ある真の男性と女性をつくることにあるのである。

小学校から大学までの教師は、いろいろなことを考えているが、不幸にも肝心な点、つまり生徒の統合的な知性を目覚めさせる、ということとは思いつきもしない。

誰でも資格や勲章や免状を欲し、それらを獲得することができる。ましてや、人生の機械的領域において、大変有能になることさえ可能である。しかしそのことは「知的」であるということではない。

「知性」というものは単なる機械的機能では決していない。「知性」は、ただ単に本から情報を収集した結果でもなく、また挑戦されたとき、才気輝く言葉で自動的に反応する能力でもない。「知性」は記憶したものをただ単に言葉にすることではない。「知性」とは、「エッセンス」を、「真実」なるものを、真に「ある」ものを直接受けとる能力なのである。

『根元的教育』は、われわれ自身の中に、そして他の人々の中にこの能力を目覚めさせる「科学」である。

『根元的教育』は、真の「価値」を発見する手助けとなるものである。一人一人が自分自身を深く調査し、統合的に理解することによって初めて、その真の「価値」は明らかとなるのである。

われわれが「自分自身を知ること」がなければ、そのとき自己表現は、自分勝手に破壊的な自己肯定となる。

『根元的教育』は、一人一人がマインドのあらゆる領域において、自分自身を理解するための「能力」を目覚めさせるということにのみ重点を置いている。複数の「我」の発する自己満足の、誤った自己表現のためにあるものではないのである。

### 33 進化・退化・革命

唯物主義の学派も精神主義の学派も同じく、「進化という教義」によって完全に瓶詰めされている。

現代において人間の起源とその過去の「進化」についての意見は、全く安直で、こじつけであり、奥深い批判的な研究には堪えられないものである。

カール・マルクスによって盲目的に受け入れられたダーウィンの理論や、マルクスが大げさに吹聴した弁証法的唯物主義にもかかわらず、現代の科学者たちは人間の起源については何も知らない。彼らにとつては何も明らかになってはいない。彼らは直接的に何も体験したことがないために、「人間の進化」に関して、具體的で正確な独特の証拠を見出すことができないのである。

反対に、歴史上の紀元前二―三万年の人類を見ると、現代の人々には理解することができないほど高等なタイプの人間がいたという明らかな痕跡、確かな証拠を見つけることができる。多くの証拠品の中に、古代の象形文字に、大変古いピラミッドやエキゾチックな一枚岩の石碑に、神秘的なパピルスや様々な古代の遺跡の中に、それは示されている。

先史時代の異質で神秘的な人類、それは「インテレクチュアル・アニマル」に外見はともよく似ているが、実際は大変異なった、奇妙で神秘的な生き物だった。彼らの有名な骨は、氷河紀やそれ以前の古い鉱床の奥深い所に眠っているが、現代の科学者たちはそれを正確な形としてとらえることも、また直接体験によ



って知ることもない。

ノスティック・サイエンスでは、われわれが知っているこの「インテレクチュアル・アニマル」とは、完全なる本質的存在ではなく、その完全なる意味においては未だに「人間」ではないとしている。自然は、ある点まではヒトを成長させたが、その後は、その成長を続けるか、またはあらゆる可能性を放棄し退廃するかは、当人の完全なる自由に委ねたのである。

「進化の法則」と「退化の法則」は、あらゆる自然における機械的な軸であり、「本質的存在の内なる自己実現」とは全く関係がない。

「インテレクチュアル・アニマル」の内には、進歩するかまたは退化するか、というものすごい可能性が存在するのである。この可能性が展開するのは法則などによるのではない。法則によって「進化」の力学は、可能性を展開することはできないのである。

このような潜在している可能性を展開しうるのは、決められた条件のもとにおいてだけである。それは個人の凄まじい努力と、そして過去にその仕事をなし得たマスターたちからの効果的な援助によってである。

人間になるために、ありとあらゆる隠れた可能性を開発したいと望む者は、「自らの意識革命」という道から入らなければならない。

「インテレクチュアル・アニマル」は粒子、種子である。その種子から「生命の樹」が、真の人間が、ギリシアの哲学者ディオヘネスが真昼のアテネの街の通りを提灯を手に探しまわったが残念ながら見つけないのでできなかった、あの真の人間が生まれるのである。

この粒子、このとても特別な種子の成長は、法則によってではない。普通の、自然の流れの中では、それは墮落していくものである。

光線と雲の違いほど「真の人間」と「インテレクチュアル・アニマル」は異なっている。

もし粒子が死ななければ、種子は発芽しないであろう。「人間」が生まれるためには、「我（エゴ）」が死ななければならない。それは緊急である。

小学校から大学までのすべての先生は、生徒に「倫理の革命」という道を教えるべきである。そのようにしてのみ、エゴの死が可能となるのである。

「意識革命」がこの世界においては滅多に見られなくなったばかりか、それはますますまれになっているということである。

「意識革命」は、完全に明らかな三つの要素から成っている。一番目は死ぬこと、二番目は生まれること、そして三番目は人類への献身である。これらの要素のもつ秩序はそこから産まれてくるものを変えることはない。

「死ぬこと」とは、「倫理の革命」と「心理的我」の溶解である。

「生まれること」とは、「性エネルギーの質的変換」のことである。この件に関しては超経験的性医学の分野になるので、このテーマを勉強したい人は、ノーシスセンターに問い合わせ、関係ある本を読んでいただきたい。

人類への「献身」とは、普遍的、意識的な慈愛である。

もしわれわれが「意識の革命」を望まないのであれば、そもそも内なる自己実現へと導いてくれるその隠れた可能性開発のために、凄まじい努力をしないのであれば、その可能性は決して花開くことはないであろう。

自己実現をする者、救われる者は非常にまれであり、そういう人たちの中には不正が全く存在しない。何故にこの哀れな「インテレクチュアル・アニマル」は、自分の望まないものをもっている必要があるのだろうか。

全面的で徹底的、根本的な変革が必要である。しかしすべての人々がその変革を望んでいるわけではない。彼らは欲しているわけでもなく、知ることもなく、そしてたとえ聞いたとしても理解できず、興味すらないのである。何故に、望まなかったことが無理やり与えられる必要があるのだろうか。

個人が漠然とも知らないし、未だにもっていない「新しい能力」「新しい力」を獲得する前に、まずすべきことは、もっていると思いついていない（実際はもっていないが）能力や力を自分のものにするということである。

## 34 統合された個人

真の意味において『根元的教育』とは、自分自身を深く理解することから始まる。一人一人の内に、自然の法のすべてがあるのである。

自然がもつありとあらゆる驚くべきこと、これを知りたいと思う者は、自分自身の中に宿る驚くべき現象の数々を研究すべきである。

偽りの教育においては、インテレクトを豊かにすることだけに注意が向けられるが、それは誰でもできることである。お金さえあれば、誰でもたくさん本を買うことができるのと同じである。

ここで頭脳の開発に異論を唱えているのではない。ただ軌道はずれた、マインドに蓄積することだけに熱心な傾向、というものに異議を唱えているだけなのである。

偽りの、インテレクト偏重教育は、ただ自分自身から逃げるための巧妙な手口を提供するだけである。

博学な人、インテレクト至上主義者は、自分自身から逃げるためのすばらしい口実を常に用意しているものである。

精神性を欠いたインテレクト至上主義の産物は手におえないインテリであり、彼らが人類を混沌と破壊へ

と導いている。

技術によって、われわれが自分自身を「全一」にして「統合的」な形で認識する能力を身につけることは決してできないのである。

親たちが子供を学校に通わせているのは、技術を身につけさせるためであるとか、専門職を得させるため、そして最終的には生活の糧を稼げるようになるためにといった理由からである。

何らかの技術をもっていること、専門職を身につけるということは確かに必要である。しかしそれは二次的なことであり、一次的なこと、基本的なことは、自分自身を知ることである。自分が誰であり、どこから来てどこへ行くのか、自分の存在の目的は何なのかを知ることである。

人生は様々であり、そしてあらゆるものがある。喜び、悲しみ、愛、熱情、楽しみ、苦痛、美、醜……など。われわれが人生をいきいきと生きる術を知ったとき、またマインドのあらゆるレベルにおいて人生を理解したとき、そのとき社会に自分の場所を見つけることができる。そして自分自身の技術と、生きる、感じる、考えるということについての独自の型をつくることができるのである。しかしその反対は、一〇〇%偽りである。技術だけ、それだけでは決して奥深い、真の理解を生じさせることはできないのである。

現在の教育は決定的に過ちを犯している。それは「余りにも」技術や、職業に重要性を置いているからである。技術を強調しすぎると、人を機械的なロボットにしてしまい、人のすぐれた可能性を明らかに破壊してしまうからである。

人生を理解することなく、自分自身を知ることなく、また「我（エゴ）」の成り立ちを直接知覚すること

もなく、そして思考すること・感じること・望むこと・行動することに対する適切な道を徹底的に学ぶこともなく、ただ能力や効率を開発するのであれば、それは単にわれわれ自身の残酷さやエゴイズム、戦争、飢え、悲惨、苦痛などを引き起こす心理的要因を増大させるだけである。

技術一辺倒な開発によって、機械工、科学者、技術家、原子物理学者、哀れな動物たちを犠牲にする生体実験者、破壊的武器の発明家などが生まれた。

原子爆弾や水素爆弾の発明者たち、自然界の生き物を苦しめる生体実験者たちなど、これすべての手におえない専門家のインテリたちは、唯一、戦争と破壊のためだけに役立っている。

その手におえない者たちはみな、何もわかってはいない。ありとあらゆる形で無限に表現される人生の全体的なプロセスについて、何もわかってはいないのである。

全般的な科学技術の進歩、運送システム、コンピュータ、電気照明、建物の中のエレベーター、あらゆる種類の電子頭脳などによって、生活の表面的な部分や数多くの問題が解決された。しかしそれと同時に、個人や社会の中に、より広い範囲で根深い問題を生じさせたのである。

マインドのより奥深いところにある異なった領域や層に気づくことなく、「表面的レベル」においてだけ生きるということは、実際、われわれや子供たちに悲惨さや悲しみ、絶望といったものをもたらすことになるのである。

一番必要なこと、一人一人にとって最も緊急な問題は、「統合的」に、「全一」なる形で人生を理解することである。なぜなら、そのようにしてのみ、われわれの内的問題をすべて満足のいく形で解決できるようになる

るからである。

技術に関する知識だけでは、決して、われわれのすべての心理的問題や、奥深いコンプレックスを解決することはできない。

もしもわれわれが「真の人間」「統合的な個人」になりたいと望むならば、「心理的に自分自身を探索」すべきである。思考のあらゆる領域において、深く自分自身を知るべきである。なぜなら、存在のあらゆるプロセスを「真に理解」することなく、また自分自身を「統合的」な形で認識することがないならば、科学技術は疑いの余地なく破壊的な道具となるからである。

もし「インテレクチュアル・アニマル」が真に愛し合い、自分自身を認識し、そして人生の全体的なプロセスを理解していたならば、決して原子を分裂させるなどといった罪を犯すことはなかったであろう。

われわれの技術進歩はすばらしいものがあるが、それはただ人を次々と破壊するための攻撃的な力を増加させたに過ぎない。それによって、至るところに恐怖や飢え、無知や病氣といったものが蔓延してしまったのである。

いかなる専門職、あらゆる技術をもつても、われわれに「真の幸福」「充実感」と言われるものをもたすことは決してできないのである。

人はそれぞれ、自分の仕事や専門職でマンネリ化してしまい、その人生のマンネリ列車に乗って大変苦しんでいる。そしてもっている物や職業が、妬みや陰口、憎悪、不愉快さの道具になってしまっているのである。

医者の世界、芸術家の世界、技師や弁護士の世界などでは、苦痛、陰口、競争、妬みなどでいっぱいである。

自分自身を理解することなく、ただ単に仕事に明けくれ、職についているというのは、苦痛を感じることである。そしてそのために逃げ道を探すことになるのである。ある人は一杯飲み屋やバー、キャバレーで酒を口にするために逃げ道を求め、またある人は覚醒剤やモルヒネ、コカインやマリファナに逃避し、また別の人は肉欲や性的退廃に逃げ道を求める。

人がある仕事や職業に、またはより多くのお金を得るために人生のすべてをつぎ込んでいるようなときは、退屈やいや気でいっぱいであり、そして逃げ道探しに必死になっている。

われわれは「統合的な個人」、完全なる個人にならなければならない。そしてそれは、自分自身をよく知り、心理的「我」を根絶して初めて可能なことである。

『根元的教育』では、生活費を稼ぐための技術を学ぶよう奨励すると同時に、より重要な何かを実行させるべきである。そして人が存在のプロセスに関して、マインドのあらゆる面、あらゆる領域において、体験し、感じるように援助すべきである。

もし誰かが何か言いたいことがあれば、言わせてあげなさい。何かを言うというのは、大変興味深いことである。なぜならそのようにして一人一人が、自分のスタイルを自分自身で創造していくからである。しかし、「統合的」な形で自分自身の人生を直接体験することなく、ただ他人のスタイルから学ぶのであれば、それは単なる表面的な見方、考え方をもつことにしかならないのである。

## 35 人間機械

人間機械は、この涙の谷間に存在する最も不幸な生きものであるが、しかし彼は自分を「自然界の王」と称するほどにプライドが高く、尊大である。

「人間よ、汝自身を知れ。」これは古代ギリシアにあった神聖なるデルフィ神殿の壁に書かれていた金言である。

人、この哀れな、誤って自分自身を「人間」と思っている「インテレクチュアル・アニマル」は、今までに複雑で難しい数多くの機械を発明してきた。彼らは、一台の機械を利用できるようにするには、ときには長年の研究と試練が必要であるということをよく知っている。しかし自分自身に関しては、それが今までに発明したどの機械よりも複雑な機械であるにもかかわらず、この事実をすっかり忘れてしまっている。

自分自身に関して、誤った観念を全くもっていないという人はいない。そして最も重大で深刻なことは、自分はまさに一台の機械である、ということに気がつくこともないということである。

人間機械は動作の自由がない。多くのバラエティーに富んだ内的影響と外からのショックによってのみ稼働するのである。

人間機械の行う動作や行為、言葉、思いつき、感動、そして感情や欲望はすべて、外からの影響と多くの

奇妙で気むずかしい内的な原因によって引き起こされる。「インテレクチュアル・アニマル」とは記憶と生命力をもった哀れな、お話のできるあやつり人形である。実際は何もできないのに、「できる」と愚かにも幻想を抱いている生きた人形なのである。

ここで、複雑な仕組みでコントロールされている自動機械人形を想像してみよう。その人形が生命を有し、恋に落ち、話をし、歩き、欲望をもったり、戦争をしたりすることをイメージしてみよう。

そしてその人形が一瞬一瞬主人を代えることができ、その主人たちはそれぞれが異なった独自の判断基準、独自の楽しみ方、感じ方、生き方などをもっている人物だとしよう。

金儲けを望む主人の下では、あるいくつかのボタンが押されると、その人形は商売に励み出すだろう。また三十分か数時間の後には別の主人の下で、異なった考えによって踊ったり、笑わせたりするだろう。そして三番目の主人の下では、喧嘩をさせられ、四番目の主人の下では、人形はある女に恋をするように仕向けられるだろう。五番目の主人は別の女性に恋をするように命令し、六番目の主人は隣人と喧嘩をさせ、警察が関わってくるほどの問題になるだろうし、七番目の主人は人形に引越しをさせるだろう。

この人形は自分では何もしていないが、確かに何かしたと思いついでいる。人形は「した」という幻想を抱いているが、実際は何も「して」いないのである。なぜなら「個人の本质」をもっていないからである。

雨が降るように、雷が鳴るように、太陽が万物を照らすように、明らかにすべてが起こったのである。しかしその哀れな人形は、自分が「した」と思い込み、すべて自分がやったのだという幻想を抱くが、実際は何もやってはいないのである。その哀れな機械人形とたわむれ、楽しんだのは、それぞれの主人たちなのである。

親愛なる読者よ、哀れなインテレクチュアル・アニマルとはこのようなものである。このような機械じかけの人形なのである。「することができると思い込んでいるが、実際は何も「できない」のである。この血と肉でできたあやつり人形は、一体となって「エゴ」、複数の「我」と言われるものを形づくっている、繊細でエネルギーシユな実体ある軍団によってコントロールされているのである。

キリスト教の福音書では、それら実体すべてを「悪魔」と見なすが、その本当の名称は「<sup>レギオン</sup>軍団」という。

「我（エゴ）」とは人間機械をコントロールしている「悪魔」の軍団である、と言っても大げさではない。事実そうなのである。

人間機械は全く「個性」も、「本質（存在）」ももっていない。「なす力」をもっているのは、真なる本質だけである。

唯一「本質」のみが、われわれに「真の個性」を与え、「本当の人間」に変えることができるのである。

単なる機械じかけの人形のままでいるのを本当にやめたいと望む者は、一体となって「我」をつくっているその実体の一つ一つを根絶しなければならない。実体の一つ一つが人間機械をあやつり、遊んでいるのである。単なる機械じかけの人形でいるのを本当にやめたければ、自分自身が機械的であるということを認め、そしてその仕組みを理解しなければならぬ。

自分自身が機械的であるということを理解しようとも、認めようともしない者、そしてこの事実を正しく把握しようとしないうちは、もはや変わることはできない。彼らは不運で、哀れである。首を石臼にくくりつけ、海の底にほうり込まれたほうがましではないだろうか。

「インテレクチュアル・アニマル」は、一台の機械、しかしとても特別な機械である。もしこの機械が自分分は「機械」であると理解し、そして良い導きがあり、状況が許すのであれば、機械であることをやめて「人」になることができるのである。

とりわけ、われわれは本当の個性をもっていないこと、「意識の永続的センター」をもっていないこと、そしてある瞬間はある人で別の瞬間には別の人になっていること、これらについてマインドのすべてのレベルにおいて深く理解することが緊急である。つまりすべてのことは、その瞬間瞬間に状況をコントロールする「実体」にあやつられているということなのである。

「インテレクチュアル・アニマル」が統一された、統合的な存在であるという幻想を生じさせるのは、一つには、肉体的感覚からであり、またその名前と苗字によるものである。あるいは、「教育」によって植えつけられたものや、単なるばかげた模倣によって身についた機械的な習慣や記憶によるものである。

哀れな「インテレクチュアル・アニマル」は、エゴ（我）と言われているものを形づくっている「形而上的」実体の一つ一つを深く理解し、そしてそれを次々と根絶していくのだという勇氣をもてない間は、機械でいるのをやめることも、変わることも、「真の個人の本质」を得ることも、そして本物の人間になることもできないであろう。

一つ一つの思いつき、情欲、悪癖、愛情、憎悪、欲望などは、それぞれ相当する「実体」をもっており、それらの実体すべてが一体となって『心理革命』で言うところの複数の「我（エゴ）」を形成しているのである。

それら形而上の実体の全部、また一体となってエゴを形成しているそれら「我」のすべては、互いに結びついているわけでもなく、何の座標ももっていない。その実体の一つ一つは、状況や印象の変化、ハプニ

ングなどに全面的に依存しているのである。

マインドの画面は一瞬一瞬その色や舞台が変わるが、すべてはその瞬間にマインドをコントロールする「実体」に依存しているのである。

マインドの画面に、エゴつまり心理的「我」を形成している様々な「実体」が次から次へと止めどもなく過ぎ去っていく。

複数の「我」を形成しているいろいろな実体は、連合したり分離したり、相性に応じて特別なグループをつくったり、お互いに喧嘩をしたり、議論をしたり、拒絶し合ったりする。

「我（エゴ）」と呼ばれる軍団をつくっている実体の一つ一つは小さいものであるが、それぞれが自分勝手にであり、トータルなエゴだと思い込んでいる。自分はそのほんの一部であるとは、少しも疑おうとはしないのである。

きょう、ある女性に永遠の愛を誓った「実体」は、しばらくして、その誓いと全く関係のない別の「実体」に取って代われ、その誓いはランプの城のごとく床に崩れ落ちてしまう。そしてその哀れな女性は失望して泣くことになるのである。

きょう、ある主義に忠誠を誓った「実体」が、明日になるとその主義とは全く無関係の別の「実体」に取って代われ、その人物は誓いを放棄する。

きょうノースに忠誠を誓った「実体」は、明日になるとノースを憎む「実体」に取って代われたりする。

あらゆる教育の場にいる先生は、この「根元的教育」を研究し、人類のために生徒を「意識の革命」というすばらしい道を歩くよう指導する勇気をもつべきである。

そして生徒は、マインドのあらゆる領域において自分自身を知る必要性を理解する必要がある。

より有効な理性的な指導が必要である。われわれ自身を理解すること、これは学校の教室にいるときから始められなければならない。

食べるため、家賃を払うため、衣服を身につけるために金銭は必要であるということを否定はしない。インテレチュアルな準備、専門職、生活費を稼ぐための技術は必要であるということも否定はしない。しかしそれがすべてではなく、二次的なものであるということである。まず第一次的なもの、基本的なことは、われわれは誰なのか、何者なのか、どこからやって来てどこへ向かって進んで行くのか、存在の目的は何なのかを知ることである。

自動式人形、哀れな人間、人間機械として生き続けるのは、余りにも嘆かわしいことである。

単なる機械であるのをやめ、「真の人間」になることを直ちに始める必要がある。

根本的な変換が必要である。この変化は、一体となって複数の「我」を形成している「実体」の一つ一つを根絶することから始めなければならない。

哀れな「インテレチュアル・アニマル」は「人間」ではないが、彼自身の中には潜在的に「人間」になるためのすべての可能性が宿っているのである。

それらの可能性を開発させるのは、ある法則によつてではない。一方、その可能性を失っていくことは、大変自然なことなのである。

凄まじいばかりの「超努力」によつてのみ、そのような人間の可能性は開花されるのである。

われわれは、排除しなければならない多くのものと、獲得しなければならない多くのものをもっている。何がわれわれには不要で、また何が足りないかを知るために、目録をつくる必要がある。

明らかに複数の「我」は、無益で有害で、不要である。

人間機械が当然のごとく自分のものだと思ひ込んでいるが、実際には「もっていない」ある種の力、能力、手腕を開発しなければならない。

人間機械は真の個性、目覚めた意識、意識ある意志、「なす力」などをもっているとと思ひ込んでいるが、そういうものは一切もっていないのである。

もしわれわれが機械であるのをやめたいと望み、また意識を目覚めさせ、覚醒した意志や個性、「なす力」を有したのであれば、まず自分自身を知ることから始めなければならない。そして心理的「我」を解体していくのである。このことは急務である。

複数の「我」が解体されて初めて、われわれの内に「本当の本質」が残るのである。

## 36 親と教師

一般の教育が抱えている最も重大な問題、それは小中学校や高校の生徒にあるのではなく、「教師」と「親」にあるのである。

もし親や教師が自分自身を知らず、子供を理解する力もなく、子供たちと自分たちとの関係を深く理解することもできずに、ただ単に生徒のインテレクトを開発することだけに關心をもつのであれば、どのようにして新しい教育をつくっていくことができるというのであろうか。

子供は、生徒は、意識の目覚めた指導を受けるために学校へ通っているのである。しかし教師が狭い判断基準をもった人、保守的、反動的な人、また時代遅れの人であつたならば、生徒もそのようになるしかないのであろう。

教育者は、もう一度自分自身を再教育し、自分自身を知り、自分のもっているすべての知識を再検討し、われわれが今「新しい時代」に入りつつあることを理解しなければならない。教育者が自らを変換することによつて、一般の教育も変換していくのである。

教育者を教育するのは最も困難である。なぜなら多くのものを読んでいて、資格をもって教える立場にある人、または学校の教師として働いている人というのはみな、すでにでき上がつてしまっているからである。彼らのマインドは、今までに勉強した五万とある理論で瓶詰めになつており、もはや大砲の音でさえ彼らを



変えることはできない。

教師は「どのように考えるか」を教えるべきである。しかし残念ながら、ただ単に「何を考えるべきか」ということにのみに神経を使っているのである。

親や教師は、経済的、社会的あるいは感情的な心配事でいっぱいになりながら生きている。

彼らは、自分自身の抱えるトラブルや悩みに大部分の時間をさき、「ニューウェイブ」の子供たちがかけられる問題については、それを探求し、解決するという真剣な興味をもっていない。

心理的、道徳的、社会的なひどい退廃が存在するにもかかわらず、両親や教師たちは個人的な不安や心配でいっぱいであり、子供の経済的側面や餓死しないように専門職につかせることを考えるだけで一日の時間はいっぱいなのである。ただそれだけである。

一般に信じられていることに反して言うが、大部分の親は子供を本当に愛してはいない。もし真に愛するのであれば、公共の福祉向上のために闘い、真の変化のために、教育一般に集く問題を解決するために闘うであろう。

もし親たちが子供を本当に愛するのであれば、戦争は存在しないだろうし、世界全体に対して自分の家族や国だけを偏愛することもないであろう。なぜなら、本当の愛のない偏った見方が問題や戦争、偏見による境界、そして子供たちにとっての地獄のような環境をつくっていくからである。

人々は医者や技師、弁護士などになるために勉強をし準備をするが、片や親になるための、一番重大で難

しい仕事に対する準備はしない。

そのような家族的エゴイズム、他者に対する愛の欠如、家族的孤立というその生き方は一〇〇%愚かである。なぜならそれが衰退や絶え間ない社会的退廃の要素となるからである。

発展や真の革命は、われわれを離ればなれにし、他の世界からわれわれを孤立させているかの有名な中国の城壁を崩して、初めて可能となるのである。

われわれはみな、「一つの家族」である。お互いを苦しめ合ったり、自分たちと一緒にいる少数の人だけが家族であると考えるのは愚かなことである。

「家族本意主義」という排他的な考えは、社会の発展をさまたげ、人類を反目させ、戦争や特権階級、経済的問題などを生じさせた。

親が子供を本当に愛するとき、家族を孤立させているその壁や垣根は粉々になって崩れ落ちるだろう。そしてそのとき、家族はエゴイストで愚かな一つのサークルであるのをやめることができるのである。

家族のエゴイステイックな壁が崩れ落ちたとき、そのとき初めてあらゆる他の親や教師たちと、また社会のすべての人々と兄弟愛的親交を結ぶことができるだろう。

「真の兄弟愛」が生まれた結果が「真の社会的変換」であり、またより良い世界を築くために教育分野に本物の革命が起きるときでもある。

「教育者」はより一層意識を目覚めさせるべきである。そしてすべての親を父兄会などで集め、彼らに明確に話さなければならない。

親は、一般の教育という仕事は、親と教師との間の相互協力による堅固な基礎の上に実現させるものである、ということを理解する必要がある。

『根元的教育』が新しい世代を翔びたさせるために必要なものである、ということを経に話す必要がある。インテレクトの形成は必要であるが、それがすべてではない、ということを経に言う必要がある。そしてさらにその上に必要なものがある。それは、子供たちに自分自身を知ること、自分自身の過ち、自分自身の心理的欠点を認識するように教えるということである。

また子供をつくるのは「愛」によってなすべきで、「動物的肉欲」によってではないということを経に言わねばならない。

われわれの動物的欲望や激しい性的情欲、病的な感傷主義、あるいは獣的感情を子孫に投影するのは残酷であり、無慈悲なことである。

子供たちはわれわれ自身の投影であり、獣的投影でもって世界を汚染するのは犯罪である。

小中学校や高校、大学の教師たちはすべての親を集め、自分たちの子供や社会、そして世界に対して精神的責任があるということを教えるべきである。

「教育者」は自分自身を「再教育」し、そして父親や母親を指導する義務がある。

世界を変換するために、真実われわれは愛し合う必要がある。今、おごそかな思考のとどろきの中で動きだした「新しい時代のすばらしい寺院」をわれわれの内に建てるために、互いに結び合う必要があるのである。

人々は意識を知性または理性と混同し、とてもインテリジェンスな人（知性的な人）または非常にインテレクトの発達した人を意識の目覚めた人と評価している。

人間の内に宿る意識とは、「内なる知識の獲得」であり、それはあらゆる思考的活動から全く独立した、非常に独特なものであると断言できる。

「意識」の力によって、われわれは自分自身を知ることができる。

「意識」は、われわれに「在る」とはどういうことか、どこに在るのか、また本当に知られていること、あるいは知られていないものについて完全な知識を授けてくれる。

『心理革命』では、人間は自分自身によってのみ自分を知ると教える。

おのれ自身だけが、ある瞬間に自分の意識が目覚めているかどうかを知ることができるのである。人は自分身だけが、自分の意識について知ることができ、そしてまたある瞬間に「意識」が存在しているか否かを知ることができるのである。

その人自身が、他の誰でもなくその人のみが、ある瞬間に意識が目覚め、その瞬間より前は意識がなく、

意識を眠らせていたということに気づくのである。その後その意識の目覚めた体験を忘れてしまつか、もしくは一つの想い出として、ある一つの強烈な体験の想い出として残しておくことになるであろう。

「インテレクチュアル・アニマル」の内に宿る「意識」とは永続的なものでも、不変的なものでもないということに緊急に知る必要がある。

人と呼ばれているこの「インテレクチュアル・アニマル」の内に宿る「意識」は、普通は深く眠りこけている。

「意識」が目覚めるのはまれなことであり、それはまた非常にまれな瞬間である。インテレクチュアル・アニマルはその意識が全く眠りこけた状態で働き、車を運転し、結婚し、死んでいく。非常に例外的瞬間にだけ、意識が目覚めるのである。

人生は一つの夢のようである。人は自分の意識が目覚めていると思いついて入っているために、夢を見ているなどとは決して認めようとはしない。なぜならばそれは意識が眠りこけているからである。

もし誰かが意識を目覚めさせるに到ったならば、自分自身に対してとてつもない恥ずかしさを感じるだろう。そしてすぐにも自分のこっけいさ、ばかき加減を理解するだろう。人の一生はまさにおかしく、恐ろしいほど悲劇的である。そしてまれではあるが崇高である。

もし一人のボクサーがリングで戦っている最中に意識が目覚めたならば、尊敬すべき観衆の前に恥ずかしさでいっぱいになり、その恐ろしい見せ物の場から逃げ出してしまっだろう。そして観衆は眠りこけて意識のないまま、それをただ茫然として見ているだけだろう。

人が自分の「意識が眠っている」と認めることができたとき、すでに意識が目覚め始めたと確信してよいだろう。

「意識」の存在すら否定し、そのような言葉さえ不用だとする、時代遅れの復古的心理学は、そのこと自体が最も深い眠りの状態にあるということをさらけ出している。そのような学説の追隨者たちは、実際のところ下位意識、無意識の状態でもとても深く眠りこけているのである。

意識を心理的機能であるとか、思考、または感情的な気持ち、あるいは運動機能の衝動や感覚などと混同する人は、その人自身が実際に無意識的で、大変深く眠りこけているのである。

「意識」が存在することは認めるが、意識に様々な段階があることを容易に否定する人というのは、意識が眠っていることや、意識が目覚めた経験がないことをさらけ出しているようなものである。

一度でも瞬間的に意識が目覚めたことのある人は、自分自身の中に観察可能な、様々な段階の意識があるということを自らの体験でよく知っている。

第一番目―時間。どれくらい長く、われわれは意識を目覚めさせていられたのか。

第二番目―回数。何度、われわれは意識を目覚めさせることができたのか。

第三番目―広さと浸透力。何について、意識が目覚めていたのか。

『心理革命』と古代のフィロカリア<sup>\*</sup>は、ある種の凄まじき努力によって、意識を目覚めさせ、それを継続

させ、かつコントロールできるようにすると断言している。

『根元的教育』の目的は、意識を目覚めさせることである。十年、あるいは十五年の間学校で勉強をしたとしても、教室を後にしたとき、眠りこけたロボットのままであれば、それは何の役にも立たない。

ある大変な「努力」をすることによって、インテレクチュアル・アニマルはほんの数分間だけどうにか意識を目覚めさせることができるのだ、と断言しても決して大げさではない。

明らかにこの点に関しては、ディオゲネスの灯りで探して、やっと見つかるほどのまれな例外もある。そのまれなるケースとは仏陀、イエス、ヘルメス、ケツアルコアトルなどの真正なる人たちのことである。

これら宗教の始祖なる方々は、「継続的に意識が目覚めていた」人たちであり、偉大なる「正覚者」であった。

普通、人は自分自身について意識が目覚めていない。意識が継続的に目覚めていると思うのは幻想であり、これは記憶と思考の過程によって生まれるのである。

自分の人生を想い出すために回顧的な練習を実践する人は、本当に過去のこと（何回結婚したか、何人の子供がいたか、自分の両親そして教師は誰々であったなど）を想い出すことができるが、しかしそれは意識が目覚めたということではない。それは単に、無意識の行為を想い出したに過ぎないのである。

今まで述べてきたことをもう一度繰り返し返してみよう。「意識」には四つの状態がある。それは眠っている状態、起きている状態、自分を認識する意識の状態、そして客観的意識の状態である。

誤って人間と呼ばれている哀れなインテレクチュアル・アニマルは、この四つの状態の二領域で生きている。人生のある部分は夢の中で過し、他の部分は起きていると呼ばれている状態である。しかしその起きている状態というのまた夢の中なのである。

眠って夢を見ていた人は、起きている状態に戻ったということで目が覚めたと思い込むが、実際には、その起きている状態の中でも、夢を見続けているのである。

これは夜が明けるのに似ている。夜が明けると星々は太陽の光りでかくれてしまうが、肉体的な目で知覚できないだけで、いぜん星々は存在し続けているのである。

ごく普通の当たり前な人生を送る人は、自分を知る意識については何も知らず、ましてや客観的意識についてはそれ以上に何もわからないのである。

しかしながら人はみな自尊心が強く、自分自身について意識が目覚めていると思い込んでいる。このインテレクチュアル・アニマルは自分自身を認識できていると信じているために、あなたは眠りこけている、自分自身を無意識で生きている、などと言われても決して認めることができないであろう。

例外的に、ある瞬間、インテレクチュアル・アニマルが目覚めることがある。しかしその瞬間はとてもまれである。とても危険な状態に陥った瞬間であるとか、激しく感情が動いたとき、また新しい環境に置かれたときであるとか、予想だになかった新しい状況に出くわしたときなどがそうである。

哀れなインテレクチュアル・アニマルが、意識のその移ろいやすい状態を全くコントロールすることもできず、それらと呼び覚ますことも、継続させることもできないのというのは、まことに不幸である。

しかし『根元的教育』では、人は意識をコントロールすることも、そして「自分自身を知る意識」を得ることもできると断言する。

『ノース心理革命』に「意識を目覚めさせる」ための科学的な方法や手順が示されている。

われわれが「意識を覚醒」したいと望むのであれば、進みゆく道に立ちほだかる障害物のすべてを調べ、学び、そして取り除いていくことから始める必要がある。

本書では、教室の椅子に座って学んでいるときから、「意識」を目覚めさせる必要性があることを解き示してきた。

\*フィロカリア 古代ギリシアの叡智

ノーシスをより深く知りたい方へ

◎関連図書

『ノーシス心理革命』（新泉社）

『アストラルトリップ』（徳間書店・トクマブックス）

『性エネルギー活用秘法』（学研・ムーブックス）

『完全なる結婚』（ノーシス書院）

『ノーシスプラクティス』（ノーシス書院、1993 年秋刊行予定）

◎問合せ先

全国各地で、日本のインストラクターによるノーシス講座が開催  
されております。興味のある方は、下記の日本ノーシス・インター  
ナショナルまでお問合せください。

日本ノーシス・インターナショナル

〒 113-91 東京都文京区本郷郵便局 私書箱 108 号

〒 546-91 大阪市東住吉区東住吉郵便局 私書箱 19 号

※訳者へのお問合せも、本郷郵便局私書箱 108 号へ。

ノーシス意識革命——根元的教育

---

1992 年 4 月 1 日・第 1 刷発行

定価 1800 円＋税 54 円（税込 1854 円）

著者＝サマエル・アウン・ベオール

訳者＝日本ノーシス翻訳グループ

発行所＝株式会社 新泉社

東京都文京区本郷 2-15-20

振替・東京 7-160936 番 TEL 03-3815-1662

印刷・太平印刷 製本・根本製本